

裁判所構成法講義目錄

總論

第一編 裁判所及ヒ檢事局

第一章

總則 五十二

第二章

區裁判所 八十五

第三章

地方裁判所 百十五

第四章

控訴院 百三十七

第五章

大審院 百七十一

第六章

裁判所及檢事局ノ官吏 百八十五

第七章

判事檢事ニ任ヒラル、ニ必要ナル準備及資格 百八十六

第八章

判事 百九十四

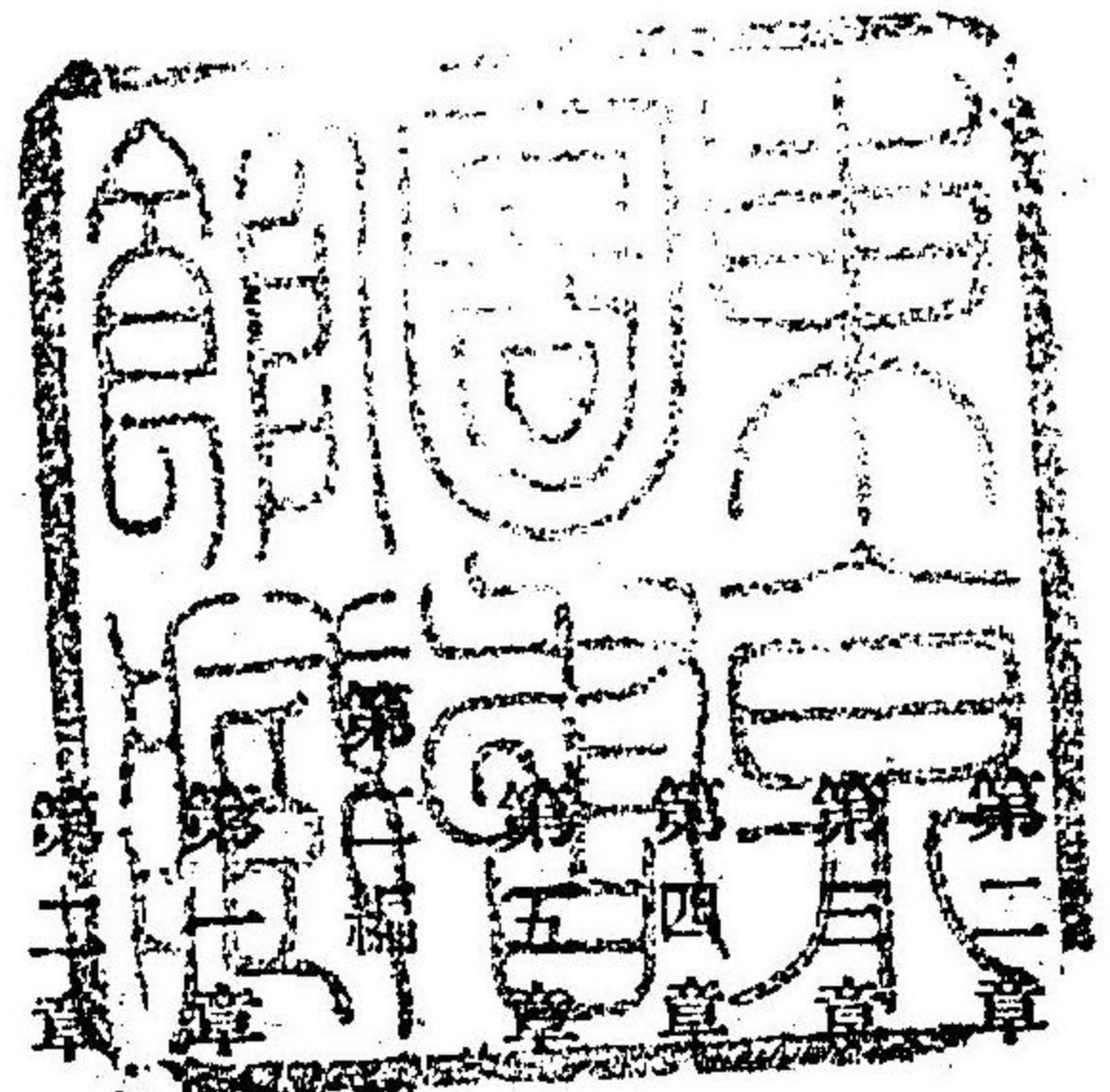
第九章

檢事 二百一

第十章

書記 二百八

目錄



第五章	執達吏	二百十三
第六章	廷丁	二百三十三
第三編	司法事務ノ取扱	二百三十四
第一章	開廷	二百三十四
第二章	裁判所ノ用語	二百四十三
第三章	裁判所ノ評議及言渡	二百四十六
第四章	裁判所及檢事局ノ事務章程	二百五十八
第五章	司法年度及休暇	二百五十九
第六章	法律上ノ共助	二百六十五
第四編	司法行政ノ職務及監督權	二百六十七

裁判所構成法講義目錄終

裁判所構成法講義

法律學士 本校講師 福原直道先生口述

本校校友筆記



論

裁判所構成法ヲ研究スルノ目的ハ則チ裁判權ノ運用裁判所全体ノ組立如何之
 方組織及職員如何及ヒ其職員ノ任免執務方法如何等ヲ會得シ之ト同時ニ此
 法之支配スルキ一般ノ原則ハ如何即チ其利害得失ヲ考覈スルニ在リ是レ之ヲ
 研究スル主眼目的ナリトス
 此ノ裁判所構成法ハ何カ爲メニ設定セラレタルモノナルカ一言以テ之ヲ蔽
 ハハ法律ハ遵奉ヲ確保シ、謹嚴以テ之ヲ執行セシメンカ、爲メナリ其故何ソヤ若
 シ夫レ此法ナクンハ最モ善良ナル最モ適實ナル且ツ最モ巧妙ナル法律令規ア

裁判所構成法

ルモ其効力ナク其成績ナク終ニ空文徒法ニ屬センノミ是ヲ以テ國民ノ生命財產自由安寧及ヒ民權政權ヲ保護シ且之ヲ鞏固ナラシムルモノハ實ニ法律ノ保護者タル裁判所構成法ノ庇蔭ニ由ラサルハナシ故ニ裁判所ノ構成ハ一國ノ政体ト殆ト唇齒ノ關係ヲ有シ乃チ此法ハ必ス政体ニ伴隨シ政体ト共ニ伸縮消長スルモノト謂ハサルヘカラス蓋シ司法權ノ基礎ハ不文法ノ治下ニ在テモ猶ホ能ク成立スルモノナレトモ憲法ニ由テ始メテ確立スルモノタルヤ各國舉ナ然ラサルハナシ

回顧スレハ早ヤ三年有餘ノ昔シトハナリヌ我叙聖文武ナル 皇帝陛下ハ去ル明治二十二年紀元節ノ大佳辰ニ於テ我等民衆カ歡呼喜聲ノ中ニ大日本帝國ノ基礎タル憲法ヲ發布シ給ヘリ是レ寔ニ建國二千五百有餘年以來未ダ曾テ有ラサル所ノ一大盛事一大美譽ニシテ我等臣民ニ大政翼贊ノ途ヲ開カセ給フト同時ニ裁判權ノ獨立ヲ明カニシ以テ我等臣民ノ生命自由名譽財產ノ保護ヲ鞏固ナラシメ給ヘリ尋テ翌二十三年二月法律第六號ヲ以テ此ノ裁判所構成法ナルモノヲ發布セラレタルハ畢竟憲法第五十七條裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ

定ムトアル明文ニ淵源シタルモノナリ此ノ如ク憲法中ニ特ニ明文アル所ヨリ觀ルモ裁判所構成法ナルモノハ吾人ニ至大ナル關係アルコトヲ明知スルニ足ラシカ

凡ソ自由制度ノ邦國ニ於テハ司法權ハ必スヤ獨立スルモノナリ乃チ法律ヲ制定スルノ權及ヒ執政行政ヲ爲スノ權トハ全ク相分離シ毫モ此等權力ノ干涉ヲ受クルコトナシ而シテ裁判官ハ決シテ專擅ニ事ヲ處分スルコトナク必スヤ法律ニ基キ良心ニ照シ以テ判決スルモノナレヘ其判決ハ最モ人民ノ尊重スル所ニシテ又其判決ハ他ノ權力ノ爲メニ侵サルコトナシ且夫レ裁判所ハ何人ニ對シテモ總テ均一平等ニシテ何人タリトモ原告ト爲リテ自由ニ起訴スルコトヲ得ヘク又被告ト爲ル者ハ自由ニ辯護スルノ權ヲ有スヘシ加之ス其場所ヲ公開ニシテ衆人ノ傍聽ヲ許スカ故ニ衆庶ハ間接ノ擔保ヲ爲シ隨テ其裁判ハ實ニ公明正大ナリト謂フヘキナリ

之ニ反シテ專制政治若クハ壓抑政治ノ下ニ在テハ裁判權ハ頗ル不確ニシテ人民ニ對シテ嚴正ナル擔保ハ毫モ之ナク且ヤ裁判所ノ管轄ハ人ノ身分又ハ政府

裁判所構成法

ノ都合ニ依リ毎ニ變更シテ一定スル所ナシ又訴訟ヲ提起シテ是非曲直ヲ辨セ
 シトスル者アレハ恣ニ之ヲ抑制シテ其權利伸暢ノ途ヲ防キ嫌疑ヲ被リタル者
 カ辯解以テ其冤ヲ雪カントスレハ之ヲ妨害シテ其口ヲ緘シ而シテ事實ノ審理
 ハ常ニ密行シテ曖昧ナルカ故ニ甚々其實ヲ得ス隨テ裁判官ハ五里霧中ニ彷徨
 シ爲メニ適正ナル處分ヲ爲ス能ハス偶々眞理ニ基キ良心ニ照シ以テ裁判セン
 トスルモ或ハ私怨ヲ恐レテ躊躇シ或ハ權力者ノ憎惡ヲ憚リテ之カ鼻息ヲ窺フ
 カ故ニ其判決ハ眞理ニ出テタルモノト云ハンヨリハ寧ロ畏懼ノ結果又ハ私恩
 ヲ得ルノ媒介タルニ過キサルナリ

抑モ一國ノ制度ハ執政行政司法共ニ等シク牽聯密接シテ相離レサルモノナル
 ヲ以テ其制度一タヒ改良スルトキハ同時ニ悉ク改良シ腐敗スルトキハ同時ニ
 亦悉ク腐敗スルモノナリ故ニ若シ政治機關ノ各部ニシテ進歩スルコトアラン
 カ一國ノ進歩期シテ見ルヘク又若シ其各部ニシテ苟モ傾廢スルコトアランカ
 一國ノ傾廢亦隨テ來ルヘシ就中司法制度ニシテ若シ其宜キヲ得サランカ國家
 ノ衰運立ロニ臻ラン故ニ或經世家ハ云ク裁判所ハ國家ノ基礎ニシテ國家ノ靜

穩ヲ維保スルモノハ獨リ裁判所アルノミト實ニ証言ニアラサルナリ夫レ然リ
 然ラハ則チ司法制度ハ最モ善良ナル組織ナラサルヘカラス又尤モ注意ヲ周到
 ナラシメサルヘカラス我邦ハ既ニ憲法國ナリ立憲制ナリ以テ吾人臣民ノ安寧
 保護ヲ鞏固ナラシメタリ爾レハ之ニ伴隨スル所ノ裁判所構成法ナカルヘカラ
 ス苟モ裁判所構成法ニシテ善良ナランカ他ノ制度モ亦勢ヒ改良セサルヲ得ス
 勿論法律善良ニシテ制度完備セルモ實地之ヲ運用スル其人ヲ得スンハ如何ニ
 善良ナル法律如何ニ完備セル制度モ遂ニ其目的ヲ達スル能ハサルヤ固ヨリ當
 然ナリ而モ組織ノ善良ナルカ爲メニ人民ノ安寧ヲ鞏固ナラシメ又規定ノ周到
 ナルカ爲メニ裁判權ヲ確立スルコトヲ得ルハ蓋シ裁判所構成法其物ニ在リ果
 シテ然ラハ如何セハ乃チ以テ善良ナル裁判所ヲ設置スルコトヲ得ヘキヤ又之
 ヲ善良ナラシメンニハ如何ナル方法ヲ採用スヘキヤ是レ吾人ノ須ラク研究ス
 ヘキ要點ナリ

抑モ裁判所構成法ノ基ク所ハ司法權是ナリ司法權ハ素ト行政權ノ一部ナレト
 モ而モ純然タル行政權トハ自ラ其性質ヲ異ニシ互ニ分離シ互ニ併行シテ相侵

司法權ノ實行

スコトナシ況ンヤ立法權ニ於ケルヲヤ是レ毫モ關係ナク互ニ獨立スルモノナリ而シテ斯ノ立法行政及ヒ司法ノ三權互ニ獨立分離スルコトハ現時憲法上ノ一大原則ニシテ今復タ敢テ茲ニ喋々スルノ必要ナシ然ラハ則チ司法權鞏固ニシテ其運用ヲ巧妙ナラシムルモノハ是レ裁判所構成法ノ大主眼トスル所タルヤ瞭乎トシテ夫レ明カナリ

司法權ノ實行

却説司法權ハ何レノ邦國ト雖トモ多少文明ニ進歩シタル所ハ舉ナ之ヲ裁判所ニ委任シ裁判所ヲシテ之ヲ行ハシムルハ蓋シ普通ノ制度ナリ今ヤ我國ニ於テハ畏クモ 天皇陛下ハ國ノ元首ニ在マシテ統治權ヲ總攬シ給フコトナレハ其支分權タル司法權ノ如キモ固ヨリ 陛下ノ掌握シ給フ所タルヤ明カナリト雖トモ既ニ憲法第五十七條ニ「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」ト規定セラレタル以上ハ 陛下ハ全ク之ヲ裁判所ニ委任シ給ヒ敢テ躬親ラ聞食ル、コトナシ乃チ之レカ委任ヲ受ケタル裁判所ハ唯々法律ニ基キ道理ニ照シ不羈獨立シテ之ヲ行ヒ敢テ何等ノ干涉ヲモ受クルコトナク即チ國會モ得

裁判官ノ地位

テ之ヲ蹂躪スルヲ得ス總理大臣モ得テ之ヲ抑制スルコト能ハス司法大臣モ亦得テ之ヲ妨害スルコト能ハサルナリ

裁判官ノ地位

斯ノ如ク司法權獨立ノコトヲ現ニ憲法ニ明定セル以上ハ實際上飽迄其獨立ヲ鞏固ニセサルヘカラス而シテ其方法タル固ヨリ種々アリト雖トモ就中其之ヲ行フ者ノ地位ヲ鞏固ニスルヲ以テ尤モ良法ナリトス若シ夫レ然ラサランカ條チ行政權ノ侵害襲來シ獨立ノ名アリテ其實ナキニ至ラン是レ憲法第五十八條ニ「裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其職ヲ免セラル、コトナシ」ト特書セルニモ拘ハラス尙ホ之ガ細則ヲ裁判所構成法中ニ規定セサルヘカラサルノ必要アル所以ナリ(第七十三條第七十四條第七十五條及第七十七條)

裁判官ノ資格

裁判官ノ資格

既ニ裁判官ノ地位鞏固ニシテ一タヒ其地位ヲ得タル者ハ容易ニ動カスコトヲ得サルヲ以テ之ヲ任用スルニハ其初ニ謹慎スルコト最モ必要ナリ蓋シ司法權ハ人民ノ生命、身体、名譽、財産ニ關係スルヤ實ニ重大ナルヲ以テ濫ニ庸愚ノ人ヲ

裁判官ノ
任命及ヒ
俸給

擧ゲテ之ニ任スルコトアルヘカラス若シ夫レ庸愚ノ人ヲシテ其任ニ當ラシメ
ンカ人民ノ安寧國家ノ秩序ヲ確保スル所以ノ者却テ之ヲ害シ之ヲ紊スニ至ラ
ン故ニ苟モ司法官ヲ任スルニハ最モ人物ヲ精撰シ學識及ヒ經驗ヲ具備スル者
タルヲ要ス是レ亦裁判所構成法中ニ特ニ規定セル所以ナリ(第五十七條以下)

裁判官ノ任命及ヒ俸給

裁判官ハ政府ヨリ任命シ國庫ヨリ俸給ヲ受クルコト必要ナリ換言スレハ人民
ヨリ撰擧シ人民ヨリ報酬ヲ受クルカ如キコトアル可カラス蓋シ司法權ハ行法
權ノ一部ナルヲ以テ政府カ裁判官ヲ任命スルハ固ヨリ其所ニシテ且政府ヨリ
任命スルモ免黜ニ關シ嚴肅ナル規則アルニ依リ決シテ其獨立ニ關係ナク又既
ニ政府ヨリ任命シ國家ノ事務ヲ分掌スル以上ハ國庫ヨリ俸給ヲ受クルハ是レ
亦當然ナリ此點ニ付テハ我國體ニ於テ毫モ疑フヘキ所ナシトス
然リト雖トモ主權ハ人民ニ在リトノ原則ノ行ハル、共和國ニ於テハ政府ヨリ
裁判官ヲ任命スルハ甚タ危險ナリトシ嘗テ之ヲ民撰ニセントノ說一タヒ世ニ
出テ彌ヨ之ヲ實行セントスルニ當リテヤ元來其說ノ趣旨トスル所ハ裁判官ノ地

裁判所ノ
階級

位ヲ鞏固ニシ以テ獨立セシメント欲スルニ在ルナルニ却テ之ヲ脆弱ナラシム
ルノ弊害ヲ惹起シタリキ其故何ツヤ蓋シ其裁判官ハ一定ノ任期ナキヲ得サル
カ故ニ改撰ノ期ニ至リ再ヒ投票ノ多數ヲ得ンコトヲ冀ヒ偏ニ撰擧人ノ歡心ヲ
買ハントシ爲メニ良心ヲ枉ケテ裁判スルコトアリ又自己ヲ撰擧シタル恩ニ報
ヒンカ爲メニ故ラニ其撰擧人ヲ勝訴セシムルコトアリ裁判官ノ獨立亦焉ソ望
ムヘケンヤ尙ホ况ンヤ人民ヨリ報酬ヲ受クルニ於テヲヤ夫レ人誰カ私慾ナカ
ラン其報酬ノ多キ者ニ私セント欲スルハ蓋シ人情ノ免ルヘカラサル所隨テ弊
害ノ生スルヲ得テ知ルヘキノミ是ヲ以テ裁判官ハ必ス官撰トシ且國庫ヨリ一
定ノ俸給ヲ與フルノ立憲君主國ニハ缺ク可カラサル制度ト謂フヘキナリ

裁判所ノ階級

司法官ハ獨立シテ事ヲ執リ毫モ他人ノ干涉ヲ受ケス且素ヨリ精撰シテ之ヲ任
用スト雖トモ猶ホ亦人ナリ焉ソ過誤ナキヲ得ンヤ不法ナル裁判ナキヲ保セン
ヤ故ニ其弊ヲ矯正セシムルニハ二個ノ裁判所ヲ連結セシメ一種ノ階級ヲ設ケ
以テ上下ノ別ヲ立テ其上級裁判所ヲシテ下級裁判所ヲ監督スルノ任ニ當ラシ

ムルコト最モ必要ナリ即チ總テ訴訟ハ必スヤ二回審査トシ下級裁判所ノ爲シ
タル裁判ヲ上級裁判所ヘ控訴スルコトヲ得セシメサルヘカラス是レ亦裁判所
構成法中ニナカルヘカラサル要則ナリ(第十四條第十六條第二十六條第二十七
條第三十七條第三十八條第四十一條)又事實ノ點ハ二回ノ審査ヲ爲シテ過誤無
シトスルモ法律ノ點ニ至テ背戾無シトセス故ニ又控訴ノ裁判ニ對シテハ更ニ
一種ノ審査無カル可カラス是レ上告ノ途ヲ開カサル可カラサル所以ナリ(第三
十七條第二項第五十條第一イ)

司法裁判所ノ管轄ス可キ事項

裁判所構成法中最モ貴ブ所ノモノハ司法裁判ニ屬スヘキ事件ハ勉メテ之ヲ網
羅シ同一ノ裁判所ヲシテ其事ニ當ラシムルコト是ナリ即チ實ニ止ムヲ得サル
場合ニアラサルヨリハ特別裁判所ヲ設ケ特別ナル方法ニ依テ裁判スルコトナ
ク又若シ止ムヲ得サルモノアルモ極メテ其範圍ヲ狹隘ニスルコトヲ必要トス
彼ノ法律ノ前ニハ何人モ平等ナリトハ現今爭フヘカラサルノ一大原則ナリ然
ラハ則チ何人ニ係ル訴訟ト雖トモ其天爵人爵ノ如何ニ拘ハラズ同一ノ方法ヲ

以テ同一ノ場所ニ於テ裁判スルコトハ甚タ必要ニシテ夫ノ一方ニ特權ヲ與ヘ
又ハ偏重ノ手段ヲ以テ一方ニ不利ヲ與フルカ如キハ非理ノ尤モ太甚キモノト
謂ハサルヘカラサルナリ
往昔ニ在テハ人ノ身分又ハ事ノ性質ニ依リ臨時ニ一種ノ裁判所ヲ設置シ一種
ノ手續ヲ創定シ以テ特ニ一方ニ利益ヲ與ヘ殊ニ被告ノ必罰ヲ期シタルコトア
リキ歐洲ノ如キハ其例敢テ少ナカラス我國治罪法ニ於テハ高等法院ノ設ケア
リ其趣旨タル被告人ヲ鄭重ニ取扱フニ在リ即チ一種格段ナル理由ヨリ出ツト
雖トモ而モ猶ホ一ノ變例タルニ相違ナシ而シテ構成法第五十條ニ依レハ刑法
第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ
更ニ重キ刑ニ處ス可キモノハ大審院ニテ管轄スルコトトセリ而シテ彼ノ高等
法院ナルモノハ此法律及ヒ刑事訴訟法ニ於テ之ヲ廢シタルヲ見ルナリ
又裁判所構成法第三十八條ニ於テ皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ一ノ特例ヲ規
定シタリ是レ皇室典範第五十條ヨリ來リシモノニシテ而モ其手續ヲ異ニセサ
ルカ故ニ之ヲ以テ非常ナル特例ト謂フヘカラス殊ニ皇族ハ我國ニ在テハ全ク

別種ニ屬スルニ依リ此特例アルモ亦敢テ怪ムニ足ラス然レトモ此他ノ者ニ至テハ縱令如何ナル高等ノ地位ヲ占ムルモ決シテ特例ヲ設クルコトナシ頗ル自由國ニ適シタル法律ナリト評スヘシ

憲法第六十條ニ曰ク「特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム」トアリ是レ行政處分ヲ以テ擅マ、ニ特別裁判所ヲ設ケテ以テ爲メニスル所ナキヲ示シタルモノナリ而シテ所謂特別裁判所モ行政ニ關スルモノハ格別然ラサル以上ハ可及的裁判所構成法中ニ包羅センコト是レ吾人ノ切望ニ勝ヘサル所ナリ

裁判所開廷ノ場所

裁判所開廷ノ場所

裁判所ハ其場所ヲ轉移セストハ是レ我裁判所構成法ノ精神ナリ故ニ一タヒ某地ニ裁判所ヲ設置スト定メタル以上ハ必ス其地ニ在テ裁判シ巡回裁判ヲ爲スカ如キコトナシ其故タル素ト裁判所ハ訴訟人ノ爲メニ設ケタルモノニシテ而シテ訴訟ハ何時提起スルヤ得テ豫知スヘカラス然ルニ若シ裁判所ハ此地ヨリ彼地ヘ轉移スルモノトセンカ訴訟人ハ爲メニ其隣ヲ追ハサルヲ得サルニ至リ縱ヒ

裁判所ノ常設

裁判所ノ常設

訴訟ヲ提起シテ受理セラル、コトアルモ必スヤ其審理ヲ遲緩ナラシメン夫レ斯ノ如クシハ訴訟人ノ不便果シテ如何ソヤ之レヲ要スルニ裁判所ハ其場所ヲ一定シ訴訟人ヲ待ツノ制度タラサルヘカラス而シテ現今ノ各裁判所ハ其設置ノ場所一定シ決シテ移動スルコトナシ故ニ我裁判所ノ性質ハ不動ノモノタリ本法第百三條第一項ニ曰ク「開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス」ト又其第二項ニ曰ク「司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其管轄區域内ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得」ト實ニ本條ハ右ノ原則ヲ規定シタルモノナリ謂ハスヤ一定ハ場所ニ於テ云々ト故ニ英國ノ如ク決シテ巡回裁判ヲ爲サ、ルナリ又其一定ノ場所ニ於テ特ニ職務ヲ行ハシムルコトアルモ平常裁判所ノ設置シタル場所ニ於テハ猶ホ依然トシテ職務ヲ行フヘキモノトス即チ轉轄シテ他ノ場所ニ於テ職務ヲ行フモノニ非ス是レ裁判所ハ其場所ヲ轉移スルコト無キモノナリ、

裁判所ハ常設ナラサルヘカラス所謂常設トハ間斷ナク事務ヲ執リ決シテ時ヲ

期シテ裁判所ヲ設クルカ如キコトナキ是ナリ抑モ争論ハ時ヲ期シテ起ルモノニ非スシテ何時争論ノ起ルヤ得テ豫知スヘカラス而シテ裁判所ハ人民ノ爲メニ設クルモノナレハ其何時ニテモ起ルヘキ争論ヲ受理シ之ヲ判決スルノ義務アルモノトス若シ夫レ然ラスンハ裁判所ハ人民ノ用ヲ辨セス其用ヲ欠クニ至ラン是レ此原則ノ因テ生スル所以ナリ故ニ此原則ハ前ノ裁判所ハ其場所ヲ轉移セストノ原則ト其根原ヲ同フスルモノトス但此原則ニハ二個ノ例外アリ即チ左ノ如シ

第一 普通休暇 普通休暇トハ日曜日祭日等一般普通官吏ノ休暇スルモノヲ謂ヒ裁判所モ猶ホ此日ニハ事務ヲ取扱フコトナシ

第二 特別休暇 特別休暇トハ毎年七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ル所謂暑中休暇是ナリ從來ノ例規ニ依レハ暑中休暇ハ一般官吏ニ普通ノモノナリシモ他ノ官吏ハ毎年特ニ下賜セラル、モノニシテ法律上當然之ヲ受クルニアラス法律上當然之ヲ受クルモノハ現今ニ於テハ單リ裁判所アルノミ(第二百二十七條)而モ裁判所ハ休暇中ト雖トモ全ク事務ヲ取扱ハサルニ非ス乃チ或ル事件ニ

付テハ猶ホ之ヲ取扱フモノトス(第二百二十八條及ヒ第二百二十九條)

裁判所ノ公開

裁判所ノ公開 裁判ハ之ヲ公開スルヲ以テ原則トス蓋シ此原則タル憲法ニ特書大筆スル所ニシテ吾輩臣民タル者ハ永ク其慶ニ頼リテ以テ權利自由ヲ安全ナラシムルコトヲ得ヘシ而シテ其趣旨ヤ自ラ釋然タルカ故ニ敢テ余ノ説明ヲ待タスシテ明カナラン

民刑裁判權ノ合一

民刑裁判ト刑事裁判トハ共ニ同一ノ裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ原則トス故ニ區裁判所ハ民事ニ於テ金額又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求及ヒ價額ニ拘ハラス或ル民事訴訟ヲ裁判スルノ權ヲ有スルト同時ニ刑事ニ於テ違警罪及ヒ或ル輕罪ヲ裁判スルノ權ヲ有シ又地方裁判所ハ民事ニ於テ區裁判所ノ權限又ハ特ニ控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其他一切ノ民事訴訟及ヒ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴又ハ其決定及ヒ命令ニ對スル抗告ヲ裁判スルノ權アルト同時ニ或ル例外ヲ除キ一切ノ刑事訴訟及ヒ區裁判所ノ刑事判決ニ對スル

民刑裁判權ノ合一

控訴ヲ裁判スルノ權アリ控訴院及ヒ大審院ニ於ケルモ亦然リ(第十四條第十六條第二十六條第二十七條第三十七條第五十條)

右ノ如ク定メタルハ要スルニ特ニ民事刑事ノ裁判所ヲ各別ニ設置スルノ必要ナク且裁判權ハ民事ニマレ刑事ニマレ本來其根源ヲ同フスルモノニシテ各相異ナルモノニ非ス殊ニ其裁判所ヲ各別ニ設置スルニ於テハ爲メニ莫大ナル經費ヲ要ス是レ必要ナキニ費用ヲ徒費スルモノナリ則チ民刑ノ裁判權ヲ同一ノ裁判所ニ屬セシメタル所以ナリ爾レハコソ各裁判所ハ毎年事務ノ分配並ニ代理ノ順序ヲ定メ各裁判官交互其事務ニ任スルコト、爲セリ(第十一條第十三條第二十二條第三十六條第四十五條)

裁判所ノ配置

裁判所ノ配置ニ關スル原則アリ凡ソ裁判所ハ事件ノ多少ト土地ノ遠近トニ從テ其數ヲ増減スルコト最モ緊要ナリトス蓋シ此原則タル管ニ裁判所ノミナラス他ノ各官廳ノ配置ニ於ケルモ大概子之ニ據ラサルハナシ而シテ今ヤ裁判所構成法ヲ通閱スルニ特ニ此ノ如キ明文ナシト雖トモ熟ラ其精神ヲ推覈スルト

キハ克ク此原則ニ適ハシムルモノ、如シ故ニ之ヲ一言セントス諸君モ知ラル、カ如ク我東京市ノ如キハ其土地ノ區域ヨリ觀察スレハ甚タ狹隘ナリト雖モ大小事件ノ起ルコト實ニ日ニ數十件數百件ヲ以テ數フヘク現今市内ニ五ヶ所ノ區裁判所ヲ配置セルモ尙ホ足ラサルヤノ感ナキ能ハス爾レハ事件ノ繁多ナル所ニハ隨テ數多ノ裁判所ヲ設置スルノ必要アリ而モ事件ノ僅少ナルモ距離ノ遠隔セル地ニ在テハ亦特ニ裁判所ヲ設置セサルヘカラス其故何ソヤ今夫レ裁判所ノ力ニ頼リ以テ自己ノ權利ヲ伸暢セントスル者モ其裁判所ニ到ルノ距離遠隔ナルトキハ費用ノ負擔ニ堪ヘサルカ爲メ遂ニ權利ヲ枉屈スルニ至ラン果シテ斯ノ如クシハ豈ニ裁判ヲ拒絕スルト異ナランヤ又縦シヤ費用ノ負擔ニ堪ヘ得ルモ裁判所ノ遠隔地ニ在ルトキハ多クノ時間ヲ要スルニ依リ勞働ニ因テ生活スル者ハ實際賠償ヲ得ヘカラサル無用ノ時間ヲ空費スルニ至ルヘシ殊ニ刑事訴訟ノ如キハ若シ裁判所ノ遠隔ナルトキハ容易ニ犯罪人ヲ逃走セシムルノ恐レアリ試ミニ看ヨ彼ノ諸方ニ徘徊スル盜兒ノ如キハ陰顯出沒殆ト思議スヘカラス實ニ瞬間ニシテ其地ヲ轉シ其跡ヲ晦マスモノタルヲ而シテ

拘引狀ハ裁判官ニアラサレハ發スルコトヲ得サルカ故ニ先ツ被害者カ告訴ヲ爲シ次ニ檢察官カ起訴シ而シテ後之ヲ發スルモノナレハ被害者告訴ヲ爲サントスルモ其手續ヲ爲ス間ニハ多クノ時間ヲ消費シ時機ヲ失シ實際之ヲ施行セントスルモ被告人ハ既ニ逃走シ復タ及ハサラントス畢竟此等ノ弊害タル一ニ裁判所ノ遠隔ナルニ因ラスンハアラサルナリ

夫レ然リ故ニ少クモ下級裁判所ノ管轄地ハ其所在地ヨリ最モ隔離セル地ニ住居スル者ニテモ徒歩シテ裁判所ニ到リ所用ヲ辨シテ其日ニ歸ルコトヲ得ヘキカ如ク爲スヲ以テ適當ナリトセン之ヲ換言スレハ其管轄地ノ中央ヨリ極端ニ至ル迄ハ大約三四里ノ距離ヲ出テサルヲ要スルコト是ナリ

斯ノ如ク裁判所ノ區域ヲ定ムルモ若シ其區域内ノ人民ハ必ス其地ノ裁判所ニ出訴セラルヘキモノナリトノ規定ナキニ於テハ全ク徒法空文ニ屬シ其目的ヲ達スルコト能ハサルニ至ラン何トナレハ縦令自宅ノ近傍ニ裁判所ノ設置アルモ對手人カ遠隔地ノ裁判所ニ訴フルトキハ亦必ス其裁判所ノ裁判ヲ受クルヲ要スルモノトセハ乃チ法律ニ定メタル管轄權ハ更ニ何等ノ効用ヲモアラサレ

ハナリ此ニ於テカ裁判籍ナルモノヲ設クルハ必要ヲ生セリ(民事訴訟法第十條以下)

右述フルカ如ク地形ハ最モ人民ノ自由ニ關スルモノナルカ故ニ地形ニ依テ裁判所ヲ設置スルハ固ヨリ當然ナリ而モ實際ニ至テハ必スシモ之ニ依ルコト能ハサル場合アリ何ソヤ若シ夫レ全國裁判所ノ配置ヲシテ悉ク此設計ニ從ハシメンカ必スヤ數多ノ裁判官ヲ要シ隨テ巨額ノ國費ヲ増加スルニ至ラン殊ニ學識經驗才能ニ富メル多クノ人士ヲ擧テ裁判事務ニ當ラシムルハ最モ難シトスル所ナリ今假ニ多クノ裁判官ヲ要スルモノトセハ勢ヒ淺學短才凡庸ノ人士ヲ採用セサルヲ得ス果シテ然ラハ裁判所ハ其根原ニ於テ既ニ腐敗シ其極善良ナル裁判ヲ下シテ以テ人民ヲ安堵セシメント欲スルモ豈亦得ヘケンヤ加之裁判所増設ノ不可ナル點ハ裁判公開ノ原則ヲ傷ルモノト謂フヘシ抑モ裁判公開ノ利益ハ即チ衆人ノ傍聽ヲ許シ其裁判手續ノ利害得失並ニ裁判官ノ動作ヲ視察シ以テ間接ニ裁判官ヲ監督スルニ在リ而シテ裁判公開ノ實效ハ當ニ裁判所ノ多キニ因ルノミナラス畢竟傍聽人其人ノ種類及ヒ智識ノ程度ニ關スルモノ

ナリ今夫レ山間僻陬ノ地ニ一ノ裁判所ヲ開設シタリト假想セヨ傍聽人ノ數ハ甚々僅少ニシテ當初或ハ物珍ラシキカ爲メニ見物ガテラ出掛ケル者アルヤモ亦知ルヘカラスト雖トモ彼ノ裁判官其人ノ能否其働作ノ得失並ニ裁判手續ノ當否ヲ鑑別スルノ眼識ニ至テハ恐クハ絶無ナラン果シテ斯ノ如クハ裁判公開ノ實益將タ那邊ニカ在ル

是ニ由テ之ヲ觀レハ裁判所ハ濫リニ設置スヘキモノニ非ス之ヲ詳言スレハ裁判所ノ配置ニ關シ地理ニ依ルノ原則ハ人口ニ從フノ原則ニ一歩ヲ讓ラサルヘカラス故ニ善良ナル裁判ヲ受ケシメンニ止ルヲ得ス當事者ヲシテ多少ノ費用ト時間トヲ費サシメサルヲ得ス故ニ裁判所ニ近接スルノ利益ハ如何程大ナルニモセヨ學識經驗ニ富メル裁判官カ爲ス所ノ善良ナル裁判ヲ受ケルノ利益ニ孰與ツヤ

斯ク見解ヲ下セハ乃チ裁判所ハ其地形ト人口トニ依テ配置スヘキモノナルヲ知ル然レトモ先ツ其人口ニ重キヲ置クヲ要ス唯場合ニ因テハ人口ノ如何ニ拘ハラズ便宜ノ配置ヲ爲スヲ要ス是レ裁判所構成法第三十一條ノ規定アル所以

合議制、單獨制、可否

ナリ同條ニ曰ク司法大臣ハ地方裁判所ト其管轄區域内ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若クハ交通不便ナルカ爲メ至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及ヒ刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲メ若クハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム(第二項以下略之)ト此場合ニ於テハ區裁判所ノ權限ハ大ニ擴張スルモノト謂フヘシ是レ畢竟土地ノ便宜ニ依ルモノタルヲ知ルニ足ランカ

合議制、單獨制、可否

茲ニ裁判所構成法上ノ原則トシテ一ノ大ナル問題アリ裁判所ハ合議制ト爲スヘキカ將タ單獨制ト爲スヘキカノ點即チ是ナリ此問題タル百年以降歐洲ニ於テ大ニ議論ノアリシ所ニシテ業已ニ諸大家ノ論シ罄シ亦更ニ論辯ヲ要セサルモノ、如シ然レトモ余輩ノ見ル所ニ依レハ未タ決シテ議論ノ一定シタルニ非ス故ニ今日ニ於テモ論者中或ハ合議說ヲ主張スル者アリ或ハ單獨說ヲ唱道スル者アリ唯今日ノ實際ヲ通觀スレハ合議制ヲ採用スル國多キノミ而シテ實際其制ヲ採用シタル邦國多シト云フヲ以テ未タ必スシモ之ヲ最良ナル制ナリト

ハ謂フ可カラス我邦曩キニ治罪法ノ制定セラル、ヤ輕罪裁判所以上ハ盡ク合
 議制ナリシモ實際ニ在テハ合議制ハ控訴院以上ニシテ輕罪裁判所以下ハ單獨
 制ヲ採レリ但輕罪裁判所ニテモ違警罪ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判スルニ付テ
 ハ猶ホ合議制ヲ用井タリ然ルニ此裁判所構成法ニ依レハ最下級ニ屬スル區裁
 判所ヲ除クノ外ハ總テ合議制ト爲セリ
 今夫レ吾人皮相ノ見ヲ以テスレハ合議制ハ其利益甚々至大ニシテ實ニ完全無
 缺ナルカ如シ諺ニ言ハスヤ三人寄レハ文珠ノ智慧ト孔子曰ク三人行必有我師
 焉ト又歐洲ニ言ヘルアリ曰ク一人ノ腦力ハ二人ノ腦力ニ若カスト蓋シ其義孰
 レモ多數ノ人相集マレハ何事ニ關セス明案良策ノ出テ能ク彼此ノ得失ヲ知ル
 コトヲ得ルト謂フニ在テ洋ノ東西ヲ問ハス時ノ古今ヲ論セス何人モ抱持スル
 所ノ通感常情ナリ然レトモ其實際タル必スシモ然ラス又夫ノ單獨制ハ定ニ危
 險ナリト謂フモ是レ唯杞客ノ憂ニ過キサルコトアリ要スルニ一利一害一得一
 失ハ數ハ免カルヘカラサル所ニシテ茲ニ論スル合議制及ヒ單獨制ノ兩者ニ於
 ケルモ猶ホ亦然リ

合議制ヲ可トスルノ理由ハ極メテ簡且明ナリ乃チ曰ク數人ニテ裁判ニ任スル
 トキハ其間必スヤ多少ノ意見ヲ異ニスヘク既ニ意見ヲ異ニスレハ茲ニ討議攻
 究スヘク已ニ討議攻究スレハ則チ其間ニ自ラ眞理ヲ明カニシテ決シテ誤認ニ陷
 ルコトナク甲裁判官カ注意ヲ欠クハ乙裁判官ハ之ヲ補充シ以テ正當適實ナル
 裁判ヲ下スコトヲ得ヘシ且夫レ數人ニテ事務ヲ擔任スレハ其間ニ自ラ鞏固ナ
 ル一個ノ團體ヲ樹テ、以テ運動スルカ故ニ獨立心ヲ充分ナラシメ且互ニ相制
 限シ敢テ情實ニ流ル、ノ弊ナク又專擅ニ涉ルノ害ナシ此故ニ一人ニテ裁判ヲ
 爲スハ數人ニテ之ニ干與スルニ如カス今若シ其數人ノ裁判官ニシテ學識才能
 各同等ナリトスルモ討議攻究ノ餘大ニ利益ノアルアリ又其學識才能不平等ナ
 リトスルモ猶ホ眞理ヲ發見スルコトアリ何トナレハ學識才能優等ナル者ニテモ
 時ニ或ハ過誤アリテ却テ其劣等ナル者ニ矯正セラル、コトハ實際往々目撃ス
 ル所ナレハナリ况ンヤ劣等者カ優等者ニ補助セラル、利益ノ大ナルヲヤ殊ニ
 一人ニテ裁判ニ任スルトキハ輒ク苞苴ノ行ハル、恐レアリ蓋シ裁判官一人ニ
 賄賂ヲ贈ルハ事秘密ニシテ裁判官モ亦之ヲ受ケ易カル可キモ之ニ反シ數人ニ

合議制ノ
不可ナル
点

合議制ハ
裁判官ノ
品位ヲ傷
害ス

テ裁判ニ任ズルトキハ其中ノ一人ニ賄賂ヲ贈ルモ實效ナキヲ以テ必ズヤ其數人ニ之ヲ贈ラサルヲ得ス然ルニ人ハ各其性質ヲ異ニスルヲ以テ其數人中或ハ之ヲ受クルモノアリトスルモ又之ヲ聽許セサル者アリテ顯ハシ易ク爲メニ其目的達シ難シ又數人ノ本心ヲ動サシメンニハ必スヤ巨額ノ費用ヲ要スルカ故ニ訴訟人ニ於テモ自然躊躇スル所アリ隨テ苞苴ノ容易ニ行ハレサルニ至ラン是ヲ以テ數人カ裁判ニ任ズルハ又賄賂ヲ防クニ大ナル利益アル制度ナリト謂フヘシト

寔ニ然リ然リト雖トモ又顧テ一方ヨリ觀察スレハ合議制ハ數箇ノ點ニ付キ不可ナル所アリ而シテ單獨裁判ノ大ヒニ利益アル所ヲ見ル請フ試ミニ之ヲ詳論セシ

第一 合議制ハ裁判官ニ缺クヘカラサル品位ヲ傷害ス

合議制ハ其裁判官ノ多數ナルニ隨テ倍々其品位ヲ下スモノナリ其理由ハ即チ左ニ叙述スル所ノ如シ

(一) 裁判官ノ責任ヲ薄フス 抑モ裁判官ノ正實ナルハ輿論ト謂ヘル裁判所又ハ

法律ト謂ヘル裁判所ニ對シテ有スル責任ニ在リテ存ス而シテ其責任ヲ全ク負フ者ハ唯單獨裁判官アルノミ其故何ツヤ蓋シ單獨裁判官ノ公衆ニ對スルヤ己レ一身ニテ裁判ノ責ニ當ルモノナレハ其自ラ爲ス所ノ裁判ヲ公衆カ認メテ以テ正當ナリ適實ナリト言フ點ニ依頼スルノ外他ニ自己ノ責任ヲ辯護スルモノナシ故ニ若シ單獨裁判官カ衆人ノ目前ニテ不正ノ行爲アレハ其誹謗忿怒ハ己レ一身ニ集リ決シテ之ヲ道ル、コト能ハサルナリ然ラハ則チ裁判官ハ勉メテ德義ヲ重シシ輕々事ヲ斷スルカ如キ憂ナク縱シヤ愛憎心アル裁判官ニテモ其地位此ノ如クナルカ故ニ勢ヒ至公至平ナル裁判ヲ爲サ、ルヘカラサルニ至ラシ之ニ反シテ合議制ハ裁判官ノ責任ヲ減少シ而シテ其減少ハ裁判官ノ多數ナルニ隨テ倍々太甚シキヲ見ル何トナレハ多數裁判官ノ互ニ相結托シテ鞏固ナル一ノ團體ヲ成スヤ各自ヲ大ニ依頼スル所アリ且衆人モ亦裁判官ノ多數ナルヨリシテ或ハ其裁判ヲ認メテ正當適實ナリト妄信スル者アルニ至ルヲ以テナリ

凡ソ毫モ動カスヘカラサル最モ正當適實ナル裁判ヲ爲サンニハ須ラク精覈審

查シ事實ヲ明カニシ法理ヲ考ヘ公平無私虚心平氣ニ判斷スルヲ要ス然ルニ合
議制ハ既ニ自ラ恃ム所アリ且多數ノ裁判官カ相集リテ事ヲ論スルモノナレハ
若シ各其意見ヲ異ニスルニ於テハ必スヤ多數ニ依テ之ヲ決定セサルヘカラス
而シテ此多數決ノ制ヤ便ハ即チ便ナリト雖トモ元是レ狀勢ニ依テ事ヲ決シ眞理
ニ依テ之ヲ決スルニアラス今若シ裁判官一體ノ勢力ヲシテ社會全般ニ普及ス
ルモノナラシメハ縱シヤ不當ノ裁判アルモ其裁判タル一種團體ノ所爲ニ出ツ
ルモノト看過シ敢テ之ヲ怪ム者ナカルヘク既ニ怪ム者ナシトセハ其裁判ハ強
チ不正ノモノト謂フヘカラス何トナレハ裁判官カ正當ナル輿論ニ順フモ又輿
論カ不當ナル裁判ニ盲從スルモ孰レモ其裁判ハ是認セラレハモノナレハナリ
然リト雖トモ裁判官一體ノ勢力ハ決シテ社會全般ヲ支配スルモノニアラス之
ニハ自ラ限界ノアルアリ寔ニ一部ノ者ハ合議裁判官ノ爲シタル裁判トシテ或
ハ之ヲ盲信シ是認スヘント雖トモ他ノ一部ノ者ハ敢テ其勢力ニ眩惑セス猶ホ
其裁判ヲ以テ不正不當ナリトスヘシ果シテ然ラハ縱令一部ノ者ハ安堵ノ思ヲ
爲スモ他ノ一部ノ者ハ大ニ恐怖ノ念ヲ起スニ至ラン蓋シ一種團體ノ爲ス所ノ

モノニシテ一部ノ者カ見テ以テ之ヲ當然トスルモ當時多數ノ輿論ハ之ヲ否ト
セシ實例ハ歴史ニ徴シ古來少カラサル所ナリ而シテ之カ局ニ當ル者ハ同僚ノ
多數及ヒ他ニ自己ノ措置ヲ是認スル者アルヲ輒ミ敢テ自ラ非理ヲ省ミサルコ
ト滔々タル天下比々皆是ナリ而シテ此事ヤ合議制ニモ亦適用スヘキナリ
之ヲ要スルニ合議制ハ一部ノ人民カ唯々裁判官ノ多數ナル一點ニ眩惑シ之ヲ
妄信スルノ傾向アルヨリシテ其裁判官ハ自己ノ勢力ヲ輒ミ知ラス識ラス不正
ニ陥ルニ至ル之ニ反シ單獨制ニ至テハ決シテ此ノ如キ弊害ナク其裁判官ハ唯
々自己一身ノ責任ヲ以テ其局ニ當リ其信スル所ニ從テ裁判ヲ爲スノミ彼ノ勢
力ヲ輒ムカ如キハ絶テ無キ所ナリ
(二)合議制ニ於テハ裁判官自己ノ爲シタル裁判ノ責任ヲ他ニ讓リ以テ之ヲ遁ル
ノ弊害アリ 縱シヤ全ク之ヲ遁ルハコト能ハサルモ其口實ヲ與フルモノト
謂フヘシ乃チ其裁判ハ合議裁判官數人ニテ之ヲ爲シ其中何人モ一人ノ爲シタ
ルモノニ非サルヲ以テ若シ人アリ其裁判ノ不正不當ナルヲ攻撃センカ之ニ干
與シタル裁判官ハ當ニ答フルナルヘシ彼ノ裁判ハ決シテ余ノ本心ヨリ出テシ

モノニ非サレトモ強固ナル且多數ナル反對論ニ制セラレ遂ニ之ニ抵抗スル能ハサリシヲ以テ事ノ此ニ至リシナリト而シテ自己ノ說薄弱ニシテ他ニ勝ヲ制セラルトキハ却テ謙讓ノ徳アリト忘想シ又怯弱ニシテ自說ヲ主張スルコト能ハサルトキハ却テ先輩ニ對シテ敬意ヲ表スルノ義アリト偏見シ畢竟斯ノ二個ノ徳義ヲ格守センカ爲メニ自己ノ本心ヲ枉ケ強テ他ニ從ヒタリト辯解シ又其說ノ分離シタルコト彌ヨ世上ニ明カナルニ於テハ其數裁判官ハ各曰ハン自己ノ說ハ少數ナリシカ爲メニ遂ニ敗ヲ取レリト焉ヲ知ラシ其裁判官ハ却テ其多數ノ說ヲ贊成シタルモノナルコトヲ若シ夫レ斯ノ如クシハ縱令裁判其物ニ不正不當ノ廉アルモ各口實ヲ構ヘ遂ニ其責任ノ歸スヘキ所ナキニ至ラン而シテ裁判ニ責任ノ歸スヘキ所ナキハ果シテ國家ニ利益アリヤ民人ハ安堵スヘキヤ甚タ憂慮ニ堪ヘサルヘシ

之ニ反シ單獨裁判官ニ至テハ決シテ右ノ如キ口實アルコトナシ乃チ其裁判ノ責任ハ全ク自己一人ニ歸ス故ニ其裁判ニシテ正當適實ナラシガ公衆ハ擧ゲテ之ヲ贊美賞揚シ以テ其裁判官ノ名譽トナルヘク若シ又其裁判ニシテ不當不適

ナラシガ公衆ハ口ヲ揃ヘテ非難攻撃シ以テ其裁判官ノ不名譽トナルヘシ要スルニ褒貶毀譽共ニ之ヲ受ク故ニ充分ノ能力ヲ振起シテ以テ善良適正ナル裁判ヲ爲スノ理ナリトス

(三)合議制ニ於テハ裁判官ハ物論ニ耐ヘ之ニ抵抗スルノ弊害アリ凡ソ二ノ團體ハ其人員ノ多數ナルニ隨ヒ倍ス鞏固タルモノナリ今試ミニ民間ニ一種格段ナル思想ヲ有スル一ノ團體アリト假定セヨ其團體中ノ者カ縱シヤ失敗スルコトアルモ其他ノ者ニ於テ之ヲ纏繞セハ稍ヤ其失敗ヲ救済スルコトヲ得ヘシ是レ多數ヲ以テ非理ヲ掩庇スルノ例證ニ非スヤ而シテ合議制多數ノ意見ハ固ヨリ民間ニ於ケル一團體ノ意見ト比スルヲ得サルモ其意見ノ重キヲ致スヤ決シテ民間多數ノ意見ニ讓ラサルナリ且ヤ其裁判官ハ平素相會シ互ニ親密ナル交際アリ隨テ同僚ヲ敬愛シ其利益ヲ計ルハ蓋シ人情ノ常ナルヲ以テ尙モ事同僚ノ利害ニ關スルモノハ縱令正理ヲ捨ルモ猶且其名譽ヲ保ツニ汲々タルハ亦勢ノ免ルヘカラサル所ナリ果シテ然ラハ自ラ偏頗心又ハ黨派心ヲ生シ威ヲ藉リテ非ヲ遂ケ遂ニ裁判官タルノ名譽品格ヲ失フニ至ルヘシ夫レ斯ノ如ク合議裁

判官カ已ニ一種ノ團體ヲ成ス以上ハ縦令自己ニ反對セル太甚シキ物議輿論アルモ毫モ之ヲ顧慮セサルヤ必然ナリ

然ルニ單獨裁判官ハ單身孤立ナルヲ以テ彼ノ合議裁判官カ同盟團體ノ力ヲ藉リテ物議輿論ニ衝ルカ如キハ絶テ無キ所ナリ若シ夫レ單身孤立ナルニモ拘ハラズ強テ非理ヲ爲サンカ遂ニ其地位ヲ保ツコト能ハサルニ至ラン故ニ虚心平氣唯自己ノ信スル所ニ從テ裁判シ其是非ノ如キハ一ニ世評ニ任スルノミ

(四)合議制ハ單獨制ヨリモ却テ誤謬ニ陥リ且ツ情弊及ヒ賄賂ノ行ハレ易キノ弊害アリ 諸君ヨ試ミニ眼ヲ放チテ合議制ノ實相ヲ熟視セヨ其裁判官ノ腦裡ニハ必スヤ各一個ノ說アラシ故ニ事毎ニ相争ヒ以テ之ヲ討議攻究スルカ似シト雖トモ實際隱然其間ニ默從ノ狀體アルヲ奈何セン蓋シ其能ク一說ニ歸シ調和圓滿ナルハ抑モ亦怪ムニ足ラス是レ其裁判官中ニ一人ノ勢力者アリテ他ハ之ヲ畏敬シ其說ニ服スルニ因ル之ヲ例ヘハ勢力アル裁判官ニシテ原告ヲ直者トセハ他ノ裁判官モ亦同ク之ヲ直者トシ又被告ヲ直者トセハ他ノ裁判官モ亦同ク之ヲ直者トスルカ如シ此言タル甚タ極端ニ奔ルカ似シト雖トモ是蔽フヘカ

ラサルノ傾向ナリトス此故ニ若シ訴訟人ニ於テ要求スル所ヲ容レシメント欲セハ就中勢力アル裁判官ニ依頼シ以テ之ヲ籠絡スレハ可ナリ蓋シ其請托ヲ容ルヤ之カ器械ト爲リ隱然其意嚮ヲ示ス而シテ他ノ裁判官ハ知ラス識ラス之カ意ヲ承ケテ事ニ當ルカ故ニ裁判以前ニ於テ業已ニ其目的達シタリト謂フヘシ豈情弊賄賂ノ行ハレ難シト謂フヲ得ンヤ且斯ノ如ク其說ノ當否ヲ問ハス其意見ノ是非ヲ論セス他ノ裁判官ハ一ニ勢力アル裁判官ノ意見ニ附和雷同スルモノナルヲ以テ若シ其意見ニシテ誤謬ナランカ他ノ衆裁判官モ相提携シテ共ニ誤謬ニ陥ルニ至ル

(五)合議制ニ於テハ裁判官ハ全然不正ノ事ナキモ半ハ不正ヲ爲スノ媒介ト爲ルノ弊害アリ 此弊害タル數名ノ裁判官カ會同合議スル場合ニ於テ自己ノ意見ヲ陳述セス若シ又之ヲ陳述スルノ止ムヘカラサルトキハ半ハ之ヲ陳述シ半ハ之ヲ陳述セサルコト是ナリ例ヘハ原告カ請求スル所ノ相當價額ハ眞ニ六百圓ト信スルモ之ヲ三百圓ナリト述フルカ如シ是レ其裁判官ノ袖裡ニ苞苴潜伏シ私カニ爲メニスル所アルニ因ル而シテ此意見ハ裁判ノ全部ニ波及スルモノト

ス何トナレハ正當ナル説ニ一個ノ同意ヲ失ハシムルヲ以テナリ隨テ其訴訟ニハ恰モ半ハ自説ヲ與ヘ半ハ他ニ同意シタルカ似キ結果トナルヘシ而シテ此等ハ一人ニテハ爲シ難キコトナルモ裁判官ノ多數ナルヨリ多衆ノ裡ニ隱レ人ニ目立タスシテ爲ス卑劣手段ノ弊害アリ

之ニ反シ單獨裁判官ニ至テハ決シテ右ノ如キ弊害アルコトナレ何トナレハ單獨裁判官ハ自己一人ノ信スル所ニ從ヒ訴訟ノ曲直及ヒ其價額ノ多寡ヲ判定スルモノニシテ彼ノ合議裁判官ノ責任ヲ曖昧ニ附スルカ如キハ其爲シ能ハサル所ナレハナリ

以上縷述セル所ヲ以テ假ニ其正鵠ヲ得タリトセハ合議制ハ實ニ衆庶ニ對シテ善良適正ナル擔保タルヲ得サルノミナラス却テ不正危險ナルモノニシテ且清廉忠直ナル裁判官ノ品位ヲ傷害スルモノト謂ハサルヘカヲサレナリ

今ヤ歩ヲ進メテ合議制ハ裁判官ノ性質上ニ如何ナル效益ヲ與スルヤ換言スレハ合議制ハ單獨制ヨリモ果シテ多クノ智識多クニ技術ヲ有スルヤ否ヤニ論及セシ

大凡ソ訴訟事件ハ簡易且明瞭ナルモノ多ク殊ニ裁判官カ痛神苦慮以テ裁判スルカ如キハ極メテ罕ナル所ナリ隨テ異論岐説ノ生ズルコトモ亦鮮シ是ヲ以テ普通ノ場合ニ於テハ合議裁判官ノ一人裁判長ト爲リ大概予自己一身ニテ審理シ事毎ニ他ノ數名ノ裁判官ニ委曲協議スルカ如キコトナク又其數名ノ裁判官モ裁判長ニ一任シ深ク意ヲ注クコト無ク又深ク思慮ヲ運ラスコト無シ而シテ裁判長モ若シ疑義ノ存スルアラハ時ニ協議スヘキモ然ラズハ敢テ協議スルコトナシ是實ニ普通一般ノ狀體ナリトス然ラハ則チ合議制ハ果シテ如何ナル期望如何ナル效益アリヤ蓋シ其期望其效益徒々外觀皮想ニ止マリ決シテ其實效實益アルモノニ非サルナリ故ニ數多ノ場合ニ於テハ裁判官ノ多數ハ虛名ノミ其實一人ニシテ他ノ裁判官ハ之ニ附隨スルニ過キス尙ホ評言スレハ合議制ニテ所謂三人五人七人等ノ裁判官アリトハ其實二人四人六人等ノ補助アルヘキ假裝ヲ呈セル一人ノ裁判官アリト謂フニ過キサルナリ且夫レ其虛名ニ屬スル二人四人六人等ノ裁判官アルカ爲メニ却テ實際事ヲ執ル所ノ主任裁判官ノ價値ヲ失墜スルモノト謂フヘシ其故何ツヤ他ナシ其主任裁判官ハ數名ノ補助協贊

ニ頼テ事ニ當ルノ外觀アルヲ以テ全ク自己一身ニテ事ヲ執ルヨリハ自ラ其信
 スル所深クシテ且粗漏ニ陥リ易キコト即チ是ナリ
 或ハ曰ク「裁判官數名ニテ從事スレハ其間ニ自ラ競争ノ念ヲ生シ充分討議攻究
 スルコトヲ得ヘキヲ以テ乃チ眞理ヲ發見スルニ容易ナリ」ト合議裁判官ニシテ
 實際討議攻究スレハ寔ニ論者ノ言ノ如シト雖トモ苟モ實際ノ狀況ヲ看破シ洞
 察スル者ハ此說ノ迂濶ナルヲ知ラン今其數名ノ裁判官カ各裁判所ヲ異ニセサ
 ルトキハ格別ナレトモ而モ同裁判所ニテ同一事件ヲ擔任スレハ概テ裁判長一人
 ノ說ニ同意スルヤ蓋シ人情ノ免ル、能ハサル所タルヲ奈何セン
 論者又曰ク「寔ニ簡易明瞭ナル事件ニ付テハ單獨制ハ乃チ可ナリト雖トモ繁雜
 複雜ナル事件ニ付テハ單獨裁判官ノ遠ク及ハサル所ナリ」ト今之ヲ詳言スレハ
 茲ニ頗ル煩雜ナル一ノ事件アリトセン而シテ人ハ各其注意ノ度ニ自ラ程限ア
 ルカ故ニ單獨裁判官ニテハ或ハ注意ノ足ラサルヨリシテ錯誤ニ陥ルコト往々
 之アラシク之ニ反シテ合議制ハ多數ナルヲ以テ其裁判官中一人ハ經驗アリ他ノ
 一人ハ才智アリ又他ノ一人ハ法理ニ通曉スルト云フカ如ク各自他ニ優秀ナル

所アリ即チ其長所ヲ集合具備スルカ故ニ注意周到ニシテ盤根錯節モ亦能ク調
 理スルヲ得ヘント謂フニ在リ
 右論者ノ所說タル一應理アルカ如シト雖トモ長所ハ必スシモ合議裁判官中ニ
 在リトハ未タ容易ニ信スヘカラサルナリ假ニ論者ニ讓ルニ數百歩ヲ以テシ多
 クノ場合ハ皆ナスノ如シトスルモ此說タル一ニ裁判官ニ重キヲ置キ他ニ之ヲ
 補助スル者アルコトヲ忘却セルモノト評セサルヲ得ス何ツヤ夫レ單獨裁判官
 ハ自己一身ニテ事ニ當ルモ其訴訟ヲ審理スルニ當テヤ原被兩造アリ又辯護士
 アリ蓋シ原被兩造ハ事實ヲ提供シ法律ヲ援引シ且立證ノ任ニ當ルモノニシテ
 其雙方ハ互ニ全ク反對ノ地位ニ立チ而シテ各自苟モ其利益ニ關スル點ハ決シ
 テ遺漏セサルヲ以テ裁判官ノ注意ヲ補足スルコト實ニ鮮少ナラサルナリ况ン
 ヤ辯護士ヲヤ故ニ必スシモ裁判官多數ヲ要セサルナリ且ヤ訴訟ハ大率テ二審
 ニシテ其一審ニ止マルハ實ニ輕微ナル事件ノミ(現制ニテハ一審ハ至テ稀レナ
 リ)論者ハ猶ホ此點ヲ忘却セルモノト謂フヘシ故ニ通常ノ訴訟ニ付キ第一審ニ
 テ萬一裁判官カ重要ナル點ヲ遺漏セルコトアルモ上訴ヲ爲シテ以テ之ヲ改正

セシムルコトヲ得ヘク而シテ其訴訟ヲ上級裁判所ニテ審理スルニ及ンテ此ニ始メテ裁判官ノ數名アル利益ヲ生スヘシ何トナレハ訴訟ノ第一審ト第二審トハ其裁判所ヲ異ニシ全ク二名ノ裁判官アリテ其各裁判官ハ其地位其利害ヲ異ニシ又其慣習其感情ヲ同フセサルヲ以テナリ而シテ第二審ノ裁判官ハ第一審ノ裁判中ニアル瑕疵ヲ充分補正スルノ權ヲ有スルカ故ニ單獨裁判官ノ錯誤モ亦敢テ憂フルニ足ラサルナリ加之單獨裁判官モ猶ホ他ニ智識ヲ得ルノ方法ナキニ非ス即チ若シ疑點アリテ裁判ヲ爲スニ逡巡躊躇セハ須ラク該事件ニ全ク關係ナキ専門家ノ意見ヲ聽クヘシ其意見ヲ聽クモ固ヨリ妨ケナク又其意見ニ從テ裁判スルモ亦支障アルコトナシ蓋シ他人ノ意見ニ從テ下シタル裁判ニ付テモ責任ハ全ク其裁判官ニアレハナリ

又論者ハ繁雜錯綜ナル事件ニ付テハ單獨制ハ洵ニ危險ナリト言フモ其所謂繁雜錯綜ナル事件ハ實際上極メテ稀有ノ例外ニシテ百件中少クトモ九十件迄ハ皆簡易明瞭ナルモノトス而シテ其殘餘十件中ニ付テモ九件迄ハ苟モ普通一般ノ法學ヲ研究シ法理問題ヲ決定スルノ思想ヲ有スル者ハ能ク之ヲ裁判スルコ

トヲ得ヘシ然ラハ則チ合議制ハ九十九件ニ對スルニ件ノ爲メニ特ニ必要ナリト謂ハサルヘカラス豈思ハサルノ太甚キモノト評セサルヲ得シヤ

斯ノ如ク論シ來ラハ論者或ハ詰問セン曰ク事件ノ難易ハ抑モ亦何ニ據テ之ヲ知レヘキカト然リ寔ニ事件ノ難易ハ或ハ之ヲ測リ知ルヘカラサルモノアラシ然レトモ一名ノ裁判官ニテハ到底裁判スルコト能ハスシテ數名ノ裁判官ナルトキハ必ス善良ナル裁判ヲ爲シ得ラルト謂フカ如キ事件ハ斷シテ之ナシト言フニ敢テ躊躇セサルナリ

且夫レ人ハ互ニ相依頼スレハ注意心應用力ハ爲メニ薄弱ト爲リ充分ニ其才能ヲ發達涵養スルコトヲ得ス此精神此心腦ヲ養成スルニハ實ニ自己一人ニテ事ヲ處理スルニ在リ爾レハ單獨裁判官コソ却テ才能アリ且其才能ヲ運用發達セシムルコトアリト謂フヲ得ヘク之ニ反シテ合議裁判官ハ其才能ヲ萎靡セシメ以テ之ヲ運用發達セシムルコトナシト謂ハシ又單獨裁判官ハ容易ニ其技倆ヲ發見スルノ效アリ即チ合議制ニテハ其裁判官ノ淺學短才ハ永ク之ヲ陰蔽スルコトヲ得ヘク即チ此輩ハ他人ト共ニシ他人ノ庇保ニテ漸ク事ヲ處理スルモ他ヨ

リ見テ容易ニ其才能ヲ知ルヘカラスト雖トモ一タヒ單身公ケノ劇場ニ出ツル
トキハ忽チ其假面ヲ脱セサルヲ得サルニ至ルヘシ之ニ反シテ單獨裁判官ハ決
シテ此ノ如キコトナク最モ自由ニ最モ活潑ニ自己ノ才能ヲ運用スルヲ得ヘキ
カ故ニ其能不能ハ直チニ知ルヲ得可ク一目以テ彼此ノ間ニ劃然タル差等アル
ヲ知ルニ足ランカ

右ハ合議制カ裁判官ノ品位ヲ害スルコトヲ説キタルナリ

第二 合議制ハ訴訟事件ヲ遅緩ナラシムルノ害アリ

凡ソ訴訟ハ急速ニ處決スルヲ要ス然ルニ合議制ハ之ヲ遅緩ナラシムルノ弊害
アリ之ヲ詳言スレハ總テ一ノ事件ヲ裁判スルニ當リテヤ其裁判官ノ數多ナル
ニ隨ヒ倍ス長キ時日ヲ費スモノトス而モ其費ス所他ニ得ル所アレハ即チ可ナ
リト雖トモ實ニ全ク無益ニ歸センノミ何ツヤ夫レ裁判官ハ各自多少ノ意見アリ
其意見ハ必スシモ擧テ名論卓説ニ非サルモ兎ニ角一ノ意見タルニ相違ナシ
荷モ一ノ意見ナリトセハ互ニ辯難攻撃スヘク而シテ其辯難攻撃スルハ即チ
合議制ノ利益ナル所ナリト謂フモ而モ各事件毎ニ異論百出セハ之ヲ一括決定

合議制ハ
訴訟事件
ヲ遅緩ナ
ラシム

スルニ甚タ至難ナルヘシ若シ又其裁判官中互ニ辯難攻撃スルコトナク常ニ能
ク一致スルノ慣習アラシカ是レ即チ各裁判官ハ互ニ分離セサランコトヲ勉ムル
ニ因ル此慣習タル甚タ嘉ニスヘキモノ、似シト雖トモ願テ一方ヨリ觀察スレ
ハ其強テ一致センカ爲メニ濫リニ自己ノ意見ヲ任ケ以テ現ニ不可ナリト信ス
ル所ノ説ニ雷同スルモノナリ是レ豈合議制ノ本旨ナランヤ若シ又各裁判官ノ
間ニ議論ノ派カル、コトアレハ互ニ調和センコトヲ計リ爲メニ會議ヲ他日ニ
延スカ如キニ至ルヘシ果シテ然ラハ一回ノ會議ヲ以テハ未タ決定スルニ至ラ
スシテ二回三回若クハ數回ノ會議ヲ開キ延期ニ延期ヲ累ネ其結果ヤ處分甚タ
遅緩トナリ而シテ其迷惑ヲ蒙ル者ハ唯訴訟人ノミ又若シ各裁判官カ抱持スル
所ノ説ニシテ大ニ相異ナリ互ニ固守シテ一步モ動かサラシカ勢ヒ枝葉ノ議論
ニ涉リ大切ナル訴訟ハ姑ク場外ニ抛チ更ニ裁判官中ニ一種ノ訴訟起リ此訴訟
ヤ裁判官ニ在テハ訴訟本案ヨリハ却テ各自ニ一層ノ利害ヲ感スルコト切ナル
ノ概ヲ呈シ裁判所ハ遂ニ討論會場トナルニ至ン訴訟人ニ取リテ迷惑ノ至リ
亦氣ノ毒千萬ナル次第ナラスヤ

裁判所構成法

合議制ハ
國家ノ經
濟上不可
ナリ

夫レ斯ノ如クンハ合議制ハ管ニ事件ノ落着ヲ遅延スルノミナラス公衆ノ感情ヲ害シ以テ其信用ヲ失墜シ又其裁判官ハ討議ニ因テ眞理ヲ發見セントスルヨリハ寧日之ニ因テ他ヲ壓倒シ心ニ快シトナサント欲シ徒ラニ勝敗ヲ争フカ故ニ遂ニ其德義ヲ害スルコト堪カラサルニ至ル

然ルニ裁判官一人ニテ事件ヲ處理セシカ徒ラニ辯舌ヲ闘ハスコトナク且空シク貴重ナル時日ヲ費ヤスコトナク又惡意ヲ以テ正論ヲ壓セラルカ如キコトナク唯自家ノ説ヲ以テ決定スレハ則チ可ナリ故ニ單獨制ハ訴訟ノ落着スルコト極メテ迅速ナリトス

第三 合議制ハ國家ノ經濟上ヨリ觀察スルモ不可ナリ

今ヤ論歩ヲ轉シ合議並ニ單獨ノ兩制ニ關シ更ニ經濟上ヨリ其利害得失ヲ推覈セントス是亦重要ナル論點ナリ夫レ數多ノ裁判官ヲ置キ之ニ與フル所ノ俸給ニシテ若シ不充分ナランカ能者ハ去テ復タ其職ニ止ラズ唯其地位ニ戀々トシテ之ヲ守リ之ヲ希望スル者ハ不能者トモ不肖輩トモ果シテ此ノ如クンハ善良適正ナル裁判亦得テ望ムヘカラス爾レハ迎充分ナル俸給ヲ與ヘンカ其額ノ莫

大ナル到底歲計ノ能ク支フル所ニアラス是ニ於テカ多數裁判官ヲ置クノ利害ハ面倒ナル議論ヲ要セス簡單ナル算盤上ノ計算ニテ業已ニ明確ナリ

諸君ヨ試ミニ思ヘ茲ニ月俸百圓ノ俸給ヲ受クル者アリ此者ヤ理論上三百圓ノ俸給ヲ受クル者ヨリハ迥ニ劣等ナリト謂ハサルヲ得ス今此百圓ノ俸給ヲ受クル裁判官三人アラハ總額三百圓ナリ合計三百圓ノ俸給ヲ受クル三人ノ者ハ二百圓ノ俸給ヲ受クル者ヨリハ果シテ善良ナル裁判ヲ爲シ得ル乎甚タ疑ヒ無キ能ハス一人百圓ノ人物ハ依然百圓ノ價格ナリ三人五人相集ルモ到底二百圓ノ人物ノ上ニ出ツルコト能ハサルヘシ爾レハ合議制ハ政府ニ於テ現ニ數多ノ損失ヲ爲シナカラ尙且不良ノ裁判ヲ爲サシムルモノト云ハサルヲ得ス其不經濟ナル不得策ナル豈察セサルヘカニヤ

以上詳論シタルカ如ク合議制ハ裁判官ノ品位ヲ傷害スル點ヨリ見ルモ訴訟事件ノ遅延スル點ヨリ見ルモ又國家經濟上ノ點ヨリ見ルモ以テ善良ナル制度ナリト謂フヲ得サルカ似シ然ルニ歐洲大陸ノ各國ニ於テ久シク此制ヲ採用セルハ抑モ何ソヤ

先ツ佛國ノ歴史ニ徴シテ之ヲ云ハニ佛國ハ實ニ古來ノ沿革ニ起因シタルモ
ノニシテ而シテ其沿革タル毫モ公益ニ關係ナキ源由ヨリ漸ヲ以テ習慣ヲ養成
セシニ過キス蓋シ其始メ各裁判所ハ孰レモ一名ノ裁判官ニテ裁判ヲ爲セリ然
ルニ王權日ニ増シ隆盛ヲ極メ事務ノ彌ヨ繁多ナルニ及ンテヤ隨テ巨額ノ政費
ヲ要スルヨリシテ此ニ賣官ノ制ヲ生シ裁判官タル官職モ亦政府ヨリ賣渡スコ
ト、爲リ大ニ裁判所及ヒ裁判官ノ數ヲ増加スルニ至レリ是舊來ノ制度ナリキ
其後夫ノ大革命ノ當時立憲會議ニ於テ裁判所構成法ヲ制定スルニ當リテヤ之
カ調査委員トナリシモノハ皆舊裁判官又ハ代言人ナリシカ此等ノ者ハ舊來ノ
事物ニ感染馴致シ居ルモノナルカ故ニ裁判官ヲ數多置クハ甚タ利益アリ信用
アリトノ迷想ヲ抱テ立案起草シ之ヲ以テ根基ト爲シタルヨリシテ遂ニ十九世
紀ノ今日ニ至ル迄猶ホ依然因襲採用セルノ結果ヲ見ルニ至レリ其他ノ各國ニ
於テモ因襲ノ久シキ見テ以テ怪シマス遇マ改革ヲ企テントスルモ官職ヲ失フ
者ノ多キ之カ處分ヲ難スルヨリ遂ニ斷行スルニ踟躕スルモノナリ
此他歐洲ニ於テモ何故ニ合議制ヲ以テ可トスルヤ其理由恐ラクハ左ノ二個ノ

迷想ニ在ラン

第一 一人ハ二人二人ハ三人ニ如カストノ通俗ノ思想ナリ此思想タル實際必
スシモ然ルヘカラサルコトハ前既ニ述ヘタル所ノ如シ
第二 權利ハ之ヲ別テ制限スルニ如カスト云フ政略的思想是ナリ此思想ノ基
ク所ノ利益タル要スルニ訴訟ノ秘密中ニ在テ存ス之ヲ詳言スレハ裁判官カ訴
訟事件ニ付キ各自意見ヲ陳述シ討議攻究シテ以テ是非曲直ヲ決定スルトキハ
互ヒニ相牽制シテ處分專横ニ流レス事中正ヲ得テ偏頗ニ傾クコト無シト寔ニ
權利ヲ別テ之ヲ制限セハ或ハ裁判官ヲ制肘シ幾分カ利益アルヘシト雖トモ其
利益ハ頗フル間接ニシテ而モ實際上必スヘカラサルコトハ是亦前既ニ述ヘタ
ル所ノ如シ寧ロ一人カ一身ニ責任ヲ負ヒテ事ヲ決シ其判斷ヲ公衆ニ一任シテ
以テ其公明正大ヲ保證スルニ如カサルナリ
又數人ニテ事ヲ決センニハ隨テ決議ノ規則ヲ設ケ又幾名ノ出席員アルヲ要ス
ル等ノ定メナカルヘカラス既ニ決議ノ規則ヲ設ケンカ其裁判ハ數名ノ意見ヲ
集メテ之ヲ取捨スルモノナルカ故ニ之ヲ適理適正ノ裁判ト云ハシヨリハ寧ロ

之ヲ雜駭裁判調和裁判混合裁判トモ謂フヘク又出席員數ノ規則ヲ設ケンカ一
名ノ欠席アルモ爲メニ事件ヲ延期シ時日ヲ遲緩ナラシムルニ至ラン又縱シヤ
他ノ者ヲ以テ補欠スルモ當初ヨリ該事件ニ關係セサルカ故ニ徒々其員數ヲ充
スノミ決シテ實益アルニアラサルナリ

又眼ヲ放テ上訴ノ場合ヲ見ヨ三人合議ノ第一審ニ於テ其二人ハ原告甲者ノ訴
求ヲ適當ナリトシ一人ハ被告乙者ノ申分ヲ可ナリトシタリト假定セン第一審
ニ於テ敗訴シタル乙者上訴シタルニ當リ五名合議ノ上訴裁判所ニ於テ其三名
ハ乙者ノ申分ヲ採用シタルトキハ前後二審ノ意見ヲ合算セハ當不當共均シク
四個ニシテ何レモ正シク同數ニ非スヤ其裁判所ヨリ相異ナレ數ヲ尙フ合議ノ
制ニ在テ同數ナランニハ何レヲ可トス可キヤ否トス可キヤ未タ判明ナラサル
可シ若シ上級裁判所ノ法官ハ智識才能共ニ優等ナリトノ故ヲ以テ其裁判ヲ極
上無比ナリトセハ是レ數ニ就テ立論スルモノニ非スシテ人ニ就テ地位ニ就テ
立論スルモノナリ若シ夫レ地位ニ就テ立論シ上級裁判所ノ法官ハ皆優等ナリ
ト云ハハ何カ故ニ上級裁判所ニハ法官ノ數特ニ多キヤ又人ニ就テ斯クモ重キ

ヲ置カハ上級裁判所ニハ二人ノ裁判官ニテ最モ俊秀ナルモノヲ特選シ優俸
ヲ與ヘテ之ヲ置カハ以テ充分ナルニ非スヤ又何ツ五人七人ノ多數ヲ要センヤ
況ンヤ又他ノ一例ヲ舉示スレハ合議制ノ甚々謂レ無キモノタルヤ甚々明カナ
ルヘシ

例ハ第一審ニ於テ判事五名ノ總體一致ヲ以テ裁判ヲ下シタリシニ其裁判ハ
上級審ニ於テ判事七名ノ中三名ニ對スル四名ノ多數ヲ以テ改更セラレタリト
セン此場合ニ於テ二審ノ數ヲ合算セハ八ニ對スル四ヲ以テ勝ヲ制シタルモノ
ニテ正サシク倍數ニシテ半數ノ壓スル所トナリシモノナリ要スルニ總數十二
個中僅ニ四個ヲ以テ終局ノ裁判ヲ爲シタルモノトス是レ果シテ數ヲ尊ム合議
制ノ本旨ニ適ヘリト爲スカ上級審ノ判事ハ下級審ノ判事ニ比シテ一層智識經
驗ニ富ムトノ推測アリト雖トモ此例ノ場合ノ如キ上級審ニ在テモ既ニ反對說
アリテ七名ノ判事中三名ハ第一審ノ裁判ヲ可ナリトスルモノナルカ故ニ比較
上一名ノ多數ニテ事ヲ決スルモノナレハ即チ優等判事一名ニテ下級審ノ裁判
ヲ改更スルニ至ルヲ以テ見レハ結局本案ノ裁判ハ第一審ノ判事五名ノ全體カ

我邦ニ於
テ合議制
ヲ採用セ
シ理由

爲シタル裁判ヲハ所謂智識經驗共ニ優等ナリトスル判事一名カ改更シテ終局
シタルモノナリト謂ハサル可カラス是レ亦多數中ニ正理在リ眞理存ストノ合
議制ノ本旨ナルカ余ノ不敏解スル能ハサル所ナリ

上來述フル所ノ如クハ合議制ハ毫モ利益ナク實ニ利益ナキノミナラス却テ
弊害ノ多キモノ、似シ然ルニ我立法者ハ何カ故ニ之ヲ採用モシカ余輩ノ不肖
淺學甚々之カ答ニ苦ム今ヤ考一考シテ僅ニ之ヲ發見セリ謹テ立法者ノ精神ヲ推
度センニ蓋シ我國今日ノ時勢民情ヲ通察シタル者ト思ワル抑モ多數裁判官カ
椅子ヲ並ヘテ裁判スレハ今日ノ普通人民ハ必スヤ安心スヘク是レ獨リ我國ノ
ミナラス歐洲ニ於テモ亦然リ殊ニ合議制ヲ以テ不可ナリトスル論者ノ憂フル
所ヲ可及的除却シタラシニハ敢テ大ナル弊害ナカルヘシ今若シ之ヲ人ニ譬ヘ
テ言ヘハ彼ノ單獨制ハ活潑機敏有爲ノ資ヲ具フル少年ニシテ時ニ或ハ善良ナル
裁判ヲ爲スコアルモ亦極メテ不良ナル裁判ヲ爲スヤモ知レサル危險ノ人物ナ
リ之ニ反シ合議制ハ溫良篤實注意周到以テ事ヲ處スルカ故ニ活潑ナル働キハ
無キモ先ツ以テ大丈夫ナル人物ナリ縱令過誤アルモ彼レカ如ク甚シカラス且

我合議制
ノ辯護

各國大概子合議制ヲ採用セルニ依リ之ニ模倣スルモ敢テ大ナル弊害アラサ
ルヘシ加之ス若シ單獨制トセンカ智識經驗ヲ具備スル有爲ナル數多ノ人物ヲ
要ス而シテ之ヲ我國ノ今日ニ望ムハ至難ナル事情ナシトセス是レ我立法者ノ
此制ヲ採用セシ所以ナランカ是レ法律ノ精神ナランカ依テ今我合議制ニ付聊
カ辯護ヲ試ミントス

第一 前示ノ如ク合議制ハ裁判官ノ責任ヲ薄フスト云ヘルノ點ハ實ニ有力ナ
ル議論ナルカ故ニ到底充分ニ辯護スルヲ得スト雖トモ凡ソ裁判官カ一ノ事件
ヲ裁判スルニ付テハ必スヤ之カ責任アリ而シテ其責任ヤ一人ノミニ歸ス可カ
ラスト雖トモ苟モ其裁判ニ關與スルニ於テハ連帶責任アル可キハ明カナリ既
ニ責任アレハ廉恥ヲ願ミサル裁判官ハ去來知ラス多少ノ德義心ヲ有スル裁判
官ハ相當ノ思慮ヲ費シ以テ其事ニ當ルヘキナリ

第二 合議制ハ裁判官カ不法ナル裁判ノ責任ヲ他ニ讓ルト云ヘルノ點ハ之ヲ
防止スルノ方法アリ本法第二百一十一條第二項ニ曰ク判事ノ評議ハ其裁判長之
ヲ開キ且之ヲ整理ス其評議ノ顛末並ニ各判事ノ意見及ヒ多少ノ數ニ付テハ嚴

ニ秘密ヲ守ルコトヲ要ス。ト即チ是ナリ蓋シ此ノ如クナレハ裁判官ハ出テ、自
 説ヲ人ニ示シ以テ之カ責ヲ他ニ譲ルコトヲ得サルヘシ
 第三 合議制ハ裁判官カ物議輿論ニ堪ヘ之ニ抵抗スト云ヘルノ點ハ之ヲ害用
 スルカ故ニ害アルノミ若シ夫レ之ヲ利用センカ甚タ適當ナル制度ト謂ハサル
 ヘカラス何トナレハ物議ニ堪ヘ輿論ニ抵抗スルハ即チ公正適實ナル裁判ヲ爲
 ス所以ノモノナレハナリ例ヘハ茲ニ一ノ事件ニ關シ政黨ノ騷擾スルコトアラ
 ンカ單獨裁判官カ毅然トシテ物議ニ制セラレス輿論ヲ壓シテ公明ナル裁判ヲ
 ナス可キヤ否ヤハ得テ保スヘカラス之ニ反シテ裁判官カ一ノ團體ヲ組立テ以
 テ職務ヲ執ルトキハ其團體ノ力強大ナルカ故ニ敢テ世論ノ脅迫ニ恐ル、コト
 ナク又政府ノ内情ニ制セラレ、コトナク不羈獨立以テ能ク至公至正ノ裁判ヲ
 ナスヲ得ヘキナリ蓋シ物議輿論モ時トシテハ正理ニ適ハス徒ラニ囂々シ唯勢
 力ヲ示スニ過キサルコトアレハ之ニ從フモ必スシモ適正ナリト謂フ可カラサ
 ルモノアリ殊ニ裁判ノ如キ公義中正ヲ尙フモノナルヲヤ
 第四 合議制ハ單獨制ヨリモ却テ誤謬情弊ニ陥リ且賄賂ノ行ハレ易シト云ヘ

ルノ點ハ本法第二百二十二條ニ於テ其弊害ヲ防止セリ同條ニ曰ク「評議ノ際各判
 事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キ
 トキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス」ト即チ是ナリ
 若シ此規則アラハ各判事ハ每事注意シテ等閑ニ附スルコトヲ得ス又裁判長ノ
 籠絡スル所トナリテ専ラ之カ意見ニ盲從スルカ如キ弊ヲ防クコトヲ得可シ
 第五 合議制ハ裁判官カ全部ノ不正ヲ爲サ、ルモ半ハ不正ヲ爲スノ媒介トナ
 ルト云ヘルノ點モ本法ニ於テ之ヲ防止セリ第二百二十四條ニ曰ク「判事ハ裁判ス
 ヘキ問題ニ付キ自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス」ト故ニ合議裁判官
 ノ一人カ或ハ意見ヲ開陳セス或ハ賛成若クハ不賛成ナル旨ヲ表示セス爲メニ
 正當ナル説ニ一個ノ數ヲ失ハシメ以テ不當ノ説ニ半ハ賛成ヲ與フルカ如キ結
 果ヲ生セサルヘシ又第二百二十三條ニ曰ク「裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル」(第一項)金
 額ニ付キ判事ノ意見三説以上ニ分レ其說各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ
 至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス(第二項)刑事ニ付キ其意見三説以
 上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見

ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス(第三項)ト故ニ例ヘハ茲ニ五名ノ裁判官アリテ八百圓七百圓六百圓五百圓三百圓ト各自其意見ヲ異ニスルトキハ結局六百圓ノ説ニ決定スヘシ然ラハ即チ前例真正ノ價額ノ百圓ノモノヲ三百圓ト爲スカ如キ弊害アラサルヘキナリ但完全ニ其弊ヲ防キ得ルトハ云ハザルナリ右ニ舉示セルカ如ク裁判ノ方法ヲ法律ニ規定スルハ固ヨリ策ノ得タルモノニ非スト雖トモ合議制ヲ採用スル以上ハ勢ヒ之ヨリ生スル諸般ノ弊害ヲ豫防セサルヘカラス而シテ可及的之ヲ豫防セハ合議ノ制モ亦利益無キニ非サルヲ以テ必スシモ我立法者ヲ非難スヘキニ非サルナリ要スルニ合議制ハ善良完全ナルモノニ非サレトモ夫ノ中ラスト雖トモ遠カラスト云ヘルカ如キ中庸主義ヨリシテ斯ノ制度ヲ採用セシモノニシテ又多數ノ者カ裁判ニ干與スルハ訴訟人ニ取リテ信用多キカ故ナランカ但余ハ世人カ合議制ヲ信用スル程信用セサルノミ

以上講述スル所ヲ以テ總論ヲ了レリ仍ホ此他ニ論スヘキモノ固ヨリ少カラスト雖トモ冗長ニ渉ルノ嫌アルカ故ニ今ハ之ヲ畧シ以下法文ニ就テ講述セン

裁判所
構成
性質

今ヤ法文ニ入テ講述スルニ先チ尙ホ一言スヘキ事アリ凡ソ法律ニハ公法ト私法トノ別アルコトハ今更多辯ヲ要セズ乃チ私法ハ一個人ト一個人トノ關係ヲ規定シタルモノニシテ公法ハ國家ト人民トノ關係及ヒ國家活動ノ機關組織ヲ規定シタルモノナリ而シテ此裁判所構成法ハ公法私法共孰レニ屬スルモノナリヤト云フニ勿論公法ノ一ナルコト明ナリ又公法中ニ規定法ト制裁法トノ區別アリ規定法トハ權利ト義務ヲ規畫シ若クハ命令禁止ヲ定ムルモノヲ云ヒ制裁法トハ規定法ヲ運用シ及ヒ規定法ニ違背セルモノヲ處分スルノ事項ヲ定メタルモノニシテ裁判所構成法ハ其規定法ニ屬スルモノトス

裁判所及
檢事局

却説裁判所構成法ハ全部ヲ四編ニ別チ第一編ニハ裁判所及檢事局ニ關スル事ヲ定メ第二編ニハ裁判所及檢事局ノ官吏ニ關スル事ヲ定メ第三編ニハ司法事務ノ取扱方ヲ定メ第四編ニハ司法行政ノ職務及監督權ノ事ヲ規定セリ

第一編 裁判所及ヒ檢事局

裁判所構成法

本編ノ表題ニ裁○判○所○及○檢○事○局○ト併記セシ理由ハ檢事ハ裁判所ニ詰所アリト雖トモ檢事局ナルモノハ裁判所内ニ設ケタルニアラス唯之ヲ裁判所ニ附置シタルノミ是レ裁判所ト檢事局ハ互ニ獨立シテ相從屬スルコトナク全ク別異ノモノナルヲ以テナリ蓋シ檢事ノ本分ハ國家ノ公益ヲ保護スルニアリ故ニ或ハ原告官トナリテ訴訟ヲ提起シ若クハ司法官應ヲ代表シテ訴訟ヲ辯護シ又ハ其必要ナル場合ニ於テハ民事ノ訴訟ニ關與スルノ職務ヲ有スルモノナリ之ニ反シテ裁判官ハ原被告兩造ノ間ニ立テ訴訟ヲ裁判スルモノナレハ全然其位地ヲ異ニセリ是レ裁判所及檢事局ト別記シ以テ自ラ其職務ノ異ナルヲ示セル所以ナリ然ルニ此構成法ニ裁判所ノ名稱ヲ冠シ而シテ其中ニ檢事局ニ係ル事項ヲ規定シタルハ要スルニ主タルモノハ裁判所ナルヲ以テ其主タルモノニ依テ名稱ヲ定メタルニ過キサルナリ

總則

第一章 總則

第一條 左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一 區裁判所

第二 地方裁判所

第三 控訴院

第四 大審院

通常裁判所

本條ニ列記シタル數箇ノ裁判所ハ此裁判所構成法ヲ以テ始メテ見ルニ非ス從來既ニ設置サレタル處ニシテ從前ノ治安裁判所ハ本條ノ所謂區裁判所ニシテ始審裁判所ハ本條ノ地方裁判所ナリ又控訴院ハ全シク本條ノ控訴院ニシテ大審院モ亦本條ノ大審院ナリ是レ裁判所構成法施行條例第一條ニ依テ明カナリ然レトモ從來ノ規則ト此裁判所構成法トヲ比照スルニ裁判所ノ權限ニ至テハ大ニ差異アルヲ見ルヘキナリ

裁判所ニハ通常ト特別トノ二アリ通常裁判所トハ普通一般ノ民事及ヒ刑事ノ裁判ヲ爲シ併セテ司法ノ行政ニ關スル一般ノ事務ヲ擔任スル所ニシテ即チ本條ニ列記スル裁判所是ナリ然リ而シテ此裁判所構成法ハ通常裁判所ニ關スル規則ヲ定メ特別裁判所ノ事項ニ關シテハ何等ノ規定ヲモ爲サ、ルナリ所謂特

別裁判所トハ陸海軍裁判所(現今ノ軍法會議)若クハ行政裁判所ノ如キモノヲ謂
ヒ此裁判所構成法ノ支配スル所ニ在ラス

別裁判所トハ陸海軍裁判所(現今ノ軍法會議)若クハ行政裁判所ノ如キモノヲ謂
ヒ此裁判所構成法ノ支配スル所ニ在ラス
舊治罪法ニ依レハ其第三十一條ニ於テ通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同
一ノ裁判所ニ屬ストアリテ民事刑事ノ裁判權ハ等シク同一ノ裁判所ニテ行フ
ノ制度ナリ然レトモ民事ト刑事トノ裁判ハ宛モ二箇ノ裁判所ヲ設ケテ之ヲ行
フカ如キ觀アリ何トナレハ民事ヲ裁判スルニハ治安裁判所、始審裁判所及ヒ控
訴院等ノ名稱アリテ刑事ヲ裁判スルニハ其名稱同シカラス犯罪ノ種類ニヨリ
或ハ違警罪裁判所トナリ或ハ輕罪裁判所トナリ若クハ重罪裁判所トナレハナ
リ要スルニ民事ト刑事ヲ裁判スルニ其名稱ヲ異ニセリ然ルニ民事裁判權モ刑
事裁判權モ等シク國家ノ大權ニ屬スルモノニシテ畢竟裁判的ノ活動ヲ爲スモ
ハニ過キストハ近世國法學者ノ認ムル處ニシテ固ヨリ當然ナリトス
既ニ民事刑事ヲ併セ同一ノ裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ以テ當然ナリトセハ
民事ヲ裁判スルト刑事ヲ裁判スルトニ依リテ其名稱ヲ異ニスルノ理由アルヲ
見サルナリ此故ニ裁判所構成法ニ於テハ區裁判所、地方裁判所、控訴院等ノ名稱

別裁判所
數個ニ區
別シタル
理由

ノ下ニ於テ民事ノ裁判ヲナシ又刑事ノ裁判ヲモ爲スモノトス加之本法ニ依レ
ハ輕罪事件ニシテ區裁判所ニテ裁判シ重罪事件ニシテ地方裁判所ニテ裁判ス
ルコトアルヲ以テ最早ヤ犯罪ノ種類ニ依リ其名稱ヲ異ニスルコトナシ否決シ
テ異ニスヘキモノニ非スト信スルナリ
今ヤ何故ニ裁判所ヲ數個ニ區別セシヤ其理由恐クハ左ノ二個ニ出サルヘシ(第
一)人民ノ便益ヲ謀リタル事第二裁判ノ錯誤ヲ釐正シ及ヒ裁判權ノ濫用ヲ防制
スルニアリ以下之ヲ詳述セン
凡ソ事擧ナ大小輕重ノ別アリ訴訟事件ニ於ケルモ亦然リ故ニ其重大ナル事件
ニ付テハ自ラ鄭重ナル手續ヲ要シ其輕少ナル事件ニ付テハ之ニ相應スル簡易
ノ手續ヲ要ス是レ刑事ト民事トヲ問ハス其手續上ニ於テ精粗繁簡ノ別アル所
以ナリ然ルニ其事件ノ輕小ナルト重大ナルトヲ論セス全一ノ裁判所ニテ全一
ノ手續ヲ以テ之ヲ處置ストセンカ其手續ハ必スヤ精粗繁簡ノ中間ヲ斟酌シテ
其中庸ヲ探ルコト、セサルヲ得ス果シテ此ノ如クハ輕少ナル事件ニ付テハ
比較上事煩累ニ失シ自ラ日時ヲ空糜シ費用ヲ徒消スルノ害アリ而シテ重大ナ

ル事件ニ付テハ亦比較上其手續粗漏ニ涉リ自ラ權利ノ保護充分ナラサルノ恐アリ故ニ必ス其事件ノ大小輕重ニ從ヒ之カ裁判所ヲ異ニシ又其手續ヲ異ニセサルヘカラス是レ裁判所ヲ數個ニ區別シタル第一ノ理由ニシテ人民ノ便益ヲ謀ルニアリト謂フ所以ナリ

且夫レ一回裁判ヲ與ヘタルトキハ最早ヤ上訴ノ途ナシトセンカ假令其裁判ニ錯誤アルモ又裁判官カ職權ヲ濫用スルコトアルモ其錯誤ヲ矯正シ權利ノ枉屈ヲ伸フルコト能ハサルニ至ラン故ニ必スヤ上訴ノ途ヲ開ヒテ裁判ノ改更ヲ得セシムルノ方法無カル可カラス然レトモ又凡ソ人間タルモノハ到底不完全タルヲ免レスシテ時トシテハ多少ノ誤謬無キニ非ストセハ幾回裁判ノ更正ヲナセハトテ果シテ眞ニ適正ナルヤ否ヤ保ス可カラス然ルニ徒ラニ強ヒテ其適正ナランコトヲ求メテ數多ノ審級ヲ設クルトキハ是レ終ニ底止フル所無カラントス故ニ須ラク上訴ノ途アルト之ニ制限ヲ置クトノ間ニ在テ其宜シキヲ制セサル可カラス此ニ於テカ一回ナシタル裁判ニ服セサルモノハ事實及ヒ法律ノ點ニ付テ第二回ノ裁判ヲ受クルコトヲ得セシメ而シテ其第二回ノ裁判ハ必ス

上級ノ裁判所ニ於テ爲サ、ルヘカラス蓋シ上級ノ裁判官ハ智識經驗共ニ下級ノ裁判官ヨリ優等ニ居ルモノト看做セハナリ又如何ナル事件ヲ問ハス其裁判違法ノ場合ニ於テハ第三回ノ審理ヲ受クルコトヲ得ルモノトセリ是レ法律ノ解釋ハ畫一ナラサル可ラサルニ因ルナリ即チ大審院及控訴院カ第二回ノ審理ニ對シテ受クル所ノ上訴ハ第三十七條第二、第五十條第一イ號、唯其裁判カ法律ニ違背シタルモノナルトキニ限ルトノコトハ民事訴訟法第四百三十四條ニ於テ「上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得」トアルヲ以テ之ヲ知ルヘシ而シテ法律ニ違背シタル場合ノ如何ハ民事訴訟法第四百三十五條及第四百三十六條ニ規定セリ刑事ニ付テハ刑事訴訟法第二百六十七條第二百六十八條ニ規定セリ是レ亦裁判ノ錯誤ヲ矯正シ職權ノ濫用ヲ防止スル爲メ裁判所ヲ數個ニ別チタル第二ノ理由ナリトス

第二條 通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス
但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此限ニ在ラス

通常裁判所ニ於テ民事刑事ヲ併セテ審理スルノ正當ナル理由ハ前キニ述タル所ノ如シ我國維新ノ初メニ當リテハ斷獄ハ刑部ニテ統へ聽訟ハ民政部ニテ所理スルノ制アリシモ其後司法省ヲ設置シ司法事務ヲ統理スルコト、ナリ裁判所ノ設ケラル、ニ及ンテ民事モ刑事モ同一ノ裁判所ニテ審理スルコト、ナレリ爾後之ヲ變改シタルコト無シ然ラハ則チ本條ニ於テ民事刑事ヲ裁判スルモノトナセシハ從來ノ制度ヲ襲用セルモノト謂フヘキナリ

然レトモ陸海軍裁判所又ハ行政裁判所ノ如キ特別ナル裁判所ニ屬セシメタル事件ハ通常裁判所ノ管轄スヘキモノニアラス今若シ陸海軍ノ法律ヲ犯シタル事件ヲ通常裁判所ニテ管轄スルコト、センカ其犯罪者タル軍人軍屬ハ所屬長官ノ處分ヲ受クルニ非サルカ故ニ其裁判ニ心服スルノ情薄キノミナラス又陸海軍ノ威嚴ヲ犯罪人ニ示ス能ハス加之本來軍事犯ノ裁判權ハ國家ノ司法權ニ屬スト云ハンヨリ寧ロ國家ノ兵權ト云フ一種特色ノ權力ニ屬スルモノト云フ可キモノナレハ其權利ノ性質ヲ誤マルニ至ル又行政事件ヲ通常裁判所ニテ裁判スルコト、センカ行政司法ノ二權ハ相互ニ分立並行スヘキモノナルニ其分

立並行ノ原則ヲ打破シ隨テ司法權ヲシテ行政權ヲ侵害セシムルニ至ルノ恐れナシトセス故ニ此ノ如ク特別ノ事件ハ特別ナル裁判所ノ管轄トスルハ甚ク穩當ナリ然レトモ普通一般ニ係ル事件ハ民事ニマレ刑事ニマレ總テ通常裁判所ノ管轄ナリトス是レ本條ノ規定アル所以ナリ

第三條 地方裁判所、控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

合議裁判ノ如何ナルモノタルコトハ既ニ總論ニ於テ述ヘタル所ナリ本條ニ所謂合議裁判所トハ合議制ニ從テ裁判スル裁判所ヲ云フ而シテ其裁判所ハ地方裁判所、控訴院及大審院ノ三個ナリトス我構成法ニ於テハ原則トシテハ總テ合議制ヲ採用セルカ如シト雖モ其制ハ地方裁判所以上ニ限リ區裁判所ニハ單獨裁判官ニテ裁判スルコト、定メタリ其故何ゾ是レ畢竟區裁判所ノ權限狹少ニシテ且其管轄スル事件ノ輕微ナルニ因ルノミナラス區裁判所ハ如何ナル

場合ト雖モ覆審ヲ爲スコトナク必ス第一審ニ止マレリ之ニ反シテ地方裁判所以上ニ在テハ事實ノ覆審ヲナシ且ツ重大ナル事件ヲ審理スルコトアルノミナラス控訴院大審院ノ如キニ至テハ下級裁判所ノ終局判決ニ對スル上告ヲモ審判スルコトアルヲ以テナリ去レハ裁判官ノ員數モ其階級ノ優等ナルニ從フテ愈ヨ増加セリ第三十二條第四十一條第五十三條又或ル場合ニハ民事部刑事部ノ總會議ヲ開ク等ノコトアリ要スルニ地方裁判所以上ノ裁判所ニ於テハ其審判スル事件重要ニシテ事實ノ覆審又ハ終局ノ裁判ヲナスニハ其手續ヲ鄭重ニセサルヘカラサルヲ以テ合議制ヲ採用セシモ區裁判所ハ事件輕微ニシテ且第一審ニ止マレハナリ

總テ合議裁判所ニ於テハ一個若クハ二個以上ノ民事部及ヒ刑事部ノ設ケアリテ刑事民事共ニ數名ノ判事ヲ裁判ストアリ然レトモ地方裁判所以上ノ裁判所ハ如何ナル場合ニ於テモ必ス數名ノ判事カ列席裁判スルニアラス或ル場合ニ於テハ一人ノ判事カ處分スルコトアリ民事訴訟法第二百七十三條ニ從ヒ受訴裁判所ニ於テ證據調ヲナスヘキトキハ裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命スルコトアリ

リ又刑事ノ豫審處分ヲナスニハ豫審判事一名ニテ擔當スルカ如キ其他一人ノ判事カ處分スルコト往々之アリ是レ本條但書ノ規定アル所ナリ

第四條 裁判所ノ設立、廢止及管轄區域并ニ其變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ノ
設立廢止
及管轄區
域並ニ其
變更

凡ソ裁判所ヲ設立シ又ハ廢止シ若クハ管轄區域ヲ定メ及ヒ之ヲ變更スル等ノコトハ時世ノ變遷及ヒ事件ノ多少ニ從フテ之ヲ爲スハ實ニ止ムヲ得サルコトナルカ故ニ行政官ニ一任シテ可ナルカ如シト雖トモ又熟ラ一方ヨリ觀察スレハ此等ハ人民ノ便不便ニ關スルコト少ナカラサレハ決シテ輕微ノ事ト謂フヘカラス殊ニ此等ニ變更アレハ民事訴訟法ノ所謂裁判籍ニ影響ヲ及ホシ爲メニ人民ノ利害得失ニ關スル事少ナシトセス是ヲ以テ此等ノ事ヲ定ムルハ帝國議會ノ協贊ヲ經タル所ノ法律ヲ以テスルコト、爲シタルナリ
然レトモ若シ行政上ノ便宜ニ依リ從來甲ノ區裁判所ノ管轄タリシ郡内ノ或町村ノ全部又ハ一部カ乙ノ區裁判所ノ管轄タル郡内ニ編入セラル、カ若クハ從來甲ノ區裁判所ノ管轄タリシ郡内ノ或町村ノ全部又ハ一部カ乙ノ區裁判所ノ

管轄ニ屬スル町村ニ合併シタル場合ニ於テハ如何シテ既ニ一度ヒ法律ヲ以テ定メタル管轄區域ナルカ故ニ之ヲ變更スルニモ亦法律ヲ以テセサルヘカラサルカト云フニ裁判所構成法施行條例第三條ノ規定スル所ニ依レハ此等ノ爲メニ特ニ法律ヲ發スルニ及ハサルモノトセリ然リ而シテ區裁判所ノ管轄區域ヲナス町村ノ變更ハ區裁判所ノ管轄ニ影響ヲ及ホストアルヲ以テ前段ノ場合ニ於ケル乙區裁判所ノ郡内ニ編入セラレタル町村ノ全部若クハ其一部ハ甲區裁判所ノ管轄ヲ脱シテ乙區裁判所ノ管轄ニ入ルモノトナルナリ

裁判所構成法施行條例ニ依レハ區裁判所ノ管轄區域ヲ揭ケテ地方裁判所及控訴院ノ管轄區域ヲ示サスト雖トモ地方裁判所ノ管轄ハ數個ノ區裁判所ノ管轄區域ヲ以テ其區域トナセルカ故ニ區裁判所ノ管轄ヲ示ストキハ自ラ地方裁判所及控訴院ノ管轄ハ分明ナリトス

第五條 各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

單獨裁判所ト合議裁判所トヲ問ハス裁判官ノ員數ハ固ヨリ多少ノ差別アルヘ

判事ノ員數

又事務ノ繁簡ニ隨テ増減セサルヘカラサルヤ當然ナリ故ニ各裁判所ニ要スル裁判官ノ員數ハ時ニ隨テ變更ヲ來スモノナレハ法律ヲ以テ豫メ規定スルヲ得ス蓋シ此等ハ司法大臣ニ委任シ其宜シキニ應シテ定メシムルヲ以テ可トス故ニ本條ニ於テハ單ニ各裁判所ニ相應ナル員數ト規定シ一々其員數ヲ定メサルハ固ヨリ其宜シキヲ得タルモノナリ

第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ

起シ其取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必用ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若クハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付キ公益ノ代表者トシテ法律上其職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

檢事局

若シ一人ノ檢事若クハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テ判事若クハ監督判事ハ其事件ノ猶豫ス可ラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第一項 本項ニ各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス下アルヲ以テ下區裁判所ヨリ上大審院ニ至ルマテ悉ク檢事局ノ設ケアルヲ見ルヘシ而シテ檢事ノ職務ノ綱領ハ乃チ本項ノ規定スル所ナリ

抑モ檢察權ハ裁判權ト全シク君主權ニ淵源シ則チ君主カ一國ヲ統治シ給フニ必然欠クヘカラサルノ權利ナリ而シテ君主ハ法律ヲ以テ之ヲ檢事ニ委任シ給ヒ檢事ハ之カ委任ヲ受ケ連貫遞屬以テ其權利ヲ全國ニ施行シ司法大臣ハ之ヲ統督スルモノトス故ニ檢察官ハ君主ノ耳目ニシテ政府ノ機關ナリトス

然リ而シテ檢事ノ行フ職務ハ刑事及民事并ニ司法行政事件ニ關スル監督事務ノ三個トス以下逐次之ヲ詳述セン

先ツ刑事ニ付テハ本項ニ示ス如ク(第一)公訴ヲ起スコト(第二)公訴ノ取扱上必要

檢事ノ職務

刑事ニ付

檢事ノ職務

ナル手續ヲ爲スコト(第三)法律ノ正當ナル適用ヲ請求スルコト(第四)判決ノ適當ニ執行セラルヘヤヲ監視スルコト等即チ是ナリ

第一 公訴ヲ起スコト、則チ若シ犯罪アリテ起訴スヘキモノト思料スルトキハ刑法上ノ處分ヲ受ケシムル爲メ裁判所ニ向フテ公訴ヲ提起スルヲ云フ

第二 公訴ハ取扱上必要ナル手續ヲ爲スコト、則チ犯罪ヲ搜查シ及ヒ其證據ヲ蒐集シテ彼ノ刑事訴訟法第六十二條乃至第六十六條第六十八條第四百四十四條乃至第四百四十六條第四百四十八條其他此等ノ法條ニ規定シタル如キ手續ヲ行ヒ豫審終結其他ノ場合ニ於テ意見ヲ述フル等ノコトヲ云フ

第三 法律ハ正當ナル適用ヲ請求スルコト、則チ犯罪人ニ對シテ法律ニ依リ相當ナリト思料スル刑ノ適用ヲ請求シ又或ル場合ニハ法律ニ從テ免訴若クハ無罪ノ言渡ヲ請求スルヲ云フ

第四 判決ハ適當ニ執行セラルヘヤヲ監視スルコト、則チ裁判官カ法律ニ基キ刑罰ヲ言渡スモ其判決ニシテ適當ナル執行ナカリセハ刑罰ノ目的ヲ達スル能ハサルカ故ニ檢事ハ其判決ノ適當ニ執行セラルヘヤヲ監視セサルヘカラス例

ハ刑法附則第一條ニ依リ死刑ノ執行ヲ監視スルカ如キ又監獄則ニ依レハ檢事ハ隨時監獄ヲ巡視スルノ規定アリ是レ亦受刑者カ服役ノ模様及ヒ遷善改過ノ途ニ趨クヤ否ヤヲ視察スルニアリ要スルニ此等ハ何レモ判決ノ適當ニ施行セラル、ヤヲ監視スルニアリトス

次ニ民事ニ付テノ職務ハ或ル場合ニ於テ訴訟ニ干與シテ意見ヲ陳述スルニアリ所謂干與トハ訴訟ノ本人トナルニアラスレテ唯連班人トナルノミ已ニ訴訟ノ連班人ニ過キサレヲ以テ假令自己ノ意見ニ反スル裁判アリタルモ之カ爲メ上訴ヲ爲スヲ得ルニ非ス只獨立ノ地位ニ在テ不偏不黨ノ意見ヲ述ヘ當事者辯論ノ不足ヲ補ヒ裁判官ノ注意ヲ惹起シ以テ其判決ノ資料ヲ作ラシムルニアリ

檢事ノ干與ニ義務上ノモノト區別アリ換言セハ命令上ノ干與ト隨意上ノ干與トアリ義務上ノ干與トハ或ル事件起レハ必ス之ニ干與シテ意見ヲ陳述セサルベカラサルモノヲ云ヒ權利上ノ干與トハ其事件ニ干與スルト否ラサルトハ檢事ノ隨意ニアルモノヲ云フ

本條ニ規定セラルモノハ即チ權利上ノ干與ナリ而シテ如何ナル場合ニ於テ檢事

ハ權利上民事ニ干與スルカ法律ニ明文ナレト雖トモ概チ重要ナル事件ナリトス尤モ法律ニ制限ナキカ故ニ如何ナル事件ト雖トモ檢事ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ其通知ヲ求メテ之ニ干與スルコトヲ得ヘシ

又義務上ノ干與ハ民事訴訟法第四十二條ニ其場合ヲ列記セリ則チ左ノ如シ

- 第一 公ノ法人ニ關スル訴訟
- 第二 婚姻ニ關スル訴訟
- 第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟
- 第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟
- 第五 無能力者ニ關スル訴訟
- 第六 養料ニ關スル訴訟
- 第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟
- 第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟
- 第九 再審

何故ニ右等ノ訴訟ニハ法律上檢事ノ干與スヘキモノト規定シタルカ其理由ノ

裁判所ニ
屬シ若ク
ハ之ニ關

詳細ナルコトハ訴訟法講義ニ屬スルヲ以テ茲ニハ唯其要領ヲ述フルニ止メシ
右ニ列記シタル訴訟中ニハ或ハ純乎タル私益ニ關スルニ止マルモノアルカ如
シト雖トモ而モ皆間接若クハ直接ニ公益ニ關係セサルモノナシ彼ノ結婚離婚
親子ノ分限其他人ノ分限ニ關スル等人事上ノ訴訟ハ公共ノ秩序ニ關スルモノ
ナリ今夫レ之ヲ當事者ノミニ放任シ傍ラ其直者ヲ保護スルナクハ終ニ弱者
ハ權利ヲ枉屈セラレ強者ハ奸黠ナル手段ヲ以テ勝訴ヲ制スルノ恐レナシトセ
ス又無能力者若クハ失踪者ノ如キ宜シク國家ノ保護スヘキモノナレハ檢事ハ
國家ノ代表者タル資格ヲ以テ之ニ干與スルハ當然ナリ况ンヤ證書ノ偽造變造
ノ如キ事刑事ニ涉ルモノニ至テハ之カ審理ニ立會フハ蓋シ欠クヘカラサルコト
、ス其他夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟又ハ養料ニ關スル訴訟若クハ再審ノ如キ
何レモ公共ノ秩序ニ關スルモノナレハ公益保護者ノ資格アル檢事ノ之ニ干與
スルハ固ヨリ然ルヘキコトト謂フヘシ
尙ホ檢事ハ司法及行政事件ニ付其職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ抑モ裁判官ハ
不羈獨立ノ地位ヲ有スルモノナレハ可成的行政事務ニ關與セシメサルヲ可ト

スル司法
及行政事
件ニ付檢
事ノ職務

ス若シ行政事務ニ任ストセハ勢ヒ政府ノ指揮監督ヲ受ケサルヘカラサルヲ以
テ自ラ其地位ヲ薄弱ナラシムルノ恐レアリ故ニ法律ハ檢事局ヲ以テ司法及行
政事務ヲ監督スル官衙トシ而シテ政府ノ命令ノ及フ所トナセリ
然レハ檢事ノ監督ノ及フ所ノ範圍ハ甚々濶ク苟モ社會ノ秩序公安ヲ維持スル
所ノモノハ一ニ檢事ノ職權ノ及フ所ナルカ如シ然レトモ若シ叨リニ檢事カ司
法及行政ノ一般事件ニ關涉スルコトアラシキ歟爲メニ司法及行政事務ヲ阻害ス
ルニ至ラン此故ニ檢事ノ職務ノ範圍ヲ定メ裁判所ニ於テ執行スル法律ニ關ス
ル事項ニ限レリ是レ法律ニ於テ裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ
付公益ノ代表者トシテ法律上其職權ニ屬スル監督事務ヲ行フトセル所以ナリ
法律ニ法律上其職權ニ屬スルトアルハ則チ裁判所構成法第三十三條第四十二
條第五十六條第三百三十五條第六項乃至第八項及ヒ第三百三十六條乃至第三百三
十條等ニ規定セル檢事局ノ事務及司法警察官、林務官、市町村長ヲ監督スル事ノ
如キ又代言人規則ニ從テ代言人ヲ監督スル事若クハ犯罪人引渡條約ノ如キ其
他現今ノ法律ニ於テハ檢事ノ職務敢テ少シトセズ

又明治十九年ノ勅令第四十號裁判所官制第二十七條ヲ見ルニ曰ク「裁判所ニ檢事局ヲ置ク、檢事ヲシテ治罪法及訴訟法ニ定ムル職務ノ外司法ニ關スル事項及司法ノ行政ニ關スル事項ニ付キ監督ノ職務ヲ行ハシム、其庶務ノ規定ハ別ニ定ムル所ニ依ルト」但此官制ニ依レハ檢事ノ職務ヲ行フ事項ハ茫乎トシテ詳カナラス而モ法律ニ於テ檢事ハ公益ノ代表者ナリト規定セルヲ以テ苟モ裁判所ニ屬シ若クハ裁判所ニ關スルモノナルトキハ假令ヒ法律ニ於テ特ニ命令セサルモ又假令ヒ直接ノ監督ヲナサ、ル事項ナルモ常ニ側面上ヨリ間接ノ監督ヲナシ以テ政府ノ耳目タル職務ヲ盡スコトヲ怠ルヘカラス裁判所構成法ノ規定モ亦此主旨ニ出テタルニ過キサルモノトス蓋シ裁判官ハ法律ノ理非得失ヲ斟酌スルニ及ハス苟モ法律タル以上ハ之ニ從ヒ裁判スルニ止マリ其結果如何ハ敢テ顧ミル所ニアラス之ニ反シテ檢事ハ常ニ法律ノ利害ヲ考覈シ世態民情ニ適スルヤ否ヲ觀察シ若シ其法律ノ不可ナル所アレハ司法大臣ニ具狀シテ其參考ニ供ヘサルヘカラス是レ檢事ノ職務上ノ本分ナレハ檢事ハ法律ノ施行ヲ監督スルノ責任アリト云フテ可ナルヘシ

又裁判官ハ常ニ獨立シテ一意専心法律ニ則トリ良心ニ照シ自ラ至當ナリト信スル所ニ從ヒ裁判スヘキモノナレハ何人ト雖トモ之ニ容喙スルコト能ハスト雖トモ而モ裁判官ニ專横恣恣ノ處置ヲ許スヘキニアラサルヲ以テ裁判所構成法第三百三十五條ニ於テ司法大臣ヲ始トシ大審院長以下ノ者ニ裁判官ヲ監督スルコト、ナセリ若シ夫レ然ラスンハ公益ノ爲メニ設ケタル獨立ノ地位ハ却テ公益ヲ害シ、公安ヲ維保スル權ハ却テ公安ヲ害スルニ至ラン既ニ裁判官ヲ監督スル規則アリ然ラハ則チ司法大臣ノ耳目タリ政府ノ機關タル檢事モ亦常ニ裁判所ノ處分ヲ間接ニ觀察スルノ重任アリト云フテ可ナリ此事タル公益ノ保護者タル職務ノ結果ニシテ舊治罪法第三十四條第二項ニモ「裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス」ト明定セリ然ルニ或ル派ノ法學者ハ公益ヲ保護ストノコトニ付キ曠々非難ヲ試ミ法律ニ於テ如何ナル公益ナルヤ逸トシテ明カナラスト云ヘリ是レ畢竟現行ノ規則ニハ一々其權限ヲ規定セサルニ因ルト雖モ後日此等ノ職務ヲ定ムルノ考案ニ出テシモノニテ已ニ本條ニ於テ之ヲ見ルニ至リタルモノナレハ決シテ茫邈タルコトナク又此他民法人事編及ヒ相續ノ部ニ於テ明カニ檢事

檢事ノ裁判所ニ對シテ地位

檢事局ノ管轄區域

ノ職務ヲ規定セリ以テ其重要ナルヲ知ル可シ

第二項 檢事ハ裁判所ニ對シテ獨立ノ地位ヲ保チ決シテ裁判所ニ從屬スルモノニ非ス故ニ檢事カ其職務ヲ行フニハ毫モ裁判所ノ指揮監督ヲ受クルコトナシ若シ檢事ニシテ獨立スルコト能ハサランカ裁判所ノ勢力ニ壓制セラレ公益ノ爲メニ定メタル前項ノ職務ヲ盡スコト能ハサルニ至ラン是レ本項ノ規定アル所以ナリ裁判官モ固ヨリ獨立ニシテ檢事ノ爲メニ箝制セラル、コトナク互ニ相獨立シテ其職務ヲ全フスルモノナリ固ヨリ裁判官ノ獨立ハ絕對的ナリト雖トモ之ニ反シテ檢事ノ獨立ハ關係的ナリ即チ裁判官ハ管ニ檢事ニ對シテ獨立スルノミナラス政府ニ對スルモ尙ホ亦然リ然レトモ檢事ハ裁判官ニ對シテ獨立スルモ政府ニ對シテハ其命令ニ從ハサルヘカラス

第三項 檢事局ハ各裁判所ニ附置セラレタルモノナレハ其管轄區域モ其附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ト全一ナラシムルハ固ヨリ至當ナリ故ニ例ヘハ地方裁判所ニ附置セラレタル檢事局ノ管轄ハ其地方裁判所ノ管轄區域ト同一ナリト知ルヘシ是レ便宜上ヨリ出テタルモノニシテ又之ヲ別異ニスルノ必要

檢事ノ代理者

ナシ

第四項 本項ハ檢事ニ差支アルトキ其代理トナリテ事件ヲ取扱フ者ヲ定メタリ元來檢事ハ判事ニ比スレハ人員少ク或ル裁判所ノ如キハ一人ニ過キサルコトアリ若シ其檢事ニ回避又ハ病氣等ノ事故アラシカ忽チ差支ヲ生スヘシ故ニ之カ代理者無カル可カラス然レトモ判事カ檢事ノ代理ヲ爲スハ素ト變則ナルヲ以テ叨リニ代理セシムヘカラス即チ其事故ノ止ムヲ待チ可成的正則ニ從ハサルヘカラス然ラズンハ判事ハ檢事ノ職權ヲ侵スモノト謂フヘシ而モ其事件ニシテ猶豫スヘカラサルトキニ限リ判事ニ代理ヲ命スルモノトス若シ此便宜法ナカラシカ事務ノ澹滯被告人ノ迷惑ヲ來スコト尠カラサルヘシ

本項ニハ「裁判所長」トアルヲ以テ此規定ハ大審院長、控訴院長ヲ包含セサルモノ、如シ是レ只僻陬ノ地方裁判所若クハ區裁判所等ノミ差支ノ生スルアラシコトヲ豫期シ茲ニ斯ク「裁判所長」ト規定シタルモノト思考ス

第七條 檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

本條ハ第五條ニ説明スル所ト全一ナルヲ以テ復タ講述スルノ要ナシ

裁判所構成法

檢事ノ員數

書記課

其事務

第八條 各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記録其他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲メ必要ナリト認メタルトキニ限り別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但合議裁判所ノ檢事局ニ限ル
司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲メ特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第一項 本項ハ裁判所ニ書記課ヲ置クコトヲ規定セリ而シテ其取扱フ事務ハ左ノ如シ

- 第一 文書ノ往復
- 第二 會計ノ事務
- 第三 訴訟記録ノ調製保存
- 第四 此ノ法律ノ特定事務(本法第九十一條第三百三十三條ニ定メタル事務ノ如キ是ナリ)

檢事局ノ書記課

特別會計官

第五 他ノ法律ノ特定事務(刑事訴訟法若クハ民事訴訟法等ニ定メタル事務其他特ニ法律ヲ以テ定メタル事務ノ如キ是ナリ)

右書記課ハ合議裁判所ニモ單獨裁判所ニモ之ヲ置クモノトス

第二項 本項ニ依レハ檢事局ニハ書記課ヲ設ケサルヲ以テ原則トス然レトモ前項ニ規定スルカ如キ事務繁多ニシテ必要ナル場合ニ限り之ヲ設クルコトヲ得ヘシ而モ檢事局ニ書記課ヲ置クハ唯合議裁判所ノ檢事局ニ限り單獨裁判所ニハ決シテ之ヲ置クコトナシ則チ地方裁判所以上ノ檢事局ニハ之ヲ置クコトヲ得ヘント雖トモ區裁判所ニハ之ヲ置カス是レ單獨裁判所ノ檢事局ノ事務ハ僅少且輕微ナルニ由ル今若シ一々書記課ヲ置クコト、センカ勢ヒ經費ノ増加ヲ來スヘケレハナリ

第三項 本項ハ司法大臣ニ會計事務ヲ專任スル特別官吏ヲ置クコトヲ許セリ蓋シ區裁判所ノ會計事務ノ如キハ固ヨリ繁多ナラスト雖トモ控訴院若クハ或ル地方裁判所ノ會計事務ノ如キハ甚々繁劇多忙ナルコトアルヘキヲ以テ特ニ專任ノ官吏ヲ置クノ必要アルヘシ且ヤ會計事務ノ如キハ出納ヲ明ニシ收支ヲ

嚴ニセサルヘカラサルカ故ニ他ノ庶務トハ自ラ相異ナリ一種特色ヲ帶フル事務ナルヲ以テ專任ノ官吏ヲ要スルコトアレヘキナリ

第九條 區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發ス

ル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ

職務ヲ行フ

執達吏

執達吏ハ本法ニ於テ始メテ設ケラレタルモノナリ此執達吏ハ從來ノ使丁ト異ナリ其職務及ヒ地位共ニ一層高等ナリトス是レ佛語ノ所謂「ウヰヰツシエー」ナルモノニシテ執達吏ノ名稱ハ裁判ヲ執行シ且書類ヲ送達スルニ原キタルモノナラ

本條ハ執達吏ノ職務ノ梗概ヲ示セリ即チ左ノ如シ

其職務

第一 裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達スルコト

第二 裁判所ノ裁判ヲ執行スルコト

第三 本法ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フコト

第四 本法以外ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フコト

茲ニ注意スヘキハ執達吏ヲ置クハ區裁判所ニ限ルコト是ナリ蓋シ執達吏ハ區裁判所ノ支配スル所ニシテ民事裁判ノ執行ハ總テ區裁判所ニ委任シ執達吏ヲシテ之ヲ執行セシメ又文書ノ送達ノ如キモ當ニ區裁判所ノ文書ノミナラス各裁判所ヨリ發スル文書ヲモ總テ執達吏ノ送達スルモノトス(第九十七條及第九十八條)故ニ民事刑事ノ呼出狀其他訴訟書類ノ送達又ハ民事訴訟法第三百八十二條以下ノ規定ニ從ヒ督促手續ニ依ル支拂命令書ヲ債務者ニ交付スル如キ若クハ同法第四百九十七條以下ノ規定ニ從ヒ爲ス所ノ強制執行ノ處分ノ如キハ皆執達吏ノ職務ナリトス

又執達吏ハ刑事ニ付テモ書類ノ送達ニ任スルモノナリ然レトモ警察官ヲ以テ執行スル場合ハ此限ニアラス是レ本法第九十八條第二項ニ依テ明カナリ其他執達吏ノ職務ハ執達吏規則ニ規定セリ

第十條 法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ

管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ
裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別
ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此法律第十
三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所
モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲メ其權
限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上
ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四 二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲナ
シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其裁
判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

管轄ノ裁

本條ハ甚タ新奇ナル規定ナリ而モ實際本條ノ規定ヲ適用スル場合尤モ少ナカ
ルヘシト雖トモ亦必スシモ之ナシト云フヘカラス故ニ若シ本條ノ規定ナカリ
セハ大ナル不都合ヲ生スルコトアルヘシ

抑モ裁判所ノ管轄ハ法律ニ於テ之ヲ規定シタルヲ以テ彼我互ニ侵害スルコト
ナカルヘシ且裁判所ハ自己ノ受理シタル訴訟ノ果シテ管轄スヘキモノナルヤ
否ヤヲ判定スル權アリ然レトモ其受理シタル訴訟ハ實際管轄スヘキモノナル
モ法律ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因テ其裁判權ヲ行フコトヲ得サル場合ノ如
キ又ハ土地ノ管轄區域ニ付キ疑ハシキ場合ノ如キ若クハ二箇以上ノ裁判所カ
裁判權ヲ互有スルカ或ハ互有セストノ確定判決アル場合ノ如キニ於テハ之カ
管轄定メノ申請ヲナサハルヘカラス然ラスンハ何レノ裁判所ニテ管轄スヘキ
モノナリヤ明瞭ナラサルヲ以テ遂ニ當事者ハ自己ノ訴權ヲ行フ能ハサルニ至
ラン故ニ此等ノ場合ニ於テハ其事件ニ關係アル各裁判所ヲ併セテ管轄スル直
近上級ノ裁判所ニ申請シ以テ何レノ裁判所カ管轄スヘキモノナルヤノ判定ヲ
受ケサルヘカラス

例ヘハ甲乙二箇ノ區裁判所中其何レニ裁判權ヲ有スルヤヲ判定スルハ其二個
ノ區裁判所ヲ併セテ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ即チ地方裁判所ニシテ又甲
乙二個ノ地方裁判所中其何レニ裁判權ノ属スルヤヲ判定スルハ其二個ノ地方

裁判所ヲ併セテ管轄スルモノハ控訴院ナリ又二個ノ控訴院中何レニ裁判權ノ屬スルヤヲ判定スルハ則チ大審院ナリトス但シ法律上特ニ規定セル場合ハ本條ニ從ハサルモノナリ

以下本條ニ列記セル場合ニ付キ逐次説明セン

第一 本號ニ且トアリ以テ二個ノ場合ヲ包含スルモノタルヲ知ルヘシ則チ

其一 其事件ヲ管轄スル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因テ裁判權ヲ行フ能ハサル場合

其二 本法第十三條第二項ニ一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同シク毎年以前以テ之ヲ定ムトアリ然ルニ其之ニ代ルヘキ裁判所モ亦其事務ヲ取扱フ能ハサル場合

法律上ノ理由トハ裁判官ノ忌避セラレタル場合又ハ除斥セラレタル場合(民事訴訟法第三十二條刑事訴訟法第四十條)等ヲ云ヒ特別ノ事情トハ天災又ハ事變ニ因テ道路ノ閉塞シタルカ如キ場合等ヲ云フ之ヲ例ヘハ戰爭騷亂又ハ大洪水

ノ汎濫等ノ如キ即チ是ナリ

一ノ區裁判所ノ代理スヘキ區裁判所ハ毎年豫メ定メ置クモノナルカ故ニ敢テ差支ヲ生スルコトナキカ如シト雖トモ若シ尙ホ代理スヘキ裁判所モ其事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ如何ナル裁判所ニテ管轄スルヤハ必ス之カ規定ヲ要スヘシ是レ本項ノ設ケアル所以ナリ

第二 本號ハ別ニ説明ヲ俟スシテ明カナリ例ヘハ甲乙二個ノ裁判所ノ管轄ノ境界ニ於テ犯罪アリシ時ノ如キ又ハ係争ノ山林ハ何レノ村内ニ屬スルヤノ疑ヒアル場合ノ如キ是ナリ

第三 法律ニ從ヒ二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ互有スル場合トハ例ヘハ犯罪事件ノ管轄ハ現行刑事訴訟法ノ規定ニ依レハ犯罪ノ地ノ裁判所ナリ然ルニ甲乙裁判所ノ管轄地ノ境界ノ中央ニ犯罪アリト假定センニ此場合ニ於テハ甲乙何レノ裁判所カ管轄スヘキヤニ付キ疑アルヘシ是レ即チ二以上ノ裁判所カ法律ニ從ヒ裁判權ヲ互有セル場合ナリトス
又數個ノ裁判所管轄地内ニ於テ數罪ヲ犯シタルトキハ最初豫審又ハ公判ニ着

手シタル裁判所ヲ以テ管轄ナリトスルハ現行刑事訴訟法ノ規定スル所ナリ然ルニ各裁判所共ニ偶然同時ニ豫審又ハ公判ニ着手シタル場合ノ如キハ即チ亦何レモ法律ニ從ヒ裁判權ヲ互有スルモノナリ

又民事訴訟法ニ依レハ不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ニテ各種ノ訴訟ヲ管轄スル規定ナルヲ以テ今茲ニ廣大ナル山林ニ關シ争論起リシニ其山林ハ甲乙裁判所ノ管轄地ニ跨ルモノナランニハ其裁判所ハ何レモ法律ニ從ヒ其事件ヲ裁判スヘキ權利ヲ有スルナリ是レ亦二以上ノ裁判所カ法律ニ從ヒ裁判權ヲ互有スル場合ノ一ナリトス

次ニ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ互有スルトキトハ民事ニ付テハ此場合甚々稀レナルヘント雖トモ亦全ク無キニ非ス例ヘハ甲乙兩者ノ間ニ或ル訴訟起リシニ當リ甲者之ヲ東京ノ地方裁判所ニ訴ヘシニ乙者ハ管轄違ノ申立ヲナセシカハ東京地方裁判所ニテハ乙者ノ申立ノ如ク管轄違アリトノ言渡ヲナセリ然ルニ甲者ハ此裁判ニ服セス東京控訴院ニ控訴ヲナシ控訴院ハ東京地方裁判所ノ管轄ナリト判決シ其言渡確定セリ其後ニ至リ甲乙兩

名共ニ死去シ甲ノ相續人ハ刑ノ言渡アルヲ知ラス乙ノ相續人ヲ相手取り横濱地方裁判所ニ訴ヘタリ此時又管轄違ノ争論起リシモ横濱地方裁判所ハ相當管轄ナリトノ言渡ヲナシ此裁判モ亦確定シタリ是レ即チ二以上ノ確定裁判ニ因リテ二以上ノ裁判所カ裁判權ヲ互有スルノ場合ナリ刑事ニ付テハ檢事ハ各地ニ散在スルモノナルカ故ニ同一事件ニ付甲裁判所檢事ハ其裁判所ニ起訴シテ管轄ナリトノ言渡ヲ受ケタルニ乙裁判所檢事モ亦其裁判所ニ起訴シテ管轄ナリトノ言渡ヲ受クルカ如キ實際其場合數多アルヘシ

第四 本號ハ前項ト全ク反對ノ場合ヲ規定セリ例ヘハ東京地方裁判所ニ於テ或ル事件ニ付管轄違ナリトノ言渡ヲナシ其言渡確定シ後其事件ヲ埼玉地方裁判所ニ訴ヘシニ又管轄違ナリトノ裁判ヲナシ全ク確定シタリ然レトモ其二個ノ裁判所中何レカ裁判權ヲ行フヘキモノナラン是レ本條ノ規定シタル場合ナリ又例ヘハ甲者アリ乙者ヲ相手取り下谷區裁判所ニ或ル事件ヲ訴ヘタルニ乙者ハ管轄違ノ申立ヲナシ下谷區裁判所ハ管轄ナリトノ言渡シ乙者ハ更ニ之レヲ東京地方裁判所ニ控訴シ東京地方裁判所ハ下谷區裁判所ノ管轄ニアラスト言渡

シタリ而シテ甲者ハ之ヲ麹町區裁判所ニ訴ヘ乙者ハ尙ホ管轄違ノ申立ヲナシタルニ麹町區裁判所ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其裁判亦確定シタリ此場合ハ則チ何レモ管轄違ナリトノ言渡ヲナセルモノナリ而シテ法文中「判決ヲ爲シ云々」又「判決ヲ受ケ云々」トアルハ皆是レ訴訟人カ其判決ヲ受クルモノナリト雖モ斯ク區別ヲ設ケタルハ必竟一ハ裁判所ヨリ觀察シ一ハ訴訟人ヨリ立言シタルモノニシテ即チ甲ハ例ヘハ東京横濱地方裁判所共ニ管轄違ヲ言渡シタル場合ノ如キヲ想像シ乙ハ東京ニテ管轄違ヲ言渡シ確定シタルヲ以テ横濱ノ裁判所ニ出訴シタルニ對手人ヨリ管轄違ヲ申立テタルモ却下セラレタルヲ以テ東京控訴院ニ控訴シ其未控訴院ヨリ横濱ノ裁判所ハ管轄ニ非ストノ判決ヲ受ケタルカ如キ場合ヲ想像シタルモノニシテ若シ甲ノ場合ノミヲ規定スルトキ即チ「確定ノ決ヲ爲シタルモ云々」ト云フニ過キサルトキハ乙ノ場合ノ如キハ東京地方裁判所ト東京控訴院トニ於テ權限ヲ有セストノ判決ヲ爲シタルモノナリトシテ大審院ニ管轄定ノ申請ヲ爲スヘキヤノ疑ナキ能ハス因テ此ノ如キ場合ト雖トモ東京横濱ノ兩地方裁判所間ノ管轄爭ナルヲ以テ矢張控訴院ニ其申請ヲ爲サ

シムル爲ニ特ニ「受ケタルモ云々」ト明記シタルナリ
以上講述シタル所ヲ以テ本法ノ第一章總則ヲ了レリ

第二章 區裁判所

本章ハ諸裁判所中最下等ノ位地ヲ占ムル區裁判所ノ組織權限ヲ定メタルモノナリ蓋シ區裁判所ハ法律上特ニ定メタル場合ニ非サレハ管轄スルコトナキカ故ニ學理上之ヲ「例外裁判所」ト稱ス

第十一條 區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

單獨裁判所

裁判事務ノ分配

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

區裁判所ハ合議裁判ヲナスニアラス單獨乃チ一人ノ判事ニテ裁判ヲ爲スモノトス是レ區裁判所ハ其取扱フ事件輕微ニシテ且必ス第一審ノ裁判ナレハ之カ控訴ノ途アルヲ以テナリ

己ニ區裁判所ハ單獨判事ニテ裁判スト雖トモ而モ裁判官ノ員數ハ敢テ一人ニ限リタルニ非ス事件繁劇ナルニ於テハ多數ノ判事ヲ置クコトアルヘシ故ニ判事二名以上ヲ置キタルトキハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ裁判事務ヲ各判事ニ分配スルモノトス

司法大臣ノ通則ニ從ヒ其事務ノ分配ヲ定ムルハ地方裁判所長ニシテ該所長ハ毎年以前以テ之ヲ定ムルモノトス故ニ地方裁判所長ハ明治廿四年ノ分配ハ廿三年十二月ニ定メサルヘカラス

事務ノ分配ハ固ヨリ便宜ニ出テタル内部ノ規則ナルヲ以テ唯事務ノ主任ヲ定ムルニ止マリ決シテ裁判權ノ所屬ヲ分割スルモノニ非ス故ニ縱ヒ甲裁判官ノ

監督判事

事務分配ノ變更

主任事件ヲ都合上乙裁判官カ取扱フコトアルモ判決上ニ影響ヲ及ホスコトナシ是レ第四項ノ規定アル所以ナリ

次ニ區裁判所ノ判事一人ナルトキハ其判事ハ諸般ノ事務ヲ整理シ其全體ヲ監督スヘキモノナリト雖トモ若シ二人以上ノ判事アルトキハ必ス其中一名ノ判事ヲ以テ監督判事トナシ之ニ行政事務ヲ任シ監督ノ職ヲ行ハシメサルヘカラス是レ本項ノ規定スル所ニシテ其監督判事ハ司法大臣ノ任命スル所ナリトス

第十二條 事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔ノ多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此限ニ在ラス

司法年度トハ其年一月一日ヨリ十二月三十一日迄ヲ云フ(第二百二十六條)而シテ已ニ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ地方裁判所長カ事務ノ分配ヲ定メタルトキハ其年度中之ヲ變更セサルヲ以テ原則トス是レ明リニ事務ノ分配ヲ變更スルハ其主任判事ノ異ナルカ爲ニ縱ヒ簡單輕易ナル事件ナルモ審理上錯雜ヲ生

シ爲メニ當事者ノ不利益ヲ來スコトナキヲ保セス且行政事務ノ如キハ主任ノ時々變更スルタメ事務ニ紛亂ヲ生スルノ恐アルヲ以テナリ
然レトモ一人ノ判事ニシテ其分擔スル事務ノ過多ナルカ又ハ轉職退職其他病氣喪祭等ノ事故ニ因リ久ク欠勤スル等ノコトアレハ其事務ノ分配ヲ變更セサレハ忽チ事務ニ支障ヲ生スヘシ若シ然ルヲ得ストセハ固ト支障ヲ生セシメサルカ爲メニ設ケタル分配ノ原則ハ却テ事務ノ澁滯ヲ來シ不便ヲ生スルニ至ラシ故ニ一度定メタル事務ノ分配モ亦變更スルコトヲ得トナシタリ

第十三條 區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所

長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス
一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若クハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ全シク毎年以前以テ之ヲ定ム

代理

區裁判所ノ判事ニ差支アルトキ之ニ代ルヘキ者ノ誰タルヲ豫メ定ムルハ當ニ

煩雜ヲ避クルノミナラス裁判ノ公平ヲ維保スルノ利益アリ蓋シ裁判官ニ於テハ毫モ專横ノ事ナシト雖トモ臨時ニ指名スルトキハ外見上或ハ爲メニスル所アルヤノ嫌アリ是故ニ前以テ代理スヘキ者ヲ定ムルハ甚タ必要ナリトス
然レトモ監督判事ノ職務ハ唯監督權ヲ行フニ過キサレモノナレハ豫メ代理者ヲ定ムルニ及ハス若シ監督判事ニ差支ヲ生シタルトキハ判事中ニテ最も高等ノ位地ヲ占ムル者ヲシテ其任ニ當ラシムヘキノミ是レ但書ノ規定アル所以ナリ

又一ノ區裁判所カ事故アリテ其事務ヲ取扱フコト能ハサル場合之ナシトセス此時ニ當リ臨時ニ代理ノ裁判所ヲ定ムルトキハ或ハ公平ヲ失シ或ハ專横ニ流レ易キヤノ感アリ故ニ豫メ代理裁判所ヲ定メ置クヲ要ス例ヘハ甲區裁判所ノ差支アルトキハ乙區裁判所ヲ以テ代理セシメ又乙區裁判所ノ差支アルトキハ丙區裁判所ヲ以テ代理セシムルカ如シ而シテ區裁判所ニ限り特ニ此ノ如キ規定アルハ要スルニ區裁判所ハ人員少ナクシテ尤モ差支ノ生シ易キヲ以テナリ
第十四條 區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付キ裁判

權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一 百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二 價額ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ) 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

(ロ) 不動産ノ經界ノミニ關ル訴訟

(ハ) 占有ノミニ關ル訴訟

(ニ) 雇主ト雇人トノ間ニ雇期間一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

(ホ) 左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店又ハ飲食店ノ主

人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

(一) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(二) 旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

本條ハ區裁判所ノ民事ニ關ル裁判權ヲ規定セリ蓋シ本條ハ甚タ重要ナル項目ニシテ若シ之ヲ誤解セハ訴訟上無用ノ日子ト費用トヲ徒費スルノ結果ヲ生スヘキナリ

爰ニ裁判管轄ノ事ニ付キ一言スヘシ抑モ裁判管轄ニ二個ノ差別アリ第一事物ノ管轄第二土地ノ管轄或ハ人ニ關スル管轄即チ是ナリ而シテ事物ノ管轄ハ之ヲ本法ニ規定シ土地ノ管轄ハ之ヲ民事訴訟法又ハ刑事訴訟法ニ規定セリ本法ニ規定セル事物ノ管轄ハ區裁判所ニ付テハ第十四條第十五條及第十六條ニ地方裁判所ニ付テハ第二十六條第二十七條及第二十九條ニ控訴院ニ付テハ第三

裁判管轄ノ種別

十七條ニ大審院ニ付テハ第五十條ニ各之ヲ明示セリ
 斯ノ如ク事物ノ管轄ハ之ヲ裁判所構成法ニ規定シ土地ノ管轄ハ之ヲ民事訴訟
 法等ニ規定シタルハ何ソヤ約言セハ何故ニ土地ト事物トノ管轄ニ付キ規定ノ
 法律ヲ異ニシタルカ試ミニ見ヨ事物ノ管轄ハ訴訟事件ノ性質若クハ價額ニ因
 リ第一審トシテ或ハ區裁判所ニ屬シ或ハ地方裁判所ニ屬シ又第二審トシテ或
 ハ地方裁判所ニ屬シ或ハ控訴院ニ屬ス換言セハ上級審ニ屬スルカ將タ下級審
 ニ屬スルカ抑モ亦何種ノ裁判所ノ權限ニ屬スルカヲ定ムルモノタルヲ是ヲ以
 テ本條第一ニ所謂百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル
 請求又第二ノ五種ノ訴訟ハ或ハ金額或ハ價額又ハ或ル性質ニ依リ第一審トシ
 テ區裁判所ニ屬セリ要スルニ此等裁判所ノ管轄ハ事物ノ性質ニ因テ定マルカ
 故ニ訴訟ノ事物ハ裁判所ノ管轄ニ關シ主タル要素ナリトス知ルヘシ事物ノ管
 轄ハ裁判所ノ權限ヲ規定スル所ノ構成法ニ定ムヘキモノタルヲ
 事物ノ管轄已ニ定マルニ於テハ某訴訟事件ハ區裁判所ノ管轄ナルカ將タ地方
 裁判所ノ管轄ナルカハ此ニ知ルコトヲ得ヘキモ而モ區裁判所若クハ地方裁判

所ハ全國中夥多アルヲ以テ某事件ハ區裁判所ニ屬シ某事件ハ地方裁判所ニ屬
 ストスルモ果シテ何地ノ區裁判所ナルカ又何地ノ地方裁判所ナルカハ未タ以
 テ知ルヘカラス是ニ至テ土地ノ管轄ヲ定ムルノ必要アリ蓋シ土地ノ管轄ハ同
 級ノ裁判所中ニテ其何地ノ裁判所ニ屬スルモノタルヤヲ定ムルニ在リ故ニ之
 ヲ定ムルニハ先ツ被告人ト裁判所トノ關係又ハ訴訟物ノ所在地等ヲ知ルヲ要
 ス例ヘハ被告人カ甲裁判所ノ管轄區域内ニ住所ヲ有センカ甲裁判所ハ即チ被
 告人ニ付テ土地ノ管轄裁判所ナリ若シ又訴訟物カ乙裁判所ノ管内ニ在ランカ
 乙裁判所ハ即チ其事件ニ付テ土地ノ管轄權ヲ有スルモノトス
 之ヲ要スルニ土地ノ管轄ト事物ノ管轄トハ全ク相異レリ事物ノ管轄ハ裁判所
 ノ構成ニ密接ノ關係アルカ故ニ之ヲ本法ニ規定スト雖トモ之ニ反シテ土地ノ
 管轄ハ被告人又ハ訴訟物若クハ義務ノ履行地等ニ關係アルモ裁判所ノ構成ニ
 ハ毫モ關係アルコトナシ是レ土地ノ管轄ハ之ヲ民事訴訟法刑事訴訟法等ニ規
 定セル所以ナリ

却說區裁判所ノ民事ニ關シ管轄スヘキ訴訟二種アリ左ノ如シ

第一 價額ニ依テ管轄タルヘキ訴訟

第二 價額ニ依ラサル或ル訴訟

其第一ハ本條第一ニ規定セル百圓ヲ超過セサル金額ニ關スル請求又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求ニシテ第二ハ本條第二ニ列記セル五種ノ訴訟是ナリ

本條首項ノ末段ニ云ク「但反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル」ト所謂反訴トハ如何請フ左ニ少シク之ヲ辯セン

凡ソ訴訟ニ主タル訴訟ト附帶ノ訴訟トノ二種アリ本條ニ規定スル所ハ專ラ主タル訴訟ニシテ附帶ノ訴訟トハ尙ホ之ヲ細別スレハ即チ左ノ如シ

追加訴訟(或ハ單ニ追訴ト呼フ)

參加訴訟

反求訴訟

追加訴訟ハ主タル訴訟人ノ爲スモノニ係リ參加訴訟ハ第三者ノ爲スモノニシテ反求訴訟ハ被告人ヨリ爲スモノナリ而シテ本條ニ所謂反訴トハ即チ被告人

ノ爲ス反求訴訟ヲ指ス

右反訴ハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル「トアルヲ以テ反訴ニ係ルモノハ金額若クハ價額ノ多寡ニ拘ハラズ主タル訴訟ト共ニ審理スルモノナリ故ニ原告百圓未滿ノ貸金請求ノ訴訟ヲ提起シタルトキハ其被告ハ却ツテ原告ニ對シ百圓以上ノ貸金請求ノ訴ヲ爲シタル場合ノ如キ若シ被告カ主タル訴訟トシテ提起セハ區裁判所ノ管轄スヘキモノニ非サルモ之ヲ反訴トシテ提起セハ區裁判所ハ合セテ之ヲ受理シ之ヲ裁判スルモノトス是レ民事訴訟法第四條第二項ニ「本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス」トアルニ依テ明カナリ試ミニ原告ノ請求金額ハ八十圓ニシテ被告ノ反訴ニ係ル金額ハ百二十圓ナリトセヨ之ヲ合算スレハ二百圓トナレ此場合ニ於テ若シ其百二十圓ノ金額ニ付キ主タル訴訟ヲ提起センカ區裁判所ノ管轄スヘキ所ニアラス然レトモ之ヲ以テ反訴トスルニ於テハ即チ區裁判所ノ管轄スヘキモノトス

今ヤ本條ノ法文ニ付キ逐次説明セン

第一 茲ニ元金八十圓ニシテ之ニ對スル利子二十五圓アリト假想セヨ之ヲ合

算セハ乃チ百五圓トナル此請求金額ハ區裁判所ノ管轄スヘキモノナルヤ否此等ノ場合ハ縱令其請求額百圓ニ超過スルモ尙ホ區裁判所ノ管轄スヘキモノトス何トナレハ主タルモノハ元金ニシテ利子ハ唯其從タルモノニ過キサレハナリ是レ民事訴訟法第三條第二項ノ明定セル所ナリ
 法文ニ所謂價額トハ如何ン要スルニ物件ノ見積代價ヲ云フ例ヘハ米十石ノ請求ヲナストセンニ今米一石ニ付キ六圓ナリトセハ其訴訟物ノ價額ハ即チ六十圓タルカ如シ

訴訟物ノ價額ハ何レノ時ヲ以テ算定スヘキカ詳言セハ契約當時ノ相場ニ依ルカ將タ出訴當時ノ相場ニ依ルカ蓋シ此問題タル甚タ重要ナリトス如何トナレハ其論決ノ如何ニ依リ裁判管轄權ヲ異ニスレハナリ例ヘハ前示ノ場合ニ於テ契約當時ノ相場六圓ナリトセハ其價額ハ六十圓ナルカ故ニ區裁判所ノ管轄タルヘキモ若シ其後ニ至リ米價非常ニ騰貴シ一石ニ付キ十一圓即チ十石百十圓ヲ以テ訴訟當時ノ相場トナストキハ區裁判所ノ管轄ニ非ラサルヘシ然ラハ則チ我民事訴訟法ハ如何ニ此問題ヲ決定シタルカ曰ク「訴訟物ノ價額ハ起訴ノ

日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス」民事訴訟法第三條第一項此規定タル實ニ其當ヲ得タリト云フヘシ何トナレハ契約當時ノ價額ニ依ルモノトセハ其以前ニ溯リテ之ヲ算定スルノ困難アルヘク或ハ其當時ノ價額ハ如何程ナリシヤ之ヲ證明スル能ハサルコトアルヘシ且ツ夫レ今日訴訟ヲ爲スモノナレハ今日ノ實際ノ價額ニ依ルヘキハ當然ナレハナリ即チ右規定ノ理由モ亦茲ニ在ランカ

第二 元來區裁判所ハ價額百圓ニ超過スル事件ヲ管轄セサルヲ以テ原則トス然ルニ茲ニ列記セル五種ノ場合ハ價額ノ如何ニ拘ハラヌ管轄スルハ抑モ何ツヤ蓋シ此等ノ事件ハ何レモ至急ヲ要スルカ又ハ甚タ簡單ニシテ敢テ地方裁判所ヲ煩ハスニ足ラサルカ若クハ其事件ヲ裁判スルニハ土地ノ狀況及慣習等ヲ熟知セサルヘカラサル等ノ理由ニ依ル則チ建物ノ受取明渡若クハ其使用占據修繕ニ關ル訴訟ノ如キハ急速ニ落着スルニ非サレハ爲メニ當事者ノ迷惑尠少ナラス又不動産ノ經界ヲ爭フ訴訟ノ如キハ土地ノ習慣ヲ熟知セス單ニ理論ニ據テ判斷スルヲ得ス又雇主ト雇人トノ契約ヨリ生シタル訴訟ノ如キハ其事柄

簡單ニシテ錯雜ナルコト殆ント罕ナリ又旅人ト旅店若クハ飲食店又ハ水陸運送人等ノ間ニ起リタル宿料賄料又ハ運送料手荷物等ニ關スル訴訟ノ如キハ其事件當ニ簡單ナルノミナラス此等ハ迅速ノ處分ヲ必要トスレハナリ

是ヨリ第二ニ列記セル場合ニ付キ説明スヘシ

(イ) 此場合ニ於テ區裁判所ノ管轄スヘキハ必ス權原ニ關シテ爭ヒナキヲ要ス之ヲ詳言スレハ賃借契約ニ付キ一方ハ家屋ノ受取方ヲ請求シ他ノ一方ハ單ニ其引渡ヲ拒ムヨリ起ル訴訟ノ如キハ即チ區裁判所ノ管轄タルヘキモ賃借契約其者ニ付キ爭ヒアル時之ヲ例ヘハ一方カ賃借契約ナルモノナシト抗辯シ以テ其家屋ノ引渡ヲ拒ムカ如キハ是契約ノ有無ニ關スル權原ノ爭ヒナリ即チ此等ハ區裁判所ノ管轄スヘキ所ニアラス

(ロ) 此場合ニ於テモ單ニ經界ノ爭ヒノミニ止マルヲ要ス換言セハ不動産其物ニ付キ爭フニアラスシテ唯不動産ノ或ル部分ヲ侵害セラレタリトノ訴訟ニ限ル若シ夫レ然ラス所有權ノ爭ニ關ルモノハ亦區裁判所ノ管轄スヘキ所ニアラス

疑者或ハ曰ハン土地ノ經界ニ異動アルトキハ其面積或ハ増加シ或ハ減少スル等必スヤ其地域ニ變更ヲ來サン然ラハ則チ經界ノ爭ハ則チ所有權ノ爭ヒニ外ナラサルニ非スヤト或ハ然ラン然レトモ土地經界ノ爭ヒニハ或ハ所有權ヲ根據トスルアリ或ハ又占有權ヲ根據トスルアリ然レハ若シ所有權ヲ根據トスルトキハ經界ノ異動アルト共ニ所有權ニモ亦異動ヲ來スヘシト雖トモ之ニ反シテ占有權ヲ根據トスルトキハ其經界ニ異動アルモ爲メニ所有權ニ異動アルコトナシ故ニ本條(ロ)ニ所謂「不動産ノ經界ノミニ關ル訴訟」トハ單ニ占有上經界ニ關ル訴訟ト看ルヘク決シテ所有權上ノ經界ニ關ル訴訟ヲ指スニアラサルナリ

(ハ) 以下ハ法文ノ示ス所自ラ明瞭ナルヲ以テ復タ解説スルノ要ナシ

第十五條 區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍

及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一 未成年者、瘋癲者、白癡者、失踪者、其法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

區裁判所
非訟事
件ニ關ス
ル權限

百
第二 不動産及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事
第三 商業登記及特許局ニ登録シタル特許意匠及商標
ノ登記ヲ爲ス事

非訟事件トハ名稱ノ示ス如ク訴訟ニ非サル事件即チ争ヒナキ事件ニシテ彼ノ
訴訟事件ト相對スルモノトス已ニ訴訟事件ニ非ルニ尙ホ裁判所ノ關與スルハ
抑モ如何其理由ニアリ

第一理由 司法權ハ人民保護ノ一義ニアリ故ニ私權ノ行使ニ付テモ亦司法ノ
關與ヲ必要トス

第二理由 私權ノ行使ニ付テハ其證據明カナルヲ要シ然ラサレハ他日紛議ヲ
生シクルトキハ其私權ヲ保護スルニ困難ヲ來シ或ハ遂ニ貴重ナル權利ヲ失ハ
シムルノ恐レナシトセス故ニ其證據ヲ確保スルニハ亦司法權ノ關與ヲ必要ト
ス

右等ノ理由ニ依リ非訟事件モ尙ホ裁判所ノ管轄トシ裁判官ノ關與スル所ナリ
ト雖トモ余ハ聊カ之ニ付キ意見無キニ非ス但シ其議論ハ暫ク措キ今ハ唯本條

ノ各項ニ付キ説明スルニ止メントス兎ニ角區裁判所ノ裁判官ハ常ニ人民ト直
接ノ關係アルカ故ニ其地方ノ慣習事情ヲ知悉スルヲ以テ此等ノ事ニ任セシム
ルハ穩當ナルヘシ蓋シ此等ノ事ハ民法人事編ヲ通讀セハ蓋シ明白ナラン

第一 未成年者以下ノ者等ハ法律之ヲ保護スルノ要アルヲ以テ此等ノ者ニ付
スルニ後見人又ハ管財人ヲ以テセリ已ニ後見人又ハ管財人ヲシテ家事ヲ擔當
セシメ以テ本人ヲ保護スル方法ヲ設ケタリト雖トモ其後見人管財人ノ取扱フ
所ニシテ若シ過誤失錯又ハ奸惡ノ事アラシカ爲メニ本人ニ損害ヲ蒙ムラシム
ルニ至ラン是ヲ以テ其過誤失錯又ハ奸惡ノ處置ナカラシメンカ爲メ事ノ重要
ナル者ハ之ヲ區裁判所ニ願出テ指令ヲ仰クカ又ハ認可ヲ受クルヲ要ス此等ノ
事ハ民法又ハ特別法ノ規定スル所ニシテ何レモ人民保護ノ主旨ニ出テシモノ
トス

第二 不動産トハ土地建物等ヲ云ヒ船舶トハ日本形ト西洋形トヲ問ハス又帆
走船タルト蒸氣船タルトヲ論セス共ニ之ヲ包含スルモノトス而シテ其不動産
及船舶ハ何人ノ所有ニ屬スルカ又ハ何人ニ移轉シタルカ又ハ何人ニ抵當トナ

リ若クハ其物權ノ上ニ如何ナル權利ヲ有シ又如何ナル義務ヲ負フカ等ノ事ハ之ヲ公簿ニ登記シテ以テ其權利及ヒ義務ヲ明了ニ示サ、ルヘカラス是登記法ノ制定アリシ所以ニシテ其登記ノ事務ハ區裁判所ノ取扱フ所トセリ

第三 商法第十一條ニ曰ク「右ノ未成年者自己ノ爲メ商ヲ爲サント欲スルトキハ前項ノ要件ヲ明記シ且自己及ヒ父母又ハ後見人ノ署名捺印シタル陳述書ヲ管轄裁判所ニ差出シ登記ヲ受ク可シ然ルトキハ其登記ノ日ヨリ商事ニ於テ總テノ權利及ヒ義務ニ關シ成年者ト全ク同一ナルモノトス」第二項ト又同法第十四條ニ曰ク「夫婦ノ一方カ商ヲ爲シ夫婦間ニ財產共通ヲ爲サ、ルトキ又ハ之ヲ解キタルトキハ商業登記簿ニ登記ヲ受クル爲メ其事實ヲ管轄裁判所ニ届出ツルコトヲ要ス」第一項ト又同法第十八條ニ曰ク「商號、後見人、未成年者、婚姻契約、代務及ヒ會社ニ關スル商業登記簿ハ當事者ノ營業所又ハ住所ノ裁判所ニ之ヲ備ヘ登記及ヒ之ニ關スル事務ハ其裁判所之ヲ行フ」第一項ト尙ホ同法第二十二條ニ曰ク「登記シタル事項ハ公ニシテ且裁判所ノ認知シタルモノトス何人ト雖トモ毫モ已レノ過失ニ非サルコトヲ證シ得ルニ非サレハ之ヲ知ラサルヲ以テ已

レヲ保護スルコトヲ得ス然レトモ其事項ハ他ノ方法ニ因リ之ヲ知得タル者ニ對シテハ登記ノ前後ヲ問ハス其効用ヲ致サシム云々ト此他此類ノ規定商法中ニ少シトセス而シテ此等ノ事件ニ係ル事務ハ區裁判所ノ取扱フモノトス又區裁判所ハ特許局ニ登録セル特許意匠及ヒ商標ノ登記事務ヲ取扱フモノトス我邦從來ノ制ハ農商務省ニ於テ特許局ニ登録シタル特許ヲ公ニスルハ官報ニ登載スルノミニ止マリ別ニ登記ノコトナシト雖トモ而モ登記ハ全國一般ニ普及ヲ要スルモノナレハ本法ニ於テ登記ノ事ヲ區裁判所ニ管轄セシメタリ故ニ本法施行後即チ廿三年十一月以降ハ唯特許局ニ於テ之ヲ公ニスルノミニ止マラサルナリ

第十六條 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 違警罪

第二 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル

二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ係ル輕罪

第三 刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑二

百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第二ニ揭ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若ハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

前項ノ手續ニ因リ訴追ヲ爲シ犯罪ノ證明アリタル場合ニ於テ判決ヲ爲ス前何時ニテモ其情第二ニ揭ケタル刑ニテハ相當ニ罰スルコトヲ得スト認ムルトキハ區裁判所ハ之ヲ裁判スル權限ヲ有セストノ言渡ヲ爲ス此場合ニ於テハ檢事ハ被告人ヲシテ相當ノ裁判所ニ於テ裁判ヲ受ケシムル爲メ適當ノ手續ヲ爲ス

區裁判所ノ刑事ニ關スル裁判權

本條ハ刑事ニ係ル區裁判所ノ權限ヲ定メシモノトス從前ノ治安裁判所ハ單ニ違警罪ノミニ止マリ輕罪ニ付テハ毫モ裁判權ヲ有セス然ルニ本法ニ於テハ舊ニ違警罪ノミナラス或ル輕罪ヲモ裁判セシムルコト、ナセリ是實ニ新設ニ係

ルモノナリ

夫レ名ハ輕罪ナルモ其性質或ハ輕微ナルモノアリ而モ猶ホ上級裁判所ノ管轄トセハ徒ラニ其名ニ拘泥シ空シク手數ヲ要スルノミニテ毫モ實益アルコトナシ是故ニ本條ニ於テ輕罪中輕微ナルモノハ區裁判所ノ管轄ト爲セシハ甚タ其宜キヲ得タルモノト謂フヘシ然レトモ區裁判所ハ主トシテ違警罪ヲ裁判スルニアリテ輕罪ヲ裁判スルハ即チ例外ナリト知ルヘシ之ニ由テ區裁判所ノ裁判權ハ第一違警罪ニシテ第二ハ本刑五十圓以下ノ附加罰金アルカ又ハ附加罰金ナキ二月以下ノ禁錮ニ當ル輕罪是ナリ

或ハ問フ者アリ曰ク明治十八年第三十一號布告違警罪即決例ニ依レハ違警罪ハ先ツ警察署ニ於テ處分スルモノトス此即決例ハ爲メニ廢止セラレタルモノナリヤト決シテ否ラス是レ裁判所構成法施行條例第九條ノ明定スル處ナレハ違警罪ハ尙ホ警察署長又ハ警察分署長若クハ其代理タル官吏其管轄地内ニ於テ犯シタルモノヲ處分ス而シテ若シ其處分ニ服セス正式ノ裁判ヲ請求スルトキハ區裁判所ハ之ヲ裁判スルモノナリ

裁判所構成法

今ヤ第二ノ項目ヲ分拆セハ左ノ三種トナルヘシ

第一 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加スル二月以下ノ禁錮ニ該ル輕罪

第二 罰金ヲ附加セサル本刑二月以下ノ禁錮ニ該ル輕罪

第三 本刑百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

右第一ハ刑法第二百三十二條第二百四十三條第二百四十九條等ノ如キ犯罪第二ハ刑法第三百一條ノ如キ犯罪又二十三年法律第九十九號ニ規定セル犯罪第三ハ刑法第三百三十六條末段第三百三十七條末段第五百十條第六十條等ノ如キ犯罪ニシテ此他尙ホ少カラストス

第三ノ項目ハ刑法第二編第一章則チ皇室ニ對スル罪ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑ハ前項ノ刑期金額ヨリ一層重キモノナレトモ而モ其犯罪ノ情狀更ニ重キ刑ヲ科スヘキ必要ナシトシ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ移付シタルモノヲ裁判スルニ在リ而シテ本項ヲ分拆セハ亦左ノ三種トナルヘシ

第一 本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加スル刑期二年以下ノ禁錮ニ該ルモノ

第二 罰金ヲ附加セサル本刑二年以下ノ禁錮ニ該ルモノ

第三 本刑三百圓以下ノ罰金ニ該ルモノ

皇室ニ對スル犯罪ハ縱令ヘ輕罪ナルモ其事重大ナルカ故ニ最下級ノ裁判所ナル區裁判所ニ於テ裁判スルハ大ニ權衡ヲ失フヲ以テ殊ニ合議裁判所ノ干與スルモノトシ以テ其手續ヲ鄭重ニセリ

右第一ハ刑法第四百一條第五百一條第五百十二條等ニシテ第二ハ刑法第四百十二條第一項第五百五十五條第七十一條ノ如キ第三ハ刑法第二百五十條第三百十七條ノ如キ犯罪是ナリ

凡ソ刑期金額ヲ判定スルニハ純然タル本刑即チ加重若クハ減輕セサルモノニ依ラサルヘカラス何トナレハ特ニ本刑トアルヲ以テ純粹ノ本刑タルヤ知リ得ヘキヲ以テナリ故ニ再犯ニ依リテ加重スレハ或ハ二月以上ノ禁錮トナリ又ハ百圓以上ノ罰金ニ該ルモ尙ホ區裁判所ノ管轄ニ屬ス若シ亦加重ノ爲メ最長期二年以上ノ禁錮若クハ最多額三百圓以上ノ罰金ニ該當スルモ犯罪ノ情狀ニ依リ尙ホ二月以下ノ禁錮又ハ百圓以下ノ罰金ニ處シテ充分ナリト認メタルトキハ區裁判所ニ移付シテ可ナリトス然レトモ刑法第九十九條ノ但書ニ從犯及ヒ

未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ハ其加減シタルモノヲ以テ本刑トストアルカ故ニ此等ノ加重減輕ニ係ルモノハ其加減シタルモノニ因リ管轄裁判所ヲ定ムヘキナリ

本條末項ニ所謂訴訟^〇トハ公訴ヲ起シテ之ヲ繼續スルコトニシテ從來稱スル所ノ起訴ニ同シ蓋シ訴訟ノ語ハ最モ穩當ナリトス何トナレハ起訴ノ語ハ公訴ノ提起ニハ穩當ナルモ以テ公訴ノ實行ヲ稱スルニ適セス而シテ此語ハ固ト後方ヨリ前方ニ向ヒ訴訟ヲ進行セシムルノ意義ナレハ訴權ヲ繼續實行スルコトヲ意味スルニハ極メテ適切ナレハナリ

區裁判所ニ於テ地方裁判所又ハ其支部ノ檢事局ヨリ移付ヲ受ケ事實審理ノ際本件以外ノ犯罪ヲ發見スルカ又ハ其事實ニ於テ更ニ情狀ノ重キヲ見出スカ若クハ被告ハ初犯ニ非スシテ再犯以上ナリシ等ニ因リ到底前示第二ノ如キ五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セサル二月以下ノ禁錮ニテハ或ハ輕キニ失シ罪ト刑トノ權衡ヲ得スト認メタルトキハ檢事ノ訴追ニ拘束セラレ、コトナク其判決前何時ニテモ其被告事件ハ區裁判所ノ權限ニアラサル旨ヲ言渡スコ

トヲ得是本條末項ノ規定スル所ナリ

右區裁判所ニテ之ヲ裁判スル權限ヲ有セストノ言渡ヲ爲シタルトキハ檢事ハ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事ニ該事件ヲ返付シ更ニ相當ノ裁判所ニ送付セシムルモノトス

右ノ規定タル最モ斬新ニシテ獨逸法ニ範リシモノトス今理論上ヨリ觀察スレハ甚タ便宜ナルカ如シ然レトモ犯罪ノ情狀ハ人ニ依テ各其感覺ヲ異ニス例ヘハ余ハ二月ノ禁錮ヲ科スルヲ以テ相當ナリト考フルモ諸君ニ於テハ四月ノ禁錮ヲ適用シテ可ナリトセラル、カ如ク裁判官モ檢事モ亦等シク人間ナレハ各自其事ニ對シテ抱ク所ノ感情ハ決シテ同一ナルヲ得サルハ蓋シ勢ヒノ免レサル所ナルベシ試ミニ思ヘ地方裁判所檢事カ本條第二ニ掲ケタル刑期金額内ニテ處分シテ可ナリト認メ移付シタルモ區裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ニ反シ其刑期金額内ニ於テ處分スヘカラサル情狀ノ重キ事件ナリト認ムルトキハ之ヲ如何スヘキカヲ

我邦ノ如キ裁判所ノ設置普ネカラス地方裁判所ト區裁判所ト數里ノ距離アル

間ヲ往復セシメンカ之カ爲メニ多クノ日子ヲ消シ多クノ費用ヲ拂ハサルヘカ
 ラス而シテ其事件ヲ問ヘハ即チ輕罪ナリ輕罪ハ固ト地方裁判所ノ管轄タルハ
 正則ニシテ區裁判所ニテ之ヲ取扱フハ畢竟例外タルニ過キサルコトハ法文上
 明白ナリトス然ルニ本條第三ノ規定アルカ爲メ其事件輕罪ニシテ地方裁判所
 ノ管轄スルハ正則タルニモ拘ハラズ其情狀輕キモノト認メ第二ノ刑期金額内
 ニテ處分センカ爲メ日子ト費用ヲ糜シ而モ例外ナル區裁判所ニ移付スルノ手
 續ヲ爲シ而シテ或ハ其區裁判所ニテハ之ヲ裁判スル權限ナシトテ排斥スルノ
 恐レアリト云フニ至テハ事穩當ヲ欠キ却テ不便ヲ感スルモノ、如シ
 然リト雖トモ是レ恐ラクハ杞憂ナランカ蓋シ地方裁判所ノ檢事ニ於テ慢リニ
 區裁判所ニ移付スルコトアリトセハ或ハ前述ノ如キ弊ナシトセス然レトモ何
 人カ認ムルモ區裁判所ノ管轄タルニ毫モ疑ナキ事件ニシテ始メテ之ヲ區裁判
 所ニ移付スヘク決シテ輕々移付スルカ如キコトアラサルヘシ然ラスンハ當ニ
 空シク手數ト時間トヲ費シ便宜ニ出テタルノ法律却テ便宜ヲ來スヘキヲ以
 テ此點ハ總テ檢事ノ手心如何ニ固リ法律ノ妙效ヲ見ルヘキノミ

此構成法頒布後屋外竊盜ヲ處スルニ特別法ヲ以テスルコト、ナレリ是レ其損
 害ノ額及ヒ犯罪ノ模様ニ因リ或ハ地方裁判所或ハ區裁判所ノ管轄タルヘキモ
 ノナリ而シテ區裁判所ニ於テ審理辯論ノ際其贓額五圓以上ナリトノ事實判然
 セシトキハ其事件タル區裁判所ノ管轄スヘキモノニ非サレハ之ヲ裁判スヘキ
 ノ權限ヲ有セストノ言渡ヲセサルヲ得サルヘシ
 然ルニ獨逸法ニ規定スル所ヲ見ルニ審理ノ末其贓物法律規定ノ上ニ出ツルコ
 ト明白ナルニ至ルモ又其所犯法律規定ノ或ル範圍内ニテハ相當ニ罰スルコト
 ヲ得スト認ムルモ一旦受理シタル事件ハ或ル例外ヲ除クノ外ハ尙ホ區裁判所
 ニ於テ法律ニ從ヒ罪刑相當ノ處分ヲ爲スコトヲ許シ大ヒニ區裁判所ノ權限ヲ
 増廣シタリ蓋シ獨逸法ノ規定タル事件ノ交互送付ノ繁ヲ省キ公訴ノ彼此轉
 ノ弊ヲ防グノ意ニ出テシモノナラン

第十七條 前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權
 限ハ此章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定
 ムル所ニ依ル

區裁判所ノ權限ハ第十四條乃至第十六條ニ示セルカ如シト雖トモ猶ホ此他民事刑事ノ訴訟法若クハ特別法ノ定ムル處ニ係ルモノアリ而カモ其取扱フ所ノ事件ハ本法第二章ニ定メタル權限ニ出テサルヘシ是レ本條ノ精神ナリトス

第十八條 各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

區裁判所
ノ檢事局

舊治罪法ニ依レハ違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在地ノ警部之ヲ行ヒ又治安裁判所ニテ輕罪事件處分ノ爲メ特ニ檢事ヲ置クコトアルモ檢事局ヲ置クコトナシ然ルニ本法第六條ニ於テハ何レノ裁判所ニテモ檢事局ヲ置クヲ以テ原則トセリ本條第一項ハ即チ其原則ノ結果ニ外ナラス而シテ此ノ如ク區裁判所ニ檢事ヲ置クハ是レ從來ト異ナリ輕罪ノ大部分ヲ管轄スルコトトナリシテ以テナリ是レ又獨逸法ニ摸倣セシモノトス

然レトモ檢事ノ員數ハ妄リニ増員スヘカラサルヲ以テ各地悉ク充分ニ檢事ヲ置カス否ラスンハ費用ノ増嵩ヲ來セハナリ故ニ警察官憲兵將校下士林務官ヲシテ檢察官ノ事務ヲ取扱ハシムルコトトセリ尙ホ又其不便ヲ避ケンカ本條第二項ヲ設ケタリ是レ檢察ノ任ニ當ル者少キカ爲メ事務ノ滯滞ヲ來サンコトヲ慮リテナリ然ラハ則チ此等ノ官吏ハ總テ檢事ノ職ニ任スルモノナルカ否決シテ然ルニアラス若シ夫レ然リトセハ檢事ノ職務ハ此等官吏ノ爲メニ蹂躪セラレ、ニ至ラン故ニ法文ニ其地ノ云々トアリテ唯區裁判所所在地ニ勤務スル所ノ此種ノ官吏ニ限リ檢事ノ職務ヲ行フコトヲ便宜上許セシノミ

本條第三項ニハ法律上直接ニ檢事ノ代理ヲ爲スコトヲ許サスシテ間接ニ檢事ノ職務ヲ代理スルコトヲ許セリ即チ區裁判所判事試補及ヒ郡市町村長是ナリ蓋シ此等ノ者ハ司法大臣ノ命令ニ因テ代理ヲ爲スモノトス是レ司法大臣ハ總當ナル場合ニ於テハ區裁判所ノ判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得ト規定セル所以ナリ而シテ其所謂適當ナル場合トハ區裁判所ノ檢事ニ差支アルトキハ判事ヲシテ代理セシムルコトハ已ニ第六條末項ニ

裁判所構成法

規定セル所ナレトモ而モ判事一人ノミナルカ又ハ二人アルモ一人ノ判事ニ差支アリテ檢事ノ代理ヲナスコトヲ得サルトキハ他ニ代理者ヲ求メサルヘカラス適當ナル場合トハ則チ此等ノ場合ヲ指示スルモノトス

又判事ハ法律ノ規定ニ基キ當然檢事ノ職務ヲ執ル者ナレハ敢テ司法大臣ノ命令ヲ待ツノ必要ナシト雖トモ而モ試補ノ如キハ未タ純乎タル判事ニ非サルシ故ニ當然檢事ノ職務ヲ執ルノ資格ナク殊ニ郡市町村長ノ如キハ多クノ場合ニ於テハ純然タル行政官タルニ過キサレハ固ヨリ檢事ノ職務ヲ執ル當然ノ資格ナシ故ニ此等ノ者ヲ檢事ノ代理ヲナスニハ特ニ司法大臣ノ命令アルヲ要スルナリ

又判事試補并ニ郡市町村長ノ如キハ檢事ノ差支アル場合其他相當ノ場合ニ於テ之カ代理ヲ爲スモノナレハ暫ラク措テ論セス彼警察官、憲兵、將校、下士又ハ林務官ノ如キハ本來檢事ノ補佐トシテ司法警察ノ事務ニ任スルモノナリ而モ檢察官ノ事務ハ檢事固有ノ職權ニ屬スルカ故ニ警察官以下ノ者等カ檢事ノ職ヲ行フ場合ハ孰レモ其固有ノ職權上ニ關ル事件ニ限ルナリ即チ其職務上擧シ

地方裁判所

タル犯罪事件是レナリ若シ夫レ固有ノ職務ニ干係ナキ事件ニ至テハ必ラス檢事ニ讓ラサルヘカラス又假令ヘ固有ノ職務ニ干係スル事件ト雖トモ檢事ノ自ヲ進ンテ其事務ニ當ル場合ニハ猶ホ檢事ニ之ヲ讓ルヘキナリ

第三章 地方裁判所

第十九條 地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若クハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設

ク

第一審ノ合議裁判所

已ニ述ヘタル如ク地方裁判所ハ從來ノ始審裁判所ニシテ此裁判所ハ各府縣ニ設クルカ故ニ地方裁判所ノ名稱ヲ付シタルナラン

本條第一項ニ所謂ル第一審トハ第一次ノ審判ヲ云ヒ即チ第二審ニ對スル名稱ニシテ從來稱スル所ノ始審ト同一義ナリト知ルヘシ

合議裁判所ノ如何ナルモノタルヤハ余ノ已ニ説明シタル所ニシテ本法第三條ニ之ヲ明示セリ乃チ數人ノ判事ヲ以テ組立タル部ノ設ケアル裁判所是ナリ而

シテ裁判ハ總テ第一審ニ始マリ第二審ニ終ルモノニテ地方裁判所ハ主トシテ其第一審ヲ司トリ第二審ヲナスハ地方裁判所ノ性質ヨリ觀察スレハ實ニ例外ナリ故ニ本條ハ其正則ニ從ヒ第一項ニ地方裁判所ハ第一審ノ合議裁判所トスト規定セリ蓋シ第一審ヲ爲シ尙ホ第二審ヲ爲スカ又ハ第一審ニシテ終審ヲモ兼ヌルモノヲ除キ第三十八條第五十條第二合議裁判所ニシテ第一審ヲ爲スモノハ地方裁判所ニ限レハナリ

各地方裁判所ニハ必ス二部ヲ分設シ第一ヲ民事部トシ專ラ民事ヲ取扱ヒ第二ヲ刑事部トナシ專ラ刑事ヲ取扱ハシム又若シ裁判事務繁多ナル地方ニ在テハ二個以上ノ民事部若クハ刑事部ヲ置クコト、セリ

第二十條 各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

地方裁判所長

區裁判所ニ二名以上ノ判事アルトキハ特ニ監督判事ヲ置キ以テ裁判所全體ノ事務ヲ監督セシムルト全シク各地方裁判所ニモ亦其長ヲ置ク而シテ各地方裁判所長ノ職務ハ一ハ其地方裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮スルト一ハ裁判所ノ行政事務ヲ監督スルトノ二アリ

地方裁判所ニハ司法行政ノ事務アリ宜シク之ヲ監督スルモノ無カル可カラズ即チ其所長ヲシテ之ニ當ラシムルモノトス而シテ固ト地方裁判所長モ亦判事ナリト雖トモ一般ノ事務ヲ指揮シ及ヒ行政事務ヲ監督スルハ敢テ判事タルノ資格ヲ以テセス乃チ裁判所長タルノ資格ヲ以テ爲スナリ故ニ若シ判事ノ資格ヲ以テセハ決シテ他ヨリ監督ヲ受ケサルモ而モ地方裁判所長タルノ資格ナルヲ以テ其行政事務ニ付テハ尙ホ上官ノ監督ヲ受ケサルヘカラス(第三百三十四條 第三百三十五條第一項及ヒ第三項參照)

各地方裁判所ニハ民事部及ヒ刑事部ヲ置クヲ以テ隨テ亦之カ部長ヲ置カサルヘカラス而シテ部長ハ其部ノ事務ヲ監督シ及ヒ部員ノ分掌スヘキ事務ヲ定ムルモノトス蓋シ地方裁判所ハ合議裁判ナレハ其各部ハ三名ノ判事ヲ以テ組織

シ其三名中一人ハ即チ部長トス是レ事務處辨ノ敏活ヲ期スルニ出テタルノ制ナリ

第二十一條 司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

豫審判事

豫審ハ迅速ニ證據ヲ蒐集シ奸惡ノ徒ヲシテ苟クモ其罪ヲ免カレシムルコトナク又無罪ノ者ヲシテ空シク鐵窓ノ下ニ呻吟セシメサラシムルニアレハ必ス敏捷活潑ニ之ヲ處分スルノ要アリ故ニ豫審判事ハ其性質機敏ニシテ且ツ事務ニ熟練スル者タラサルヘカラス若シ夫レ然ラサランカ犯罪事件爲ニ擧ラス事務必ス澁滞シ公益ヲ害スルコト蓋シ亦少シトセス是ヲ以テ司法大臣ハ數人ノ判事中ニテ特ニ之ヲ撰ビ以テ其任命ヲ鄭重ニセリ

已ニ豫審判事ハ司法大臣ノ任命スル所ナレトモ而モ其管轄ハ其判事ノ屬スル地方裁判所ノ裁判權ニ係ル刑事ニ限ル是レ本條中ニ其裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ストアル所以ナリ故ニ甲裁判所ノ豫審判事ハ其

甲裁判所ノ豫審事務ヲ取扱フニ止マリ決シテ乙裁判所ノ事務ニ及フコトヲ得ス

第二十二條 各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通

則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年以前以テ之ヲ定ム

前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス

可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

地方裁判所長ハ次年自ラ部長ニナルヘキ部ヲ指定スヘシ

區裁判所ノ事務ノ分配ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ之ヲ定ム(本法第十一條ト爲シタル如ク地方裁判所ニ於テモ亦其各部及ヒ各豫審判事ノ事務ノ分配

ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從フモノナリ

各地方裁判所ノ各部長及ヒ部員ノ配置并ニ所長部長部員ノ差支アルトキハ代

事務ノ分配、配置、代理

理セシムル者ヲ毎年豫シメ定メ置クノ理由ハ前キニ述ヘタル如ク紛雜ヲ防ギ且偏頗專横ナル嫌疑ヲ避ケ以テ公正ノ處置ナルコトヲ示サンカ爲メナリ
 裁判官ハ固ヨリ獨立不羈ナレハ其分掌ヲ定ムルニ付キ敢テ他ノ箝制ヲ受クヘキニアラスト雖トモ公平ヲ保チ且事件ノ權衡ヲ得セシメンカ爲メニ裁判所長ヲ以テ會長トナシタル會議ニ於テ一ニ衆議ノ議定ニ依リ決スルモノトセリ
 裁判所長ハ其裁判所ノ長官タルヲ以テ自己ノ入ルヘキ部ヲ擇ハシメ以テ一層裁判事務ヲ舉ケシメンカ爲メ自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スルコトヲ許セリ
 第二十三條 或ル部ニ於テ着手シタル事務ニシテ司法年度ノ終若ハ休暇ノ始ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ終了セシムルコトヲ得
 豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ同シ
 司法年度ハ曆ニ從ヒ一月一日ニ始リ十二月三十一日ニ了ルモノナレハ其年一

月一日ニ至レハ會テ分掌ヲ定メタル新ナル部員其事務ヲ擔任スルヲ原則トス又七月十一日ヨリ九月十日迄ハ裁判所ノ休暇ニシテ新ナル事件ハ勿論既ニ着手シタル事件ト雖トモ急速ヲ要スルモノヲ除クノ外事務ヲ中止スルノ規定ナリ(本法第二百二十八條參照)
 然レトモ若シ必ス此ノ如クナランカ往々不都合ノ生スルコトアラシ故ニ本條ニ於テハ其原則ニ對シ一ノ變則ヲ設ケ以テ便宜ヲ謀レリ是レ一ハ事務ノ停滯ヲ防キ一ハ當事者ノ權利ヲ保護センカ爲メナリ今夫レ右ノ原則ニ拘束シ一月一日ニ至ラハ必ス交代シ又休暇來レハ必ス中止スルモノトセハ事務ノ滯滞ハサテ措キ其干係員ノ變更ノタメ其事件ハ更ニ最初ニ遡テ取調フルコト、ナリ當事者ノ迷惑實ニ少ナカラス又休暇ニ當レハ忽チ二个月間ハ權利ヲ伸張スルコトヲ得サルニ至ラン是ヲ以テ其原則ニ拘ハラヌ同一ノ係員ヲシテ引續キ事ヲ結了セシムルコトトセリ而シテ其變則ヲ用ユルノ必要ヲ認ムルハ一ニ裁判所長ノ權内ニ任セタリ
 殊ニ豫審處分ノ如キ其審理ノ頗未ハ調書ニ記載スルモノナレハ其大體ヲ記ス

ルニ止マルモノ多ク到底網羅詳悉スルコト能ハサルヲ以テ其後任者タルモノ
 容易ク之ヲ知得スルニ由ナク爲メニ事件澁滞シ公益ヲ害スルニ至ラン故ニ豫
 審判事ニ於テモ依然前任者ヲシテ其事件ヲ結了セシムルコトヲ得ト爲セリ
 茲ニ注意スヘキハ第一項ニ或ル部ニ於テ着手シタル事務ニシテ司法年度ノ終
 リ云々トアリ其事務ハ民事事ヲ包含スルモノトス又其着手シタル事務トハ司
 法年度ノ終リ若クハ休暇ノ場合ニ干係スルモノナルコト是ナリ
 或ル有名ナル學者ハ曰ク刑事ノ事務ニシテ暑中休暇ニ際シ未タ結了ニ至ラサ
 ルモノハ暫ク停滯ニ付スルハ實ニ止ムヲ得スト雖トモ而モ裁判所長ニ於テ必
 要ト認メ便宜ナリト思ハ、休暇ニ拘ハラス審理セシムヘシ豫審事件ノ結局ニ
 至ラサルモノモ亦全シト蓋シ論者ノ説ハ司法年度ノ終リニ際スル場合ナレハ
 敢テ不可ナキモ而モ休暇ノ場合ニハ猶ホ亦此ノ如シトスルニ至テハ實ニ妄斷
 ノ論決ナリト云フヘシ
 夫レ司法年度ノ轉移ニ際セハ事務ノ分配ハ一變スレトモ休暇ハ決シテ係員ノ
 變更スルニ非ス唯タ官ノ都合ニ依リ事務ヲ停止スルノミ然ルニ論者ノ如ク刑

事モ休暇ナレハ已ニ着手シタル事件ヲ中止スルハ原則ナレトモ裁判所長ノ便
 宜トスルヨリ繼續スルモノナリトセハ裁判所ノ休暇ノ爲メ獄窓ノ裡ニ拘禁セ
 ラル、囚徒ハ空シク日ヲ消シテ開庭ヲ俟タサルヘカラサル不幸ノ結果ヲ來ス
 ヘシ既ニ民事ニ於テモ休暇ハ多少當事者ノ迷惑スルモノナルニ況ンヤ裁判官
 カ一時便宜ノ爲メ其罪ノ未タ定マラサル囚徒ヲ拘留スル刑事ニ於テヤ又第
 百二十八條ニ「休暇中ハ云々既ニ着手シタル民事訴訟ヲ中止ス且新ナル訴訟ニ
 著手セス」トアレトモ第二百二十九條ニハ「休暇中ニ拘ハラス刑事訴訟云々之ヲ停
 止スルコトナシ」トアリテ本條ニ於ケル「休暇中」ノ總例ニ付テハ刑事ハ民事ト同
 様ニ規定シアルニアラサルコトハ明白ナルヲヤ論者ノ説ヲ妄斷ト云フ決シテ
 誣言ニアラサルナリ

第二十四條 第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置

- 一 タヒ定マリタルトキハ休暇中ヲ除キ一部ノ事務多キ
- ニ 過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久
- ク 闕勤スル者アル等引續キ差支アルニ非サレハ司法年

事務分配
ノ變更

度中之ヲ變更セス
裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法
大臣適宜ト認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコ
トヲ得

事務ノ分掌、判事ノ配置ハ一ハ以テ專横ノ嫌ヲ避ケ不公平ノ疑ヲ防キ一ハ以テ
時ニ臨ンテ煩雜ヲ來サンコトヲ慮リ之ヲ定ムルモノナレハ一タヒ決定シタ
ル上ハ容易ニ變更スヘキニアラス否ラサレハ其効ナキニ至ラン然レトモ事務
ニ繁簡アリ人ニ事故ナキ能ハス之ヲ以テ一タヒ定メタルモノハ毫モ變更スヘ
カラストセハ甚タ不都合ヲ生スルコトアラシ法律ハ以下三個ノ場合ヲ豫期シ
變通ノ途ヲ開キタリ

第一 或ハ一部ノ事務カ他ノ部ニ比スレハ繁多ナル等ノ場合 但休暇中ハ此
限リニアラストス何トナレハ休暇中ハ第二百二十八條ニ因リ事務ヲ停止スル
コトアレハ事務ノ繁簡ヲ問フヘキニアラサレハナリ
第二 判事退轉等ノ場合 判事ノ轉任退職スルアレハ忽チ欠員ヲ生スルヲ以

テ勢ヒ變更ヲ來サ、ルヲ得ス

第三、判事ノ罹病、其他父母ノ看病、歸省等ノ事故ニ依リ久シク欠勤スル場合

此トキハ永久ノ差支ニシテ一時ノ事ニアラス

右三個ノ場合ノ生シタルトキハ第二十二條第三項ニ從ヒテ更ニ會議ヲ開キ之
ヲ定ムルモノトス

部ノ新設

裁判所ニ部ヲ設ケ若クハ事務ヲ分配スルハ一ニ司法大臣ノ定メタル通則ニ從
フモノナレトモ若シ現在或ル部ノ事務繁劇ニシテ自ラ滯滞ヲ來ス恐レアレハ
更ニ其部ノ増設ヲ要スヘシ此場合ニ於テ其増設ヲ定ムルハ司法大臣ノ認ムル
處ニ任スルモノトセリ

第二十五條 地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱

フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘ
キ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ
裁判所長ハ其ノ管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判
事ニ其ノ代理ヲ命スルコトヲ得

判事差支アルトキハ第二十二條第二項ニ依リ豫メ定メタル順序ニ從ヒ代理セシムヘシト雖トモ猶ホ代理トナル者ニ差支アルトキハ如何スヘキヤ固ヨリ通常ノ差支ナレハ或ハ其裁判ヲ遅延スルコトヲ得ルモ若シ急速ヲ要スル事件ナレハ其審理ヲ延滞スル能ハス是レ本條ノ規定アル所以ナリ

則チ裁判所長ハ其管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ヲシテ其代理者ノ代理ヲ命スルコトヲ許セリ是レ裁判官ヲ流用スルノ方法ニシテ蓋シ裁判事務ノ一日モ遲滞ナカラシメンカ爲メノミ

豫備判事トハ第六十二條及ヒ第六十三條ノ規定セル所即チ第二回ノ競争試験ニ及第セル試補ニシテ已ニ判事ニ任用セラレタリト雖トモ未タ裁判所ニ欠位ノ生セサルタメ司法省又ハ地方裁判所若クハ區裁判所ニ勤務スルモノ是ナリ

第二十六條 地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付

裁判權ヲ有ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ

權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル

抗告

地方裁判所ノ民事訴訟ニ於ケル裁判權

本條ハ地方裁判所ノ民事訴訟ニ於ケル裁判權ヲ規定セルモノナリ蓋シ區裁判所カ民事刑事何レモ第一審ヲナスモノハ最下級ノ裁判所タルカ故ナリ然ルニ地方裁判所ハ區裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ノ第二審ヲ爲スノミナラス猶ホ區裁判所ノ權内ニ屬セサル一切ノ事件ヲ管轄スルヲ以テ其權限甚々狹カラス則チ地方裁判所ハ第一審トシテハ區裁判所ノ管轄スル事件及ヒ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ專屬ニ係ル例外ノ場合(皇族ニ對スル民事訴訟)ノ二種ヲ除クノ外總テノ民事訴訟ヲ管轄スルモノトス又第二審トシテハ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴并ニ同裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告ヲ管轄スル控訴トハ更ニ事實ノ覆審ヲ請求スルモノニシテ民事訴訟法第三百九十六條以

下ノ規定ニ從フテ爲スモノヲ云ヒ抗告トハ或ル處分ノ訂正ヲ請求スルモノニテ本案ニ屬スル争ニ非ス乃チ民事訴訟法第四百五十五條以下ニ規定スル處ノモノヲ云フ

第二十七條 地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付

裁判權ヲ有ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限并ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル

抗告

本條ハ地方裁判所ノ刑事訴訟ニ於ケル裁判權ヲ定メタルモノナリ

地方裁判所ノ民事訴訟ニ於

ケル裁判權

權限ニ屬スル事件則チ第五十條第二項ニ規定スルモノヲ除キ其外總テノ刑事訴訟ニ付第一審ノ裁判權ヲ有シ又第二審トシテハ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴并ニ區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告ヲ裁判スルノ權アリ

第二十八條 地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ裁判權ヲ

有ス

破産事件ニ付テノ裁判權

破産ハ商事ニ屬スルヲ以テ商事裁判所ノ管轄スヘキモノナリト雖トモ吾邦未ダ商事裁判所ノ設置ナシ故ニ商事ナルニ拘ハラス破産事件ヲ地方裁判所ニテ管轄スト定メシモノナリ

然リ而シテ破産事件モ訴訟物ノ價額ノ多少ニ因テ或ハ區裁判所ノ管轄トナリ或ハ地方裁判所ノ管轄トナルヤヲ疑フモノアラシ是ヲ以テ特ニ本條ニ明記シ破産事件ハ訴訟物ノ價額ノ多少ヲ問ハス則チ一般ノ裁判權ヲ地方裁判所ノ有スルモノトセリ

第二十九條 地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決

裁判所權限法

非訟事件
ニ付テノ
裁判權

定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス
第二十六條及ヒ第二十七條ニ規定シタル抗告ハ訴訟事件ニ係ル區裁判所ノ決定及命令ニ對スルモノナリ而シテ本條ハ非訟事件即チ第十五條ニ列記シタル事件ニ係ル區裁判所ノ決定及命令ニ對スル抗告ナリ
地方裁判所ハ其抗告ヲ受理シ更ニ決定及命令ヲ與フルモノトス然レトモ此等ニ關スル規則ハ今日ニ於テハ未タ多カラザルガ如シ先ヅ例ヲ舉グレバ登記ノ事務ニ付テ區裁判所判事ノ爲シタル決定及ヒ命令ニ對スル抗告ハ本條ニ相當スルモノトス

第三十條 地方裁判所ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

權限、範圍、方法

地方裁判所ノ權限ハ第二十六條乃至第二十九條ニ規定セリト雖トモ是唯大體ヲ示スニ過キス其精細ナル節目ハ訴訟法及特別法ノ規定スル所ナリ例ハ地方裁判所ニ於テ登記事件ニ係ル抗告ヲ受理シタルトキハ登記官吏ヲシテ意見

書ヲ差出サシメ又ハ場合ニ依リ答辯ヲ爲サシムルコトアルヘシト雖トモ此等

ノ如キハ本法ニ規定スルモノニアラス則チ特別法ノ規定スル所ノモノトス

第三十一條 司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域内ノ

區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認

ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一

部分ヲ取扱フ爲一若ハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコ

トヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム

支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所

ノ判事ヲ用井ルコトヲ得此ノ場合ニ於テ判事ヲ撰用ス

ルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域内ノ

區裁判所判事ニ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關ル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

區裁判所ヲ設置セル箇所ハ多ケレトモ地方裁判所ノ設置ハ概ネ少キヲ以テ本條ハ之カ便宜ヲ謀ルニアリ夫レ區裁判所ノ權限ハ狹隘ニシテ地方裁判所ノ管轄スル事件廣キニ拘ハラズ其地方裁判所ノ設置少キタメ管轄區域内ノ區裁判所ヨリ其距離十里許遠キハ二十里或ハ三十里モアリテ區裁判所ノ裁判ニ對シ控訴ヲ爲サント欲スル場合ノ如キ又ハ區裁判所ノ管轄外ナル重輕罪ノ犯人護送ノ如キ甚タ不便アルコトヲ免レス尤モ今日ハ陸ニ鐵路アリ海ニ汽船アリ一瞬ニシテ到達シ得ル處ナキニ非ス而モ山間偏僻ノ地ニ至テハ未タ交通不便ニシテ或ハ徒歩ヲ以テ往復セサルヲ得サル處尙ホ多シトス然ラハ空シク時間ト費用ヲ糜ス等甚タ不便ヲ感セシ如此ナレハ人民ハ枉屈セラレタル權利モ止ムヲ得ス伸張スルヲ得サルノ不幸ヲ生スルコトアラン故ニ人民保護ノ効ヲシテ空シカラサラシメンカ爲メト官ノ便益ヲ慮カリ以テ裁判所ノ支部ヲ設置スルコトトセリ

本條ニ依レハ支部ノ取扱フ事件ハ地方裁判所ニ屬スル民刑事ノ一部ナレハ其事件ニ付テハ本部ト同一ノ權限ヲ有スルモノナラン是レ特ニ地方裁判所ヲ置クヘキノ必要アルモ猶ホ支部ヲ設ケテ充分ナル場合アレハ誠ニ經費ヲ省略スルノ利益アリ而シテ支部ハ臨時ノ裁判所ニアラスシテ常設ノ裁判所ナリトス

支部ノ事務ヲ審理スヘキ裁判官ハ特ニ司法大臣ノ任命スヘキモノトセリ而シテ判事ハ支部ヲ設ケタル區裁判所又ハ近隣ノ區裁判所ノ判事中ヨリ司法大臣之ヲ撰用スルノ便宜法ヲ設ケタリ

又支部ニ於テ刑事ノ一部ヲモ取扱フヲ以テ豫審判事、檢事ナカルヘカラス而シテ豫審判事、檢事モ司法大臣カ特ニ之ヲ命スルコトトセリ

殊ニ豫審判事ハ支部ヲ設ケタル區裁判所又ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ニ之ヲ命スルノミナラス地方裁判所ノ管轄區域内ニアル總テノ區裁判所ノ判事ヨリ撰任スルコトヲ司法大臣ニ許セリ

此ノ如ク支部ヲ設ケタルトキハ其判事ニ差支アルトキ之カ代理者ナカルヘカラス而シテ其代理ノ方法ハ特ニ規定スルノ必要ナキヲ以テ第二十五條ノ規定ヲ其儘適用スルモノトス

第三十二條 地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ
 審問スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於
 テ之ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス
 且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列
 席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ
 定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

審問裁判

地方裁判所ハ合議裁判所トシテ第一審ノ裁判ヲナス所ナルニ因リ數名ノ判事
 ニテ同一事件ヲ擔當ス即チ刑事ニテモ民事ニテモ凡ソ訴訟法ニ依リ法廷ニ於
 テ審問裁判ス可キ事件ハ判事三名ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ニ任ス其三名
 ハ定員ナルヲ以テ必ス法廷ニ列席セサル可カラズ故ニ若シ三名中一名ヲ欠ク
 トキハ必ス之カ填補ヲナスヲ要ス若シ然ラスシテ二名ニテ審問裁判ヲナシタ
 ルトキハ是レ判決裁判所ヲ構成セサルモノナルヲ以テ其裁判ハ無効トナラサ
 ルヲ得ス(刑訴第二百六十九條第一項)然レトモ又三名ノ外一人ヲ増シ四名ノ判
 事ニテ裁判ヲナスコトヲ得ス蓋シ法文ヲ見ルニ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル

云云トアリテ三人以上トノ文字ナク其意義緊嚴ニシテ毫モ増減ヲ許サ、ルノ
 ミナラス定員ヲ奇數トシタルハ決議ニ便ナラシムル立法ノ主旨ナレハナリ又
 其事ニ當ル判事三名ナル上ハ主トシテ審問及ヒ廷内取締ノ事ニ任スルモノ無
 カル可カラズ故ニ三名中一人ヲ裁判長トナシ豫メ煩雜ヲ來スヲ防カサル可カ
 ラス但陪席セル他ノ判事モ裁判長ニ告ケ審問スルヲ得ルハ勿論トス
 又各部ニ於テハ其判事ハ豫メ定メアリ其差支アルトキノ代理順序モ亦豫メ定
 ムル所ナリ(第二十二條第二項第三項)故ニ若シ三名ノ判事中差支アルトキハ豫
 定ノ方法ニ從ヒ之カ代理ヲナサシムルモノトス然ルニ場合ニ依リ常備判事中
 盡ク差支ヘアリテ通常代理ノ規程ニ依リ難キコト無シトセス此場合ニ於テハ
 己ムコトヲ得ス豫備判事ヲ以テ之ニ充テサル可カラズ而シテ豫備判事ナルモ
 ノハ第二編第一章中ニ規定スルカ如ク二回ノ競争試験ヲ經由シテ及第シタル
 試補ニシテ判事ニ任セラレタルモ闕位ナキカ爲メ未タ一定ノ補職無キモノヲ
 云フ故ニ常備判事ニ差支アルトキハ之カ代理スルニ足ルノ學識經驗ヲ備フル
 モ常備判事ニ比スレハ尙ホ未熟ナルモノナリ故ニ如何ナル事情アルモ豫備判

事二名以上ノ列席ヲ許サ、ルモノトス蓋シ是レ合議裁判法ノ本義ニ戻ルヲ以テナリ

右ノ如ク訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ニ付テハ判事三名ノ部ニ於テ之ニ任シ又其判事一名ヲ裁判長トナシ又其數名ノ判事差支アルトキハ豫備判事ヲ以テ之ニ充ツルヲ定メトス雖トモ前項以外ノ事件ニ付テハ此規定ニ依ラス訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フモノトス例ヘハ或ル事件ニ付一名ノ受命判事カ專ラ之ヲ擔當スルノ類ナリ

第三十三條 各地方裁判所ニ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事

正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

各地方裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニハ其事務取扱ヲ分配指揮シ且之ヲ監督スルノ權アル長官無カル可カラス蓋シ檢事ハ一體不分上下遞屬シテ彼此互ニ代理スルニ依ル而シテ各檢事局ハ又一團ヲナシ各其職務ヲ執ル既ニ一團ヲ

地方裁判所ノ檢事局

成ス其事務ヲ統括シテ一ニ歸シ以テ之カ整理ヲ計ルニハ其檢事中主トシテ之カ責ニ任スルモノ無カル可カラス是レ檢事正ナルモノヲ設ケタル所以ナリ然レモ諸般ノ事務固ヨリ檢事正ノ盡ク得テ指揮ス可キモノニ非ズ若シ然ラズシテ一々其指令ヲ待ツコトトセン乎敏捷俊速ヲ要スルノ事務遂ニ滯滞シテ舉ルコト無カラントス故ニ檢事正以下ノ檢事ハ何等ノ事件ニ拘ハラス特別ノ許可ナキモ當然檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有スルコトトセリ但檢事正以下ノ檢事ハ其上長官ニ對シテノミ責ヲ負フ可キモ外ニ向ツテハ檢事正ヲ代理スルモノナレバ其責任ハ檢事正獨リ之ニ任スルノミ

第四章 控訴院

凡ソ訴訟ハ民事タルト刑事タルトヲ問ハス二回審理ヲ以テ其局ヲ告ク而シテ地方裁判所ハ時トシテハ第二審ノ裁判ヲ爲スコトアレトモ本來第一審ヲ主眼トシ且ツ合議裁判所トシテハ必ス第一審ニ限ルモノトス控訴院ハ乃其名自ラ示スカ如ク地方裁判所ノ第一審ニ對スル控訴ノ裁判ヲ爲シ罕ニ第一審ヲ爲ス

控訴院

裁判所構成法

コトアレトモ合議裁判所トシテハ第二審ノ裁判ヲ爲スヲ以テ其本分トス本章ハ則チ其主トシテ第二審ノ裁判ヲ爲ス所ノ控訴院ノ構成及ヒ權限ヲ規定スルモノナリ

蓋シ二回審理ノ制度即チ覆審制ノ目的トスル所ハ第一裁判ノ誤謬ヲ補正シ不當ヲ矯正シ第二各地方ノ事情ニ拘泥スルノ弊害ヲ防遏スルニ在リ我邦ニ於テハ古代此覆審ノ制度行ハレタリシモ中古武門政權ヲ執ルニ及ンテ之ヲ廢シ爾來久シク行ハレサリシカ明治維新王政復古ト共ニ同五年再ヒ覆審制ヲ設クルニ至リシモノナルヲ以テ現時此制ニ關シ敢テ異論ヲ唱フル者アルヲ聞カス是レ畢竟古來ノ制度ニ復シタルト國民一般ニ其必要ヲ認メタルトニ職由セスンハアラス

然リト雖トモ歐洲ニ於テハ太古ヨリ覆審制ナルモノ有リシニアラス佛國ノ如キハ十三世紀ニ至リテ較ヤ之ニ類似セル所ノ制度ヲ設ケタリシモ其以前ニ在テハ毫モ徵スヘキモノアルヲ見ス而シテ佛國ニ於テ此制度ノ起リシハ是レ他ナシ往々裁判ニ誤謬アリ不當ノコトアリ甚タ不公平ニ失スルコトアリ爲メニ

控訴制ノ
利害得失

當事者ハ頗ル憤懣激昂シ竟ニ私ニ干戈ヲ弄シ戰亂ヲ醸スニ至リシヲ以テナリ抑モ當事者ノ控訴ヲ爲スヤ其意既ニ受ケタル裁判ヲ以テ不正ナリ不當ナリト明言表白スルニ外ナラス是故ニ創メテ覆審制ヲ設ケタル當時ニ在リテヤ控訴一ハ裁判官ニ對スル一種ノ侮辱ナリトノ迷想ヲ抱キ隨テ裁判官モ亦乃公ノ下シタル裁判ヲ頑守スルノ傾キアリテ畢竟控訴ハ裁判官ニ對シテ抗擊シ裁判官ハ乃チ之ヲ辯護スルカ如キ感情アリタリキ然ルニ其後人智ノ發達シ法理ノ進歩スルニ及ンテヤ控訴ハ此ノ如キ不敬ノ性質ヲ有セス隨テ裁判官カ被告ノ地位ニ立ツカ如キ感情ヲ脱シ現今控訴ノ途アルハ純ラ裁判官ヲシテ努メテ善良適正ナル裁判ヲ爲サシムル唯一ノ獎勵法ト爲ルニ至レリ

實ニ控訴ノ制度ハ善良ナリ我邦異論ナキ固ヨリ其所ナルノミ然リト雖トモ世ノ論者中或ハ非難ヲ試ムル者ナキニアラス否一時大ニ囂然タリシ蓋シ控訴制ヲ設クルト否トハ專ラ裁判所構成法ノ問題ニ屬スルヲ以テ請フ學理研究ノ爲メ聊カ其利害得失ヲ論究セントス

控訴制ヲ非難スル論者カ證據トスル所數個アリ左ニ先ツ之ヲ叙述セン

第一論據 寔ニ近世ノ人ハ殆ント一致シテ控訴制ヲ可トシ善良ナル裁判ヲ受クル一要件ナリト信スルニ至レリ然リト雖元ト此制ハ眞ニ必要アリテ起リタルモノナリヤ將タ徒ダ舊來ノ迷想ニシテ何等ノ理由モナク漫然之ヲ襲用セラルモノニ非サルヤ凡ソ社會ノ事物中實際甚タ必要ナキモ習慣ノ久シキ途ニハ之ヲ必要ト爲スニ至ルモノ往々尠カラズ控訴制ニ於ケルモ亦或ハ之ニ類スルモノニ非ザルカ今ヤ昔時ニ溯リテ考察スルニ決シテ此種ノ制度アリシニアラス唯一種ノ裁判所アリテ判決ヲ下シ直チニ執行セラレ而シテ毫モ不都合ナカリシニ非スヤ元來控訴制ヲ設クルハ乃チ第二審ノ裁判ヲ以テ第一審ノ裁判ヨリモ善良ナリト認ムルカ故ナラン然ルニ第二審ノ裁判ヲ以テ第一審ノ裁判ヨリモ善良ナリト認ムル所以ノモノハ抑何ツヤ是レ他ナシ第二審ノ裁判ハ其事伴ニ付キ審理スル所ノ人員多ク且ツ其人ハ皆智識經驗ニ富メリトスルニ在ラシ若シ果シテ然リトセハ何故ニ其善良ナリト認ムル所ノモノヲ移シテ之ヲ第一審ニ附與セサルカ即チ第一審ノ人員ヲ増加シ且ツ智識經驗ニ富メル者ヲ採用スヘシ爾レハ其裁判ハ必スヤ善良ナラン何ツ必スシモ特ニ控訴制ヲ設クル

ノ要アランヤ

第二論據 世人多ク稱ス二回審理ハ以テ裁判ヲ善良ナラシム可シト其ノ所謂裁判ノ善良ナリヤ否ヤハ抑モ何ニ據テ之ヲ知り得ヘキツ凡ソ人ノ智識能力ナルモノハ種々ノ作用ヲ爲シ各人互ニ相異ナルヲ以テ同一事實ニ付テモ其見ル所各同シカラス是故ニ孰レノ裁判カ果シテ適正ナリヤ否ヤ得テ判別スヘカラス然ラハ則チ裁判善良ナリトハ第一審及ヒ第二審共ニ容スヘキニ非ス然ルヲ彼レ第二審ノ裁判ニ限リテ善良ナリト揚言スルハ甚タ信シ難キ次第ナラスヤ既ニ第一審第二審ノ裁判孰レモ絶對的ニ善良ナリヤ否ヤヲ知ルヘカラサル以上ハ控訴制ヲ設クルノ理由此ニ至テ減シ了ラン

第三論據 控訴制ヲ國家ノ利益上ヨリ考察スルニ國家ニ於テハ人民カ訴訟ニ勝ツモ敗ルモ係争物ノ甲ニ屬スルモ將タ乙ニ屬スルモ敢テ公益ノ關スル所ニアラス故ニ控訴制ハ實ニ國家ニ利益ナキノミナラス等シク國家ヲ代表シテ裁判ヲ爲スモノニシテ彼此優劣ノ等差アラシムルカ如キハ是レ最モ奇怪千萬ナラスヤ若シ眞ニ國家ノ利益ヲ顧慮セハ一タヒ訴訟ノ起リタル所ハ其訴訟ヲ一シ

テ一日モ早ク落着セシメ人民カ空シク訴訟ノ爲メニ費ス所ノ思慮勞働時間財
 産ヲ轉シテ殖産事業ニ投セシムルニ若カサルヘシ其レ此ノ如クシハ國家ノ富
 ヲ増スコト果シテ幾何ツヤ然ルニ控訴ノ途ヲ開クニ於テハ訴訟ヲシテ徒ラニ
 永續セシメ國家ノ爲メニ甚々大害アリト謂フヘシ縦シヤ控訴ヲ許スト否トハ
 直接ニ國家ノ利害ニ及フコトナシトスルモ他ノ點ニ於テ大ニ憂慮スヘキモノ
 アルヲ奈何セン他ナシ控訴ヲ許ストキハ無數ノ人民常ニ相閱キ相争ヒ互ニ讐
 敵ノ思ヲ爲シ怨恨永ク結ンテ容易ニ解クヘカラサルニ至ルコト是ナリ國家豈
 ニ之ヲ等閑ニ附スヘケンヤ蓋シ國家ノ應サニ務ムヘキ所ノモノハ速カニ平和
 ヲ回復シ安寧ヲ維持スルニ在リ控訴制其レ廢セスシテ可ナランヤ
 第四論據 控訴制ハ由リテ以テ生スル所ノ弊害殊ニ太甚シキモノアリ何ツヤ
 裁判ノ効力ヲ薄弱ナラシメ隨テ裁判所其物ノ品位ヲ失墜スルコト即チ是ナリ
 實ニ控訴ハ人民カ裁判ノ効力ヲ抗撃スルニ外ナラス果シテ然ラハ其裁判既ニ
 威信ヲ失フモノト謂フヘシ今若シ第一審ノ裁判ニシテ真正ナラストスル以上
 ハ第二審ノ裁判ハ如何シテ之ヲ真正ナリトスルヲ得ンヤ其レ人智人力ノ微弱

ナルハ何人モ皆能ク之ヲ知ル其結果トシテ如何ナル裁判カ果シテ善良ナルヤ
 否ヤ得テ知ルヘカラス然ルニ法律ヲ以テ二回審理ノ制度ヲ立ツルトキハ乃チ
 自ラ裁判ノ不確ヲ表白シ愈ヨ裁判ノ威信ヲ失ハシムルモノニ非スシテ何ツヤ
 是故ニ控訴制ヲ設クルトキハ法律上總テ疑惑ヲ存シ隨テ法律ノ眼ヨリ之ヲ見
 ルモ又人民ノ眼ヨリ之ヲ見ルモ裁判ハ殆ント偶然ノ出來事ト爲ランノミ果シ
 テ此ノ如クシハ裁判ノ威信全ク地ニ墜チ其効力ノ強大ナランコトヲ望ムモ豈
 ニ得ベケンヤ若シ其レ之ニ反シテ試ミニ一種ノ裁判所ヲ置キ控訴ヲ許サスト
 センカ其裁判正確ヲ得一タヒ裁判ヲ經タル事件ハ法律上眞理ニシテ決シテ動
 スヘカラサルモノト爲リ隨テ何人モ裁判ノ効力ヲ争ハス之ニ服従スルニ至ラ
 ン控訴制ノ非ナル其レ斯ノ如シト

以下逐次之ヲ辯駁セン

反對論者カ第一論據トスル所ノ言中ニ曰ク「近世ノ人ハ幾ンド一致シテ控訴制
 ヲ可トセリ」ト爾レハ論者モ亦既ニ控訴制ノ必要ハ輿論ノ認ムル所タルコトヲ
 自認セルモノト謂フヘシ是レ實ニ輿論タリ人民ハ控訴制ヲ以テ自己ノ權利ヲ

保護スル無上ノ要具ナリト信セリ既ニ控訴制ノ必要ハ輿論ノ認ムル所ニシテ又實際良制タル以上ハ何ソ故ラニ之ヲ廢スルノ理アルヘケンヤ
 彼レ又曰ク第二審ノ裁判ハ其事件ヲ審理スル所ノ人員多ク且ツ皆智識經驗ニ富メリ寧ロ之ヲ第一審ノ裁判ニ移スモ可ナラスヤト是レ一應其理ナキニアラズ然リト雖トモ今ヤ實際上ヨリ觀察スルニ元來第一審ノ裁判所ハ第二審ノ裁判所ヨリモ其數多キヲ要シ隨テ智識經驗ニ富メル多數ノ人員ヲ悉ク之ニ配置スルカ如キハ是レ言フヘクシテ到底行フヘカラサル所ナルヲ奈何セン且ツ其レ第一審ノ裁判官ト雖トモ皆智識經驗ニ乏シキ者ト謂フヘカラス否訴訟事件ノ多數ハ之ヲ審理スルニ足ル充分ノ智識經驗ヲ備フルモノト謂フヘシ蓋シ訴訟ハ悉ク難件ニアラス錯雜繁難ナルモノハ實ニ稀有ニシテ多クハ簡單平易ノモノトス而シテ其難件ニ至テハ或ハ第一審ヲ經タル上尙ホ第二審ヲ要スルコトアリト雖トモ多數ナル簡易事件ニ付テハ第一審ノ裁判官之ヲ審理スルニ充分ノ能力アルヘク又實際悉ク其裁判ニ對シ控訴スルカ如キコトナク大抵第一審ノミヲ以テ止ムモノナリ果シテ此ノ如クハ簡易ナル事件ノ爲メニ智識經驗

ヲ充分ニ具備セル所ノ裁判官ヲ煩ハスコトナク又其裁判官ハ難件ノ爲メニ充分之ヲ審理考究スルノ餘暇アルニ至ラン彼レ論者ノ如キハ抑モ亦事理ノ輕重ヲ辨別セサル者ニ非スレテ何ソヤ
 又反對論者ハ第二ノ論據トシテ曰ク覆審制ハ裁判ヲシテ善良ナラシムト謂フト雖トモ其果シテ善良ナリヤ否ヤ到底之ヲ知ルノ標準ナキヲ奈何セント實ニ裁判ノ善良ナリヤ否ヤヲ知ルノ標準ナキヤ其言ノ如シ而モ之カ爲メニ人民ニ控訴ヲ禁スルノ理由ト爲スニ足ラサルナリ其故如何トナレハ何人モ比較的淺識拙劣ナル裁判官ノ審理ヨリモ比較的有識賢明ナル裁判官ノ判決ヲ受ケンコトヲ欲スルヤ是レ人情ノ常ナレハナリ裁判ノ當否ヲ確認スヘカラサルニモセヨ而シテ地方裁判所ノ判事ハ區裁判所ノ判事ヨリモ智識經驗ニ富ミ又控訴院ノ判事ハ地方裁判所ノ判事ヨリモ一層智識經驗ニ優ル所アリト概言スルヲ得ヘシ是レ裁判所ノ階級ニ因リ自ラ生スル所ノ結果ニアラスシテ實ニ任命補職ノ如何ニ在リテ生シ來ル所ノ結果ナリ即チ我構成法ニ於テモ控訴院以上ノ判事ハ數年間學術又ハ實務ニ從事シタルモノ、中ヨリ特ニ撰擢スルモノナリ(第

六十九條第七十條二十三年勅令第五百十八號第七條第二項故ニ控訴院判事ハ比較的下級裁判所判事ヨリハ優等ナラザル可カラズ若シ控訴院ノ判事中心一ニ劣等者アルモ是レ唯撰擢ヲ誤リタルノミ之ヲ以テ其全体ヲ傷クヘカラサルナリ去レハ其所謂優等ナリトスル所ノ判事ヲシテ覆審セシムルモノ是レ豈人民ニ満足セシムルモノニ非ザランヤ若シ又控訴院ノ判事ヲ以テ既ニ優等ナリト認ムル能ハスンハ大審院ノ判事モ亦之ヲ優等ナリト認ムル能ハサルヘシ果シテ此ノ如クンハ上告ヲモ亦之ヲ廢スヘシト謂ハサルヲ得サルニ至ラン然ルニ彼レ反對論者ト雖トモ一言モ此點ニ及フモノナシ其非難ノ理無キ以テ知ルヘキノミ豈ニ思ハサルヘケンヤ

又控訴ノ裁判ヲ以テ必ス善良ナリト認ムルニ付テハ固ヨリ確實ナル證據アルニアラス然リト雖トモ凡ソ裁判ノ真理ニ適スルヤ否ヤハ單ニ推測ニ止マリ絶對的真理ニ適ヘリト斷言スルコト能ハサルハ勿論ナリトス切言スレハ多少正確ニシテ恐ラクハ過誤ナカルヘシト信スルニ過キス而シテ其推測ノ標準タルヘキモノハ充分ニ辯論シ完全ニ審理シ其抗辯辯護ノ事ニ付テハ有力ナル代言

人之ニ當リ其判決ハ有識ナル裁判官之ヲ下ス是レ實ニ其裁判ハ善良ナリト見ルヘキ確實ナル證據タルニ非スヤ而シテ控訴裁判所ニ於テハ其裁判官既ニ第一審裁判官ヨリ學術經驗ニ富ミ其代言人モ亦充分ニ能力ヲ具備スルモノタルヤ明カナリ凡ソ事物ヲ精確ナリト云ヒ確實ナリト云ヒ又善良ナリト云フ如キハ即チ必ズ學問ノ果實ニ外ナラサルモノナリ而シテ本論ノ場合ニ於テ其裁判ノ善良ナリ精確ナリ確實ナリト云フ如キノ推測モ亦學問ノ効ニ因テ生出セザルハ莫シ然ラハ則チ反對論者カ裁判ノ善良タルヲ認ムヘキ標準ナシト云フテ覆審制ヲ非ナリト論結スルハ是レ學問ナルモノ、効力ヲ認メサル野蠻時代ニ唱フヘキ陋説ナリト謂ハサル可カラサルナリ

控訴制ヲ駁撃スル論者カ第三ノ證據トスル所ニ曰ク「國家ノ利益ヨリ考察スルニ控訴制ハ實ニ何等ノ利益ナキノミナラス却テ其利益トスル所ハ可及的訴訟ヲシテ永續セシメス即チ迅速ニ落着セシムルニ在リ」ト然リト雖トモ凡ソ正理ノ行ハル、ハ國家ノ務ムヘキ所ニシテ即チ可及丈ケ是非曲直ヲ裁決スルハ實ニ國家ノ必要的ニ屬ス今ソレ玆ニ一ノ物件ニ付キ甲乙相爭フニ當テ須ラク其

是非曲直ヲ裁決シ以テ之ヲ直者ニ附與シ直者ヲ保護スヘキハ是レ國家ノ應ニ務ムヘキ所ニアラスヤ如何トナレハ各人民ノ權利ヲ保護シ秩序ヲ維持スルハ國家ノ大權利ニシテ且ツ其大義務タルヲ以テナリ國家豈ニ無頓着タルヲ得ンヤ若シ然ラスシテ漫リニ訴訟ヲシテ迅速ニ落着セシムルヲ以テ目的トセンカ所謂盲目裁判ヲナセハ足レリ亂暴的裁判ヲナセハ可ナリ夫ノ中世行ハレタル裁判上ノ決闘ノ如キ或ハ可ナラン手熱湯ヲ探ラシムルカ如キ是亦可ナラン兩者立ロニ決シ得ヘケレハナリ其手段方法ノ如キ亦何ソ擇ハン噫

彼レ又曰ク「人民カ訴訟ノ爲メニ費ス所ノ思慮、勞働時間、財産ノ如キハ實ニ無益ニ屬ス」ト試ミニ思ヘ人民カ貴重ナル生命名譽若クハ資産ヲ保護センカ爲メニ之ヲ費ス是レ果シテ無益ナルヤ其生命其名譽若クハ其資産ヲ保護センカ爲メニ思慮、勞働時間、財産ヲ費スカ如キ固ヨリ當然タリ蓋シ反對論者ハ徒々健訟ノ弊ヲ恐ル、ニ坐スルノミ而モ之カ爲メニ良民ノ權利ヲ枉屈セシムヘカラサルナリ」

反對論者カ第四ノ證據トスル所ニ曰ク「控訴制ハ裁判ノ効力ヲ薄弱ナラシメ隨テ裁判所ノ品位ヲ失墜セシムト然リト雖トモ今ヤ仔細ニ觀察スルニ事實大ニ

然ラサルモノアリ若シ其レ第一審ノ判決第二審ニ於テ一々取消サルルカ如キコトアラハ或ハ之カ爲メニ裁判ノ効力ヲ薄弱ナラシメ裁判所ノ品位ヲ失墜スルコトアラシム而モ實際上第一審ノ判決ヲ取消サル、コトハ比較上甚々少數ナルノミナラス又稀ニ取消サル、コトアルモ決シテ憂フルニ足ラサルナリ否寧ロ時々取消サル、コトアルヲ以テ可ナリトス何トナレハ第一審ノ判決ニシテ往々取消サルトキハ裁判官心中多少惶ル、所アルカ故ニ深思熟察審理ヲ盡シ完全周到ナル判決ヲ下スニ至ルヲ以テナリ果シテ此ノ如クンハ愈ヨ取消サル、コト尠ク倍ス原裁判ヲ認可セラル、コト多キヲ累テ却テ下級裁判所ノ品位ヲ高ムヘシ復言スレハ世人カ見テ以テ劣等ナリトスル所ノ裁判官ノ意見ニシテ優等裁判官ノ同意ヲ得ルコト頻繁其度ヲ増サハ乃チ劣等判事モ亦容易ニ錯誤セサルコトヲ表明シ以テ世ニ信用ヲ博スルニ至ラン

右ノ如ク論シ去リ辯シ來ラハ反對論者ノ駁論モ此ニ至テ其價值無カラントス今ソレ二回審理ノ制度ヲ設ケサランカ若シ第一審ノ裁判ニ誤謬アリタルトキハ如何スヘキヤ之ヲ補正スルノ途ナクンハ當事者ノ迷惑モ亦實ニ太甚シト謂

フヘシ蓋シ裁判官モ亦人ナリ豈ニ不當ノ裁判ナキヲ保スヘケンヤ之ヲ矯正ヒ
 シニハ須ラク覆審制ヲ用ユルヲ要スヘシ且ツ其レ一回ヒ審理ヲ經タルトキハ
 原被告モ共ニ熟達シ事實モ亦大ニ明確ヲ得加之ナラス第二審ニ至リテ當事者
 ハ間々辯論ノ方針ヲ更ヘ又時ニ新タナル證據ヲ發見スルコトアリ而シテ裁判
 官ハ彼ヲ聞キ此ヲ見テ以テ審理考覈スルカ故ニ其裁判ノ善良タルヘキヤ必セ
 リ
 又地方裁判所ハ各地方ニ設置セラレ其數ヤ多ク隨テ其各地方ノ事情ニ拘泥シ
 爲メニ裁判區々ニ涉リ言フヘカラサルノ弊害ヲ生セン而シテ此弊害ヲ防遏セ
 シニハ亦須ラク控訴院ヲ設置シ以テ各地方裁判所ヲ統轄セシムルコトヲ要ス
 ヘシ彼ノ區裁判所ノ地方裁判所ニ於ケルモ亦此主旨ニ出テタルニ外ナラサ
 ルナリ

反對論者ノ一人タルフルジナン、ジャック氏曰ク「覆審制ヲ設クルトキハ第一審
 ノ裁判官其責任ヲ第二審ノ裁判官ニ讓ルノ弊アリ」ト之ヲ詳言スレハ凡ソ裁判
 官カ自己ノ判決ノミヲ以テ其事件ノ結了スルコトヲ知ラハ注意周到深慮研究

シ毫モ事實ヲ輕忽ニ附セス又決シテ他ノ事情ニ拘泥狐疑スルコトナク唯熱心
 ニ審理ヲ盡シ以テ善良適正ナル裁判ヲ下サン然ルニ今若シ覆審制ヲ設クルト
 キハ第二審ノ裁判官ト審理判決ヲ共ニスルノ心ヲ生シ自己ノ判決ニシテ若シ
 不當ナラハ原被告ノ中ヨリ必ス控訴スルナラント豫想シ期ス可カラサルコト
 ヲ期シテ事實ヲ等閑ニ附シ自ラ其責任ヲ推シテ第二審ノ裁判官ニ分擔セシム
 ルニ至リ乃チ第一審ノ裁判官ヲシテ無形的ノ責任ヲ薄弱ナラシムルノ弊アリ
 ト謂フニ在リ

此駁論タル彼ノ合議裁判制ヲ攻撃スルニハ實ニ究竟ノ材料タルヘキヤ必セリ
 然リト雖トモ之ヲ以テ覆審制ヲ駁撃スルニ至リテハ失當モ亦太甚シキモノト
 評セサルヲ得ス如何トナレハ自己ノ下シタル判決ニ付キ己レ其責ニ任セス
 ハ何人カ能ク其責ニ任スヘキヤ自己ハ所爲ハ責自己ニ在リトハ事理ノ自然ニ
 テ又誰レカ疑フモノアラシヤ且ツ其レ下級裁判官常ニ上級裁判官ノ爲メニ其
 裁判ヲ取消サレサランコトヲ是レ努メ深查熟察以テ判決スルモノナルカ故ニ控
 訴制アルカ爲メニ審理ヲ輕忽ナラシムト謂フカ如キハ實ニ事理ヲ辨セサル妄

反對者論又曰ク「上級裁判所ニ於テ概テ原裁判ヲ認可セラレ其取消サルルヲ甚
タ罕ナリトセハ或論者カ判事優劣ノ點ニ付キ述ヘタルカ如ク之カ爲メニ特ニ
覆審制ヲ設ケ以テ當事者ヲシテ徒ラニ訴訟ノ落着ヲ遲緩ナラシメ且ツ多額ノ
費用ヲ負擔セシムルカ如キハ乃チ利害相償ハサル次第ニ非スヤ」ト
然リト雖トモ其所謂當事者カ抗撃スル所ノ第一審ノ判決、上級裁判ニ於テ大抵
認可セララルハ是レ則チ覆審制ノ以テ善良ナル所以ヲ證明スルモノナラスヤ
實ニ是レ輓近法理發達、法學研究ノ賜モノナラスヤ第一審第二審ノ裁判相符合
スルハ蓋シ亦偶然ニ非サルナリ試ミニ今覆審制ヲ廢シ控訴ノ途ヲ壅塞センカ
敗訴者ノ苦情ヲ唱フルコト果シテ如何ソヤ即チ一回審理ニテ亦タ回復スルノ
途ナカラシカ何々ノ裁判ハ不當ナリ誰某ノ下シタル判決ハ不公平ナリ抔ト其
實至公至平能ク正理ニ適シ法理ニ合スル裁判ナルモ漫然之ヲ抗撃スル者到ル
處ニ横行スヘク而シテ世人ハ大概法理法律ヲ知ラザルカ故ニ先ツ聞ヒテ之ヲ
疑ヒ屢々聞クニ及ンテ遂ヒニ會參ノ母タルヲ免レサルモノ殆ント稀レナリ若

シ夫レ此ノ如クンハ即チ裁判所ノ品位信用ヲ失墜セサランコトヲ欲スルモ得
可カラザルヤ必セリ然ルニ二回審理ヲ經テ若シ同一ノ判決アリシトキノ如キ
其判決クル法律上ノ真理ト爲リ敗訴者モ亦大ニ懷ニ慰ムル所アリ殊ニ裁判モ
猶ホ他ノ真理發見ニ於ケルカ如ク充分ニ推察討究ヲナシ研究ノ上ニモ研究ヲ
盡クスニ非スンハ其當否得失未ダ容易ニ決ス可カラス故ニ一回審理ノミニテ
ハ其失敗セシ當事者ニ於テ不滿ノ念ヲ惹起スルヤ抑モ自然ノ人情ナリト謂フ
ヘシ是ヲ以テ原裁判ノ大概認可セララルルヲ理由トシ直チニ覆審制ヲ廢止セン
トスルハ妄斷モ亦太甚シカラスヤ

又斯ノ如ク大抵原裁判ヲ認可セラレ其取消サルコト倍ス渺キニ至ルハ是レ最
モ希望スヘキ所ニシテ竟ニ控訴ハ唯少シク疑點ノ存スル事件ニ付テノミ爲ス
コト猶ホ宛モ數ヲ除シ復タ乘シテ其商ノ確實ナルヤ否ヤヲ試ムルカ如クニ爲
リ了ランノミ是レ豈喜フヘキコトニ非スヤ果シテ然ラハ第一審ニ於テ敗訴シ
タル者カ自己ノ曲ナルコトヲ知リナカラ故ラニ控訴シ徒ラニ訴訟ヲ永續セシ
メ以テ萬一ノ僥倖ヲ冀フカ如キ弊風全ク其跡ヲ絶チ隨テ控訴ノ件數ヲ減シ爲

メニ裁判官ノ員數ヲモ減シ得ル等莫大ナル公利公益ヲ見ルニ至ルヘキナリ
以上余ハ控訴制ノ駁論ヲ悉ク反駁シ盡クセリ爾レハ今日二回審理ノ世ニ必要
ナルコト何人モ皆確認スル所ニシテ現ニ各國大概子此制ヲ行ヒツ、アリ又或
ル國ニ至リテハ三回審理ノ制度ヲ用井タレトモ是レ或ハ繁ニ過クルナキカ
以下各條項ニ付キ逐次講述セン

第三十四條 控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若クハ二以上ノ民事部及ヒ刑事部ヲ設ク
第三十五條 各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ
監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其
分配ヲ定ム

第二審ノ合議裁判所

控訴院ハ數個ノ地方裁判所ヲ統轄シ其地方裁判所ハ第一審ノ合議裁判所ニシ
テ控訴院ハ乃チ第二審ノ合議裁判所ナリ

控訴院モ猶ホ地方裁判所ニ於ケルカ如ク一若クハ二以上ノ民事部及ヒ刑事部
アリ明治二十三年勅令第五百十八號ノ定ムル所ニ依レハ控訴院ノ部長ヲ十五
人トセリ之ニ各控訴院長(院長ト爲ル)七人ヲ合セハ乃チ二十二部人ナルカ故ニ
全國ヲ通シテ二十二部アルヘキ理ナリ然ルニ現在部長ハ僅カニ十三人ノミ之
ニ各院長七人ヲ合セハ其數二十是レ今日全國控訴院ノ部數ト知ルヘシ即チ東
京控訴院ハ六部、大阪控訴院ハ五部、名古屋控訴院、廣島控訴院、長崎控訴院及ヒ仙
臺控訴院ハ各二部、函館控訴院ハ僅カニ一部ノミ
各控訴院ニ長官アリ控訴院長是ナリ控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ
且ツ其行政事務ヲ監督ス是レ猶ホ地方裁判所長カ其裁判所ニ於ケルカ如シ唯
廳名ト職名ノ異ナルノミ
又控訴院ノ各部ニ部長アリ部長カ其部ニ於ケル是レ亦猶ホ地方裁判所ノ部長
カ其部ニ於ケルカ如シ即チ部ノ事務ヲ監督シ且ツ其分配ヲ定ムルコト是ナリ
之ヲ要スルニ控訴院ハ院長、部長及ヒ普通ノ判事ヲ以テ構成ス而シテ院長、部長
モ是レ亦判事ニシテ唯判事ハ官名、院長、部長ハ職名タルノミ

第三十六條 事務ノ分配及ヒ結了並ニ判事ノ代理ニ付テ
ハ第二十二條第二十三條及ヒ第二十五條ヲ左ノ變更ヲ
以テ控訴院ニ適用ス

第一 前項ニ掲ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與
ヘタル權ハ控訴院長ニモ之ヲ與ヘタルモノトス

第二 控訴院ノ判事差支ノ爲メ或ル事件ヲ取扱フコ
トヲ得ス且同院ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキ者ナ
キ場合ニ於テ其事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ
代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其控訴
院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其裁判所ノ判事
ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得但豫備判事ヲ用
井ルコトヲ得ス

事務ノ分
配了
結了
判事ノ代
理

本條ニ左ノ變更ヲ以テ云々ト然レハ前章地方裁判所第二十二條第二十三條及
ヒ第二十五條ノ規則ヲ其儘控訴院ニ適用スルヲ得ス而シテ其異ナル所ハ本條

第一、第二ニ之ヲ規定セリ

第二十二條第一項ニ曰ク各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從
ヒ各部及ヒ各豫審判事ニ之ヲ分配スト此中各豫審判事ニ事務ヲ分配スルノ規
定ハ控訴院ニ之ヲ適用スルヲ得ス何トナレハ控訴院ニハ豫審判事ナルモノ之
ナケレハナリ同條第二項ニ曰ク各地方裁判所ノ各部長及ヒ部員ノ配置及ヒ所
長、部長、部員差支アルトキノ代理モ亦毎年以前以テ之ヲ定ムト此配置及ヒ代理ノ
規定ハ其儘控訴院ニ適用スルコトヲ得唯所長トアルヲ院長ト見ルヘキノミ同
條第三項ニ曰ク前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及ヒ部ノ上席判事一人
ノ會議ニ於テ裁判所長、會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會
長ノ決スル所ニ依ルト此規定モ亦控訴院ニ適用スルコトヲ得法律中此會議ニ
特別ナル名稱ヲ示サ、ルモ或ハ之ヲ判事會議トモ稱スヘシ外國法ニ於テハ明
カニ名稱ヲ附セリ(佛語之ヲフレンジヨムト云ヒ獨語之ヲフレンジユームト云
フ)又同條第四項ニ曰ク地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スベ
シト是レ亦控訴院ニ適用スルコトヲ得故ニ控訴院長ハ次年自ラ部長トナルヘ

キ部ヲ指定スルノ權アリ

第二十三條第一項ニ曰ク或ル部ニ於テ著手シタル事務ニシテ司法年度ノ終若クハ休暇ノ始ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコトヲ得ト此規定モ其儘控訴院ニ適用スルコトヲ得ヘシ但同條第二項ハ豫審判事ノ事ニ係ルカ故ニ本項ハ適用スルニ由ナキコト論ヲ待タサルモノトス

第二十五條ニ曰ク地方裁判所ノ判事差支ノ爲メ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキモノナキ場合ニ於テ其事件緊急ナリト認ムルハ裁判所長ハ其管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ニ其代理ヲ命スルコトヲ得ト然ルニ控訴院ニ於テモ亦此種ノ如キ場合ヲ生スト雖トモ其之ヲ代理スル判事ハ其資格地方裁判所ト同一ナラス隨テ此條ノ規定ハ之ヲ控訴院ニ適用スルコトヲ得サルカ故ニ第三十六條第二ニ於テ特別ナル規定ヲ設ケタリ即チ此場合ニ於テハ代理判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其裁判所ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコト

是ナリ又控訴院ニ於テハ豫備判事ヲ用井ルコトヲ得ス其故他ナシ豫備判事ハ既ニ二回ノ競争試験ヲ經テ判事ニ任セラレタル者ナリト雖トモ未タ經驗ニ乏シキ所アルカ故ニ縱シ代理ナリトハ云ヘ控訴院ニ於テ其職務ヲ行ハシムルハ不適當ナリト認メタルニ由ル

第三十七條 控訴院ハ左ノ事項ニ付キ裁判權ヲ有ス

第一 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ爲シタル

地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三 地方裁判所ノ決定及ヒ命令ニ對スル法律ニ定

メタル抗告

控訴院ノ
裁判權

本條以下第三十八條及ヒ第三十九條ノ三條ハ控訴院ノ權限ノ事ヲ規定セルモノニシテ本條ハ乃チ其普通ノ權限ノ事ヲ列舉セルモノトス

第一 控訴院ハ地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴ニ付キ之ヲ覆審スルノ權アリ

(裁判所構成法)

控訴院ニ於ケル上告審ノ可否

第二 控訴院ハ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付キ地方裁判所ノ下シタル判決ニ對スル上告ヲ受理審判ス此事ニ付テハ余聊カ卑見アリ請フ之ヲ述ヘン

蓋シ上告ノ要ハ一國內ニ法律完全周到ニ行ハレ各地方ニ因テ區々タル解釋區々タル適用ナカラシムルニアリ之ヲ換言スレハ上告ハ法律ノ統一處分ノ歸一ヲ以テ其目的トス爾レハコソ本法第四十八條ニ於テモ大審院カ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ下級裁判所ヲシテ必ス之ヲ遵奉セシムルノ規定アリ又大審院ノ判決例ハ殊ニ之ヲ重シシ輕忽ニ變改セサランカ爲メ第四十九條ニ於テ前判決ト相反スル意見アルトキハ其事件ノ性質ニ從ヒ或ハ民事ノ總部ニ於テ或ハ刑事ノ總部ニ於テ又或ハ民事及ヒ刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ裁判セシムル規定ノ如キ是レ舉テ法律ノ解釋ヲ鄭重ニシ其適用ノ統一其處分ノ歸一ヲ期スルニ非サルハナシ而シテ之ヲ掌ル須ラク全國最高等唯一ノ法衙ニ於テスヘク決シテ此任ヲ同等ナル數個ノ法衙ニ委ヌヘカラサルナリ然ラスンハ則チ上告ノ目的豈ニ達スルヲ得ンヤ然ルニ右ノ規定ニ依レハ全國内ニ七個アル控訴院ヲシテ大審院ト等シク法律解釋ノ統一ヲ掌ラシム是レ余ノ解スルニ苦ム所ナ

或ハ之ヲ辯護スル者アリ是レ唯立法者ハ便宜ヲ計リテ規定シタルノミト而シテ其說ク所ヲ聞ケハ乃チ曰ク各控訴院ヲシテ上告ヲ受理審判セシムルハ單ニ區裁判所ノ判決シタル事件ニ過キス然ルニ區裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ハ事体頗ル輕微ナリ之カ爲メニ堂々タル大審院ヲ煩ハスニ足ラス蓋シ大審院ハ利害ノ較ヤ大ナル事件ニ付キ審理裁判シ以テ全國ノ模範ト爲ス是レ大審院ノ大任アル所ニシテ決シテ輕微ナル事件ノ爲メニ大審院ヲ設置シタルニ非サルナリ今若シ理論ニ拘泥シ法律ノ點ハ一々大審院ニ上告セシメンカ大審院ノ繁忙果シテ如何ソヤ之カ爲メニ大審院ハ或ハ判事ノ員數ヲ増シ或ハ俸給經費ノ巨額ヲ要スルニ至ラン而モ己ムヲ得スンハ乃チ可ナリト雖トモ毫モ實益アルニ非ス何トナレハ控訴院ヲシテ上告ヲ受理審判セシムルモ大審院ノ判決ト一々反對ナル裁判ヲ爲スコトナク必スヤ大審院ノ判決ヲ標準トシ以テ裁判ヲ爲スヘケレハナリ然ラハ則チ法律統一ノ點ニ於テ毫モ欠クル所ナシ况ンヤ遠隔ノ地ニ在ル者ト雖モ上告ハ必ス東京ニ來ルヲ要ストセハ其費用ノ莫大ナル利害

相償ハサルヨリシテ己ムヲ得ス自家直ナリト信スルモ往々上告ヲ爲スヲ躊躇シ以テ其權利ヲ伸暢セサル者アルヲ又况ンヤ現ニ獨逸國ニ於テハ此制度ヲ行ヒツ、アルヲヤト

或ハ斯ノ如キ理由モ之アラン然リト雖トモ法律ノ適用ヲ統一スルノ要タル決シテ事件ノ大小輕重ニ關セス、重大ナルカ故ニ注意スルノ要アリ事輕少ナルカ故ニ注意スルノ要ナシト謂フカ如キ理アルヘカラス又其所謂事件ノ大小輕重ハ實ニ關係的ニ屬ス試ミニ想ヘ茲ニ價額僅カニ二三十圓ニ過キサル一事件アリ之ヲ富者ノ眼孔ヨリ見レハ事極メテ輕少ナレトモ貧者ニ取テハ實ニ富者ノ數千圓乃至數萬圓ニ當リ決シテ輕少ナリト謂フヘカラサルヲ其レ斯ノ如キ關係的ニ屬スル辭柄ヲ以テ本論ヲ是非スヘカラス蓋シ法律ハ公平ナルヲ要ス是ヲ以テ右ノ所論果シテ至當ナリヤ否ヤ余甚タ疑ヒナキ能ハサルナリ

論者曰ク「輕微ナル事件ニ至ルマテ悉ク大審院ニ上告セシメハ大審院頗ル繁忙ヲ致シ爲メニ判事ノ員數ヲ増シ經費ノ巨額ヲ要スヘク加之ス堂々タル大審院カ輕微ナル事件ヲ取扱フカ如キハ抑モ其之ヲ設置シタル本旨ニ非サルナリト

焉ンゾ知ラン裁判所ハ素ト人民相互間ノ訴訟ヲ受理審判センカ爲メニ設置スルモノナリ而シテ其訴訟ノ件數多ク判事ノ勉勵スルモ猶ホ且ツ延滞スルノ恐れアラハ須ラク判事ヲ増員スヘシ經費ヲ増額スヘシ是レ實ニ正當ノ費用ナリ政費節減ハ固ヨリ嘉ミスヘキ事ナレトモ正當ナル費用ニ至ルマテ之ヲ省畧スルカ如キハ抑モ亦節減ノ本旨ヲ愆ルモノト謂フヘシ况ンヤ各控訴院ヲシテ上告ヲ受理審判セシメハ大審院ハ乃チ閑ナレトモ之カ爲メニ控訴院ハ繁ヲ加ヘ隨テ判事ノ増員、經費ノ増額ヲ來スヘキヲヤ然ラハ即チ政費ノ點ニ付テハ彼此甚シキ差異アルヲ見サルナリ又大審院ハ元來輕微ナル事件ヲ擔任セストノ論點ニ至テハ毫モ取ルニ足ラス實ニ大審院ハ最高等ノ裁判所タリ其判事ハ最優等ノ法官タルヘシ而モ此故ヲ以テ一切輕微ナル事件ニ關與セスト謂フカ如キ理ハ萬萬之アルヘカラサルナリ

論者又曰ク「各控訴院ニ於テ上告ヲ受理審判スルモ彼レ必スヤ大審院ノ判決ニ從フヘキヲ以テ毫モ法律ノ統一ヲ害セス亦何ソ憂フル所之アラシヤト然リト雖トモ控訴院ノ判事カ大審院ノ意見ニ羈束セラル、ハ單ニ或ル事件ニ付テ然

ルノミ其他ノ事件ニ至テハ全ク不羈獨立自由ノ思想ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘシ彼レ時ニ或ハ大審院ノ判決ニ違由シテ裁判スルコト之アルヘシト雖トモ而モ若シ強固ナル反對ノ意見ヲ抱持シ乃公自ラ正當ナリ適實ナリト信セハ必スヤ自家ノ意見ニ隨テ裁判スルナルヘシ而シテ之カ當事者タルモノ大審院ノ意見ノ如キ裁判ヲ得ント欲スルモ業既ニ其途ナキヲ奈何セン况ンヤ大審院ノ判決ニ違由セントスルモ未タ其例ナキ事件アルヲヤ此種ノ事件ニ至テハ必ス自己ノ意見ニ隨テ裁判セサルヲ得ス爾レハ全國七個ノ控訴院各其處分ヲ異ニシ裁判區々ニ涉リ究竟之ヲ一定セント欲スルモ豈得ヘケンヤ事此ニ到レハ利害ノ大ナルモノハ大審院ニ於テ受理審判シ以テ下級裁判所ヲ羈束スルニ因リ其事件ニ付テハ乃チ處分一定スヘキモ利害ノ小ナル事件ニ至リテハ各控訴院法律ノ解釋ヲ異ニシ區々ノ判決ヲ下スナラン其レ斯ノ如キハ果シテ法律統一ノ趣旨ニ適スルヤ否智者ヲ待タスシテ知ルヘキノミ

論者尙ホ曰ク各控訴院ニテ上告ヲ受理審判スルトキハ遠隔ノ地方ニ在ル者ヲシテ其權利ヲ伸暢セシムルノ利益アリト此点タル瑣々、眼中ニ容レヌシテ可

ナリ况ンヤ控訴院ニ上告スルモ等シク費用ヲ要スルヲヤ其利益トスル所ハ唯路程ノ較ヤ近キニ在ルノミ

論者最終ニ一論據トシテ曰ク獨逸現行ノ制度亦然リト然レトモ獨逸ハ獨逸ナリ日本ハ日本ナリ彼我各其國情ヲ異ニス我邦必スシモ獨制ニ摸倣スヘカラス余ヤ私カニ疑フ本制ハ主トシテ獨逸法ヲ摸倣セシモノニ非サルナキヤト果シテ然ラハ是レ實ニ大ナル謬見ト謂ハサルヲ得ス

諸君モ知ラル、カ如ク獨逸帝國ハ數個ノ聯邦ヨリ成リ諸聯邦各其法律ヲ異ニセリ而シテ我控訴院ニ當ルモノハ即チ上等地方裁判所(獨語「ゾーベルランド」)ゲリヒト佛語「トリビユナール」レジョナール、シユベリウール)ニシテ聯邦中數個所アリ此上等地方裁判所ニ於テハ其管内ノ地方裁判所及ヒ區裁判所ノ判決ニ對スル上訴ヲ受理審判シ其所謂上訴中ニハ上告モ亦之アリ然レトモ是レ決シテ怪ムニ足ラス如何トナレハ其受理審判スル事件ハ獨逸帝國ノ法律ニ違背シタリト主張スルモノニアラス一聯邦ノ法律(即チ地方ノ法律)ニ違背シタリト主張スルモノヲ受理スルモノニシテ此種ノ事件ニ於ケル上告ハ其裁判所獨リ之ヲ

審判スヘキモノナレハナリ又縱シテ獨逸帝國ノ法律ニ違背シタリトノ點ニ付
 キ其上告ヲ受理審判スルモ民法未タ發布セラレス故ニ諸聯邦各習慣ヲ異ニシ
 隨テ其判決區々ニ涉ルモ固ヨリ事ニ害アルコトナシ殊ニ刑事ニ至テハ一聯邦
 内ニ在ル數個ノ上等地方裁判所中其一ヲ擇ミ專ラ之ヲ擔任ヒシメタリ故ニ其
 判決他ノ聯邦トハ或ハ異ニスルコトアルモ同邦中ニ在テハ決シテ然ルコトナ
 シ而シテ輕罪事件ニ付テハ我大審院ニ當ル所ノ帝國裁判所(ライヒスゲリヒト)
 ニ上告ス但獨逸帝國ノ法律ニ違背シタリト主張スルモノタルヲ要ス地方ノ法
 律ニ違背シタリト主張スルモノハ之ヲ許サ、ルナリ又重罪事件ニ付テハ共ニ
 帝國裁判所ニ上告スルコトヲ得ヘシ是レ事重大ナルヲ以テナリ蓋シ此等ハ皆
 法律統一ノ趣旨ニ基キタルモノニシテ彼レニ在テハ敢テ太甚シキ害アルコト
 ナシ然リト雖トモ之ヲ萬世統一ナル我邦ニ移植スルニ至リテハ余輩疑ヒナキ
 能ハス今ヤ現ニ此法ヲ實施シツ、アリ將來各控訴院法律ノ解釋ヲ異ニスルニ
 至ラハ宛モ全國七種ノ法律アルカ如キ奇觀ヲ呈セン悲ヒ哉

第三 控訴院ハ地方裁判所ノ決定及ヒ命令ニ對スル抗告ニ付キ裁判權ヲ有ス

此點ニ付テハ特ニ余ノ説明スルヲ要セス

第三十八條 皇族ニ對スル民事訴訟ニ付キ第一審及ヒ

第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴

訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス

皇族ニ對
 スル民事
 訴訟ニ付
 管轄ノ裁
 判

本條ノ規定ハ皇室典範第五十條ト相對スルモノナリ該條ニ曰ク「人民ヨリ皇族
 ニ對スル民事ノ訴訟ハ東京控訴院ニ於テ之ヲ裁判ス但シ皇族ハ代人ヲ以テ訴
 訟ニ當ラシメ自ラ訟廷ニ出ツルヲ要セス」ト彼ノ華族ハ皇室ニ於テ特別ニ待遇
 セラル、モ法律上之ヲ特待スヘキニ非サルヲ以テ普通人民ト一般ニテ事足ル
 ヘシト難トモ皇族ニ至リテハ則チ然ラス皇族ハ全ク一種特別ノ高貴ニ在セラ
 ル、ヲ以テ之ヲ待ツ宜ク優ナラサルヘカラス外國ニ於テモ苟モ君主國ニ在テ
 ハ舉テ皇族ヲ待遇セサルハ莫シ况ンヤ我邦ニ於テハ一層之ヲ優待スヘキヤ勿
 論タリ之ヲ要スルニ本條ハ皇室ノ爲メニ設ケタル一種特別ノ規定ナリト知ル
 ヘシ

皇室典範第三十五條ニ依レハ皇族ハ 天皇陛下ノ監督シ給フ所ナリ故ニ皇族

相互ノ民事ノ訴訟ハ勅旨ニ依リ宮内省ニ於テ特ニ裁判員ヲ命シテ裁判セシメ勅裁ヲ經テ之ヲ執行スルモノナリ(皇室典範第四十九條)而シテ右構成法第三十八條ハ人民ヨリ皇族ニ對スル場合ニシテ即チ皇室典範ノ規定ト並ヒ行ハル、モノトス然ラハ則チ皇族ヨリ人民ニ對スル民事訴訟ハ如何ト云フニ此場合ニ於テハ通常ノ裁判管轄ニ屬ス蓋シ人民カ皇族ヲ相手取ルカ如キハ事件頗ル重大ナリ須ラク鄭重ナル手續ヲ以テ審理判決シ且ツ忌憚スル所ナキヲ要スヘシ是レ此場合ニ限リ特ニ其裁判權ヲ控訴院ニ與ヘタル所以ナリ

又東京控訴院ノ專屬トセシハ畢竟東京ハ叢藪ノ下ニシテ皇族ノ多ク住居セラレ、カ故ナラン且ツ其レ東京控訴院ハ判事ノ員數最モ多キカ故ニ多數ノ判事ヲ要スルモ(第四十一條)實際差支ノ生スル恐レナキヲ以テナリ此種ノ規定ハ獨逸ニモ亦之アリ獨逸ニ於テハ伯林ノ上地方裁判所ノ管轄ト爲セリ

斯ノ如ク皇族ニ對スル民事訴訟ハ特別ニ取扱フモ其第一審ノ訴訟手續ニ至リテハ特ニ設クルノ必要アルコトナシ故ニ尙ホ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用スルコト、セリ唯其異ナル所ハ判事ノ員數五人タルノ差アルノミ

權限、範圍方法

第三十九條 控訴院ノ權限並ニ其裁判權ヲ行フノ範圍及ヒ方法ニシテ此法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

控訴院ノ權限並ニ其裁判權ヲ行フノ範圍及ヒ方法ノ如キハ本法ニ於テ之ヲ網羅シ盡スヲ得ス又網羅シ盡スヘキニ非ス或ハ民刑訴訟法ニ於テ或ハ特別法ニ於テ既ニ規定シ又將來規定スルコトアラシ畢竟本條ハ此旨ヲ示シタルノミ本條ノ規定ハ地方裁判所ニ付テ設ケタル第三十條ト其精神ヲ同フス故ニ亦贅セス一例ヲ示サハ衆議院議員ノ當選訴訟ハ特ニ控訴院ノ管轄トセルカ如キ即チ是ナリ

第四十條 控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其五人ノ判事申一人ヲ裁判長トス其他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

裁判所構成法

本條ハ控訴院ニ於テ其裁判權ヲ行フノ方法ヲ示シタルモノニシテ其精神第三十二條ト同一ナルヲ以テ亦詳述セス唯地方裁判所ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ控訴院ハ五人ノ判事ヲ以テスルノ差アルノミ其多數ナルハ畢竟控訴院ハ地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴ヲ審理スルモノナレハナリ又其奇數ナルハ決議ノ便宜ヲ得ンカ爲メナリ

第四十一條 第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ

判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ

特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判

ス其五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

本條ハ皇族ニ對スル民事訴訟ヲ裁判スル場合ニ於ケル部ノ組立方ヲ規定シタルモノナリ即チ此場合ニ於テハ特ニ第一審ハ五人、第二審ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判スルモノトス而シテ第二審ノ第一審ヨリ判事ノ員數多キハ是レ亦覆審ノ主義ヨリ來ル

本條ノ規定モ亦獨逸法ヲ採用シタルモノナリ獨逸伯林ノ上等地方裁判所ニ於

テハ特ニ皇族裁判所ナルモノヲ設ケ大小二局アリ(獨語大局ヲ「グローゼゼナー」ト「小局ヲ「クライネゼナー」ト云フ)小局ハ五人ノ判事ヲ以テ組織シ第一審ノ裁判ヲナシ大局ハ七人ノ判事ヲ以テ組織シ第二審ノ裁判ヲナス而シテ此二局ノ判事ハ毎年豫メ之ヲ定メ大局ハ毎ニ老練家ヲ以テ之ニ充ツルト聞ク我裁判所構成法ニ於テハ特ニ其判事ヲ豫定スルノ明文ナキモ既ニ控訴院ハ第三十六條ニ依リ毎年各判事ノ擔任事務ヲ定メサルヘカラス隨テ皇族ニ對スル民事訴訟ヲ裁判スヘキ判事モ亦前以テ之ヲ定ムルコト、ナルヘシ

第四十二條 各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長並ニ其他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ

適用ス

本條ハ第三十三條ト其精神全ク同一ナリ唯檢事ノ地位、地方裁判所以下ニ附置セラレタルモノトハ一層高ク又檢事長ノ稱ハ檢事正ト區別センカ爲メノミ

第五章 大審院

大審院ハ最高裁判所ナリ蓋シ大審院ヲ設置シタル所以ノモノハ全國法律ノ統一ヲ司ルニ在リ爾レハ大審院ハ最高等ニシテ且ツ唯一タラサルヘカラス若シ其レ然ラズンハ決シテ法律統一ノ目的ヲ達スルコト能ハサルナリ

第四十三條 大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若クハ二以上ノ民事部及ヒ刑事部ヲ設ク

第四十四條 大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務

ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ

其分配ヲ定ム

第四十五條 大審院ノ事務ノ分配並ニ代理ノ順序ハ每

年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席セントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲メ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得

ス且同院ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其所在地ノ控訴院長ニ通知シ其控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

右三條ハ余ノ上來講述シタル所ニ依リ一讀以テ明了ナルハシ故ニ又辯セス唯第四十五條第三項大審院ノ判事ニ差支アルトキ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルハ其精神控訴院ニ付テ述ヘタル所第三十六條第二ト同一ナルモ是レ地方裁判所ノ判事ヲシテ大審院判事ノ代理ヲ爲サシメサルニ在リ

第四十六條 大審院長ハ何時ニテモ部長若クハ部員ノ

承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

本條ノ規定ハ控訴院以下ノ裁判所ニ付テハ絶テ無キ所ノモノナリ即チ控訴院以下ノ裁判所ニ於テハ一タヒ事務ノ分配及ヒ判事ノ配置ヲ定メタルトキハ亦漫リニ之ヲ變更セス(第二十四條然ルニ大審院ニ在テハ即チ然ラス大審院長ハ

何時ニテモ部長若クハ部員ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得ヘシ其故何ソヤ他
ナシ畢竟控訴院以下ノ裁判所ニ付テハ單ニ事務ノ必要上ヨリ生スルモノナレ
トモ大審院ハ最高等ノ裁判所ナリ其判決ハ全國裁判ノ模範トナルモノナリ故
ニ須ラク部長若クハ部員其人ヲ擇ハサヘカラス是レ大審院長ニ特ニ此職權
ヲ與ヘタル所以ナリ但シ判事ハ獨立ナリ故ニ必ス其承諾ヲ得サルヘカラサル
ヤ勿論タリ

第四十七條 大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立

ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二
十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適
用ス

本條ノ規定ハ地方裁判所及ヒ控訴院ト同一ノモノナリ

第四十八條 大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點

ニ付テ表シタル意見ハ其訴訟一切ノ事ニ付キ下級裁

大審院ノ
判決ノ効力

判所ヲ羈束ス

本條ノ規定ハ實ニ緊要欠クヘカラサルモノナリ若シ此規定ナクンハ大審院ア
ルモ決シテ全國ノ裁判權ヲ統一シ法律ノ解釋ヲ歸一ニスル能ハサルナリ其レ
法律ノ文辭ハ異様ノ意義ヲ含ミ隨テ之ヲ解釋スルコト甚々困難ニシテ人毎ニ
自ラ多少意見ヲ異ニスルコトアリ勿論立憲政治ノ下ニ在テハ立法議會ノ議論
政府ノ説明書等多少參考ニ資スヘキモノナキニ非スト雖トモ此等ハ以テ司法
權ヲ羈束スルノ効力アルヲ得ス然ラハ則チ他ニ其効力アルモノナカルヘカラ
ス是レ唯一ニ大審院ノ判決アルノミ大審院カ表シタル意見ハ下級裁判所必ス
之ヲ遵守セサルヘカラス若シ之ヲ遵守セサレハ即チ以テ違法ノ裁判ナリト謂
フヘシ

大審院ノ判決ノ効力ツレズノ如ク強且ツ大ナリ然レトモ是レ亦決シテ無限ノ
モノニ非ス即チ大審院ノ判決ニシテ羈束力ヲ有センニハ左ノ三條件ノ具備ス
ルコトヲ要ス

第一條件 其訴訟事件ヲ受理シタル下級裁判所ニ限ル他ノ裁判所ハ之ヲ模範

裁判所構成法

トスルハ格別敢テ遵守スルノ義務アルコトナシ

第二條件 法律ノ點ニ付テ表シタル意見ニ限ル事實ノ點ニ至テハ其事件ヲ受理シタル下級裁判所認定ノ全權ヲ有スルニ因リ前判決ヲ變更スルモ妨ケナシ

第三條件 大審院ノ判決ニ從フヘキハ唯其判決アリシ事件ニ付テ然ルノミ故ニ下級裁判所ニ於テ他日之ト類似ノ事件ヲ受理スルモ復タ大審院ノ意見ニ從フヲ要セス然ラスンハ裁判權ノ獨立全ク滅シ了ラン

之ヲ要スルニ大審院ノ判決ノ効力ハ實ニ強大ナリ是レ立法權ト司法權ト相對立シ相侵害セサル所以ナリ若シ其レ然ラスンハ司法權ノ獨立全ク地ニ墜チ去ランノミ從前ハ大審院ノ判決毫モ羈束力ヲ有セス又實際之ヲ有スルコト能ハサリキ他ナシ屢其判決ヲ變更セシヲ以テナリ隨テ下級裁判所ハ之ニ從ハス各自其意見ニ任シテ判決ヲ下セシカ故ニ同一事件ニシテ爲メニ二三年ノ星霜ヲ徒費セシモノ尠カラズ今ヤ本條ノ規定アリ以テ此等ノ弊害ヲ一掃シ去ルヲ得ンカ

總部聯合

第四十九條 大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付キ曾テ一若クハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若クハ刑事ノ總部又ハ民事及ヒ刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及ヒ裁判スルコトヲ命ス

大審院ノ判決ノ効力重大ナルコト前段既ニ述ヘタル所ノ如シ是ヲ以テ一事件ニ付キ其判決ヲ下スニ當リテヤ須ラク用意周到ナルヘク決シテ輕忽ニ裁判ヲ爲スヘカラサルナリ今若シ裁判毎ニ其判決前後反對シ彼此矛盾スルカ如キコアラシカ裁判所ノ威嚴全ク失墜シ司法權ノ信用亦何ヲ以テ維保スルコトヲ得ンヤ殊ニ大審院ノ判決ハ全國ノ裁判所悉ク之ヲ遵守スルニ及ハサレトモ實際上自ラ之ヲ摸範ト爲スノ傾向アリ是レ他ナシ大審院ノ意見ト異ナル判決ハ究竟破毀セラルハノ恐レアレハナリ爾レハ大審院ノ判決ハ殆ント第二ノ法律ニ等シ

キ効力ヲ有スト謂フモ敢テ過言ニ非サルヲ知ラン然リト雖モ人ハ神明ニ非ス大審院ノ判事ハ智識經驗兩ヲ備フト云フト雖モ元是レ人ナリ奚ソ過愆ナキヲ保スヘケンヤ時ニ或ハ前ニ下シタル判決ト全ク相反スル意見ヲ抱キ而モ其意見ニシテ前ノ判決ヨリハ一層優ルヤモ亦未タ知ルヘカラス故ニ此場合ニ於テハ十分ニ研究討論シ以テ之ヲ裁判ヲ下サ、ルヘカラス是ニ於テカ始メテ大審院ノ判決ニ價值アリト謂フヘシ若シソレ然ラス意見ノ變スルニ隨ヒ容易ニ前ノ判決ト相反スル裁判ヲ爲サンカ亦何等ノ價值ヲモ有ヒサルニ至ルヘキナリ是故ニ斯ノ如キ場合ニ於テハ先ツ該部ヨリ大審院長ニ報告シ其事件民事ナルトキハ民事ノ總部聯合シテ之ヲ審問裁判シ若シ刑事ナルトキハ民事及ヒ刑事ノ總部聯合シテ之ヲ審問裁判ス若シ又民刑交渉ノ事件ナルトキハ民事及ヒ刑事ノ總部聯合シテ一ノ法廷ヲ開キ數多ノ判事合議ヲ以テ之ヲ審問裁判スルモノトス會テ既ニ此實例アリシナリ

又屢々總部聯合シテ以テ前ノ判決ヲ變スルカ如キコトアラハ却テ其威信ヲ失墜スルコトアラシク豈慎マサルヘケンヤ

第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 終審トシテ

(イ) 第三十七條第一ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

(ロ) 控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル控告

第二 第一審ニシテ終審トシテ

刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノ、豫審及裁判

本條ハ大審院ノ裁判權ヲ規定スルモノニシテ即チ其管轄スヘキ事項ヲ舉示ス

大審院ノ裁判權

裁判所構成法

本條第一號ニ記載スル事項ニ付テハ別ニ講スヘキ點ナシ其第二號ニ記載スル事項ハ到底下級裁判所ヲシテ其裁判ヲ爲サシムルコト能ハス即チ此等ノ事件ハ最モ優等ナル判事ニ委ネサルヘカラス殊ニ國事犯罪ノ如キハ往々政黨ノ關係アルヲ以テ一地方ノ裁判所ヲシテ之カ裁判ヲ爲サシムルトキハ或ハ公平ヲ失スルナキヤノ嫌アリ加之ス皇族ノ犯罪ノ如キハ被告人ノ身分地位高貴ナルカ爲メニ或ハ自己ノ本心ヲ任テ之カ裁判ヲ爲スコトナキヲ保セス是レ此等ノ事件ニ限り特ニ大審院ノ管轄ニ屬セシメタル所以ナリ

諸君モ知ラル、如ク從前ハ高等法院ナルニ種ノ裁判所ヲ設ケ以テ右等ノ事件ヲ裁判セシメタリ然レトモ高等法院ノ制ハ往々弊害アリ固ヨリ其裁判官ハ事毎ニ任命セス毎年豫メ上裁ヲ以テ之ヲ任命セララル、モノナルモ其裁判官中ニ行政官ヲ加フルヨリシテ或ハ奇怪ナル裁判ヲ爲スコトナキヲ保セス且ツツレ國事犯ト雖モ是レ亦一ノ犯罪ナリ之カ爲メニ別種ノ裁判所ヲ設ケヘキノ理ナク其之ヲ設クルハ即チ司法權ヲ分立スルニ外ナラス是レ此構成法ヲ以テ從前ノ制度ヲ廢シ最高等ナル大審院ノ管轄ト爲シタル所以ナランカ

出張裁判

第五十一條 前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要

ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ爲ス爲メ控訴院若クハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

本條ハ既ニ彼ノ有名ナル大津事件ニ付テ適用セラレタリ大審院ノ法廷ヲ控訴院又ハ地方裁判所ニ開クハ是レ唯便宜ノ爲メノミ而シテ大審院ノ判事カ全國ニ出張スルカ如キハ亦大ニ事務ノ差支ヲ生スルカ故ニ控訴院ノ判事ヲ以テ部員ト爲スコトヲ許セリ然レトモ若シ其員數多キトキハ裁判ノ威信ヲ損スルノ恐アリ故ニ必ス半數以下タルヲ要スト規定シタリ

第五十二條 大審院ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍

及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

本條ノ規定ハ第三十九條ト同一ナルヲ以テ復々贅セス

第五十三條 大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問
裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於
テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス
其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱
フ

大審院ニ於テハ七人ノ判事ヲ以テ裁判ス可キ旨ヲ定ム

第五十四條 第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部

ノ判事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若クハ刑事ノ總部聯合ス
ルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判
事 中官等最モ高キ者ヲ部長ト爲ス大審院長ハ至當ナリ
ト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

故ニ例ヘハ民事部又ハ刑事部ノ一部聯合スルトキハ少クトモ十人ノ判事列席
スルニ非サレハ裁判ヲ爲スコト能ハサルナリ

第五十五條 大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第

一審ニシテ終審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判
事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫
審ヲ爲サシムルコトヲ得

本條ハ大審院ニ於テ豫審判事ヲ命スル方法ヲ規定セルモノニシテ場合ニ依リ
或ハ控訴院判事或ハ地方裁判所判事ニ命スル等一ニ便宜ニ依ルモノトス

第五十六條 大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク

檢事總長並ニ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適
用ス

本條ノ規定ハ第四十二條ニ同シ故ニ復タ贅セス
以上述フル所ヲ以テ第一編ヲ講了セリ

本校講師
法學士

兩角彦六先生口述

本校校友筆記

裁判所及
檢事局ノ
官吏

第二編 裁判所及檢事局ノ官吏

構成法ハ其第一編ニ於テ裁判所及檢事局ノ組織并ニ其權限ヲ規定シ次テ本編ニ至リ之ヲ組織スル職員ノ就任資格服務定規ヲ定メ通計六章ヨリ成ル裁判所及ヒ檢事局ノ職員トハ即チ判事檢事裁判所書記執達吏廷丁トス第一章ハ判事檢事ニ共通ノ法則ニシテ以下各職員毎ニ一章ノ規定ヲ下セリ

尤モ彼ノ執達吏ヲ以テ本編官吏ナル表題中ニ網羅セシハ或ハ立法問題トシテ其性質ヲ誤ルモノニアラサルカ換言スレハ執達吏ハ公吏ト稱シ得ヘキモ官吏トスルハ或ハ其堂ヲ得サルモノニアラサルカハ第五章ノ條下ニ於テ説明スヘシ

第一章 判事檢事ニ任セラル、ニ必要ナル

裁判所構成法

百八十五

準備及資格

判事檢事
ニ任セラ
ルニ必
要ナル準
備及資格

準備ト云ヒ資格ト云フ異字同義ヲ表明スルノ嫌ナキニ非ザルモ強テ之ヲ區別
 センカ準備トハ其資格ヲ得ル以前ニ屬スル事柄ニシテ資格ハ準備ヲ盡シテ初
 メテ生スルモノナリト云フコトヲ得可シ

判事檢事ニ任セラル、ニハ第一回ニ於テ學術競爭試験ニ及第シ第二回ニ實務
 試験ニ合格シタルモノナラサルヘカラス判事檢事タルニ斯ル周密ナル試問ヲ
 要スルハ判事檢事ハ主トシテ法律適用ノ重任ニ當ルモノニシテ若シ其適用ヲ
 過テハ法ハ法ノ効ナク人權ヲ保護スル裁判ハ却テ人權傷害ノ毒物タルニ至ル
 ヘシ故ニ學識ニ實務ニ十分ノ經驗ヲ積ミタルコトヲ公認セラレタル者ニアラ
 サレハ未タ以テ法律適用ノ任ニ當ラシムルニ足ラス深遠高妙ノ學識モ實務ヲ
 知ラサル者ニアリテハ之ヲ適用スルニ地ナカル可キハ最モ親易キノ道理ナリ
 トス(第五十七條)但シ三年以上帝國大學法科教授若クハ辯護士ノ職務ニ從事シ
 タル者ニ在テハ試験ヲ要セス直ニ判事檢事ニ任補スルコトヲ得第六十五條第
 一項此規定タル實ニ例外トス否ナ寧ロ恩惠ナリ大學ノ教授カ學識ニ於テ其資

第一回試驗

格アリト認ムルコトヲ得ルハ可ナリトスルモ三年以上教授ノ職ニ在リシ者果
 シテ裁判ノ實務ニ何程ノ練習經驗ヲ與フルカ學生ニ學識ヲ授ケツ、而シテ裁
 判ノ實務ヲ自ラ習得シタルモノトスルハ解スルニ苦ム所ナリ

(甲) 第一回試驗

此試験ハ判事檢事タルニ必要ナル學識ヲ有スルヤ否ヲ試問スルモノニシテ其
 規則ハ明治二十四年司法省令第三號ヲ以テ定メラル該規則ニ依レハ第一回競爭
 試験ニ應セント欲スル者ハ先ツ一定ノ資格ヲ具備スルコトヲ要ス其資格ニ二
 種アリ積極及消極是レナリ(同則第五條及ヒ本法第六十六條參照)積極資格トハ

- 第一 帝國ノ男子ニシテ成年以上ノ者
- 第二 判事檢事ト爲ルニ要スル學業修習證書ヲ有スル事

- 本項ハ左ノ三種ノ内其一種ノ卒業證書ヲ有スルヲ以テ足ル
- (イ) 第一若クハ第三高等中學校ニ於テ法學科ヲ卒業シタル者
- (ロ) 文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業

證書ヲ有スル者

裁判所構成法

(は) 外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者以上二箇ノ資格ハ積極ノモノニシテ之ヲ完備セサレハ試驗ニ應スル事ヲ得ス又消極的ノ資格ハ本法第六十六條ニ掲ケル所ニシテ

第一 重罪ヲ犯シタル者ニアラサルコト 但シ國事犯者ニシテ復權ヲ得タル者ハ此限ニアラス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯サハル事

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者ニアラサルコト

以上二種ノ資格ニ該當スル者ハ茲ニ初メテ判檢事登用試驗ノ受験者タル資格ヲ有スルモノニシテ而シテ第一回ノ學術競爭試驗ニ及第シタル者ハ第二回試驗ヲ受クルノ前試補トシテ三ヶ年間裁判所及檢事局ニ於テ實地練習ヲ爲ス事ヲ要ス(第五十八條)

然レトモ帝國大學法科卒業生ハ法律學專攻ノ公認ヲ經判事檢事タルニ要スル學職ニ欠クル所ナケレハ之ヲ試補ニ任用スルニ當リ學術競爭試驗ヲ爲スノ必要ナキカ故ニ直ニ探テ試補ト爲ス事ヲ得ヘシ然レトモ其實地運用ノ點ニ關

シテハ未タ練習ノ實跡ナキモノナレハ事ニ當テ誤リナキヲ保セス故ニ尙試驗及第者ト同シク三ヶ年間事務練習ヲ要セリ(第六十五條第二項)

試補ノ職分

試補ノ職分

試補ハ實務練習ノ爲メニ勤務スルモノナレハ裁判ニ干預シ若クハ檢察事務ニ當ル事ヲ得サルヲ以テ本則トス然レトモ試補トシテ一ヶ年以上修習シタル者ハ多少實務ニ付テ辯護スル所アルヲ以テ之ニ司法事務ノ助行ヲ命スルモ敢テ不可ナルナシ此故ニ現ニ其修習ヲ監督スル判事ニ於テ司法事務ノ助行ヲ爲サシメ差支ナシト思料シ之ニ司法事務ノ助行ヲ命スルトキハ試補ハ其裁判所ニ於テ司法事務ヲ取扱フコトヲ得ヘク又豫審判事若クハ受命判事ノ職務ヲモ助行スルヲ得(第六十條)然レトモ試補ハ如何ナル場合ニ於テモ取扱フコトヲ得サル事務アリ是レ本法第六十一條ニ列舉スル所ニシテ

第一 訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二 證據ノ取調但シ豫審判事若クハ受命判事ノ附屬トシテ之ヲ取調ヲ爲ストキハ此限ニアラス

第三 登記ヲ爲ス事

以上三種ノ事務ハ凡テ人民ノ權利ニ重大ノ關係ヲ有スルモノナレハ若シ之ニ
錯誤アラシカ當事者ノ權利ノ伸暢ニ影響ヲ及ボス尠少テラサルヲ以テ未タ充
分實務ニ練達セサル試補ニ之ヲ取扱ハシムルハ敢テ是等ノ危險ナシトセサル
ヲ以テ法律ハ一般ニ之ヲ禁セリ

又試補ハ合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若クハ監督判事ニ於テ裁判所書記
ノ取扱フヘキ事務ノ臨時取扱ヲ命セラル、事アリ此場合ニ於テ試補ハ書記ノ
職ヲ以テ主トスル者ニアラサルカ故其署名ヲ要スル場合ニ際ヒハ特別ノ許可
ヲ受ケサルヘカラス(第九十二條)或ハ試補ハ判檢事ノ候補者ニシテ其實習スル
所唯判檢事ノ職務上必要ノ事務ノミ然ルニ其配下ニ屬スヘキ書記ノ職務ヲ臨
時ト雖モ之ニ取扱ヲ命スルハ事理ノ本末ヲ失フモノナリト云フカ如キハ要
スルニ服務者不満ノ余言ニ過キス試補ハ實務ノ見習中ニ在ル者ニシテ判檢事
ニアラス而シテ他日判事又ハ檢事ニ任補セラレタル日ニ於テ書記ノ事務ニ通
センカ裁判事務抄運ニ手數ト時日ヲ省キ裁判速行ノ便益アリトス而シテ此規

定ハ將來試補ノ増加スル場合ニ於テハ當ニ臨時ノミナラス其修習期限中其一
部ハ書記ノ職務ヲモ取扱ハサルヲ得サルニ至ラン是レ既ニ獨乙ニ於テ實例ノ
徵スヘキモノアリ

試補ノ罷免

試補ハ未タ法官タルノ資格ヲ得サルモノニシテ上官ノ指揮監督ニ從ヒ實務ヲ
練習シ第二回實務ノ試問ニ登第スルノ準備中ニ在ルモノナレハ司法大臣ハ試
補タル者ヲ鞭撻シテ精勵ヒシメ法官ノ良雛ヲ養成セサルヘカラス之ヲ遂行セ
シムルニハ又後進戒慎ノ爲メニ罷免スルノ必要アリ故ニ其試補タル者職務上
若クハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニ
シテ第二回試験ニ及第ノ見込ナキトキハ直接ノ指揮者即チ現ニ監督スル上官ハ
控訴院長、檢事長ヲ經由シ司法大臣ニ之ヲ報告セサルヘカラス司法大臣此報告
ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ(判事檢事登用規則第二十二條)
又司法大臣ハ試補カ第二回試験ニ及第セサルコト若クハ第二回試験ノ成立セ
サルコトヲ該試験委員長ヨリ報告アリタルトキハ亦試補ヲ免スルコトヲ得然

裁判所構成法

試補ノ罷免

レトモ此後ノ場合ニ於テハ試補カ己ムヲ得サルノ事故アリシコトヲ證明シ試験委員長之ヲ正當ト認メ其旨ヲ司法大臣ニ報告シタルトキハ司法大臣ハ其試補ニ一回限り次期ノ試験迄引續キ修習ヲ爲サシムルコトアルヘシ(同則第三十一條同第十一條及同第十三條乃至第十五條)

第二回試

(乙) 第二回試験

此試験ハ實務ノ練習成績ニ付キ試問スルモノニシテ第一回學術競争試験ニ及第シ試補トシテ三年間實務ヲ修習シタル者及ヒ帝國大學法科卒業生ニシテ試補トシテ實務修習ヲ爲シタル者ノミニ行フ此試験ノ場所及期日ハ司法大臣及ヒ試験委員長ノ定ムル所ナリ(判事檢事登用試験規則第二十三條以下)此二回ノ試験ニ及第シタル試補ハ判事又ハ檢事ニ任用セラレ、事ヲ得本法第六十二條然レトモ常備判事又ハ常備ノ檢事ニハ人員ノ制限(明治二十四年七月勅令第百三十四號)アルヲ以テ新ニ任セラレタル判事若クハ檢事ヲ直ニ常備トスルヲ得ス區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ是等ノ裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ欠位アルヲ待テ初メテ常備判事又ハ檢事ニ任補セラレ、コトヲ得左レハ常備ノ判事

檢事ニ欠位ナキ間司法大臣ハ之ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務ヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所若クハ地方裁判所及ヒ此等ノ裁判所ノ檢事局ニ使用スルモノトス(第六十三條)然レトモ新任ノ判事ハ如何ナル場合ト雖モ控訴院以上ノ裁判所ノ判事ニ任補セラレ、コト能ハス是レ本編第二章第三章ニ規定スル所ニシテ是等ノ裁判所ハ上審級ニ位スルヲ以テ之カ判事檢事タル者ハ尙一層事務ニ練習シシル者ヲ要スル旨趣ニ基ク

豫備判事又ハ豫備檢事勤務中其裁判所ノ常備判事又ハ其檢事局ノ檢事ニ其職務ヲ取扱フ能ハサル事故アルトキハ其差支ノ原因カ事實上ニ出ツルト(病氣其他ノ事故ニテ實際裁判ニ預ルヲ得サルトキ)法律上ノモノト(判事又ハ檢事カ職務執行ヨリ除斥セラレ又ハ忌避セラレタルトキ)等ヲ問ハス之ニ代ルヘキ判事又ハ檢事アラサルトキニシテ其事件緊急ナリト認ルトキハ裁判所長ハ豫備判事又ハ豫備檢事ヲシテ之ヲ代理セシムルコトヲ得ヘク又司法大臣モ此命ヲ發スルコトヲ得然レトモ合議裁判所ノ判事ヲ代理セシムル場合ニ於テハ同時ニ二人以上ノ豫備判事ヲ填用スルコトヲ得ス(本法第三十二條)此制限アル所以ハ豫

備判事ハ欲員ヲ補充スルカ爲メニ豫備セラレ、者ナレハ合議部ノ正員ニアラ
ス正員ニアラサレハ自ラ審判スルノ職權ナシ之ヲ同時ニ二人以上列席裁判セ
シムルハ合議制ノ本義ニ悖ル所アレハナリ區裁判所ハ單獨ノ判事ヲ以テ裁判
事務ヲ攝行スルモノナレハ審判權ナキ豫備判事ニ之ヲ代理セシムルコトヲ得
ス審判權ナキ者裁判スルヲ得サルハ亦喋々ヲ要セス然レトモ豫備檢事ニ付テ
ハ會テ如此制限ナキノミナラス司法官試補ト雖モ檢事代理ヲ命セラレタレト
キハ獨立シテ其事ヲ行フ

判事

第一章 判事

判事檢事ハ其任用セラレ、資格準備ニ於テ異ナルナシト雖モ一タヒ任用セラ
レテ一ハ判事トナリ一ハ檢事トナルヤ其資格身分ニ於テ全ク相異ナル判事ハ
裁判所ニ於テ司法權ノ行使ニ從事シ檢事ハ國家ヲ代表シテ檢事ノ事務ニ從事
ス國家ヲ代表シテ檢事事務ニ從事スル檢事ハ裁判事務ヲ取扱フモノニアラサ
レハ亦是レ一ノ行政官吏ナリト雖モ判事ハ然ラス決シテ行政官ニアラス司法

權ヲ運用シテ其獨立ヲ維持スル任ニ當ルモノナリ故ニ憲法第五十八條ハ裁判
官ノ地位ヲ保證シテ曰ク「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ
任ス」裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒處分ニ由ルノ外其職務ヲ免セラレ、コトナ
シ「懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト故ニ裁判官ハ其任官終身ニシテ 天皇
ノ大權モ容易ニ之ヲ侵スコトヲ得サルモノトス蓋シ裁判官ニシテ容易ニ轉免
セラレ、コトヲ得ルニ於テハ人情其地位ニ掛念スルノ結果一身ノ安危ニ制セ
ラレテハ權勢威武ノ奴トナリテ公平無私ノ裁判ハ得テ望ム可キニ非サルカ故
ニ司法權獨立ノ實ヲ擧ケンニハ之カ機關タル裁判官ノ地位ヲ安全ナラシムル
ニ如クハナシ本法第六十七條及ヒ第七十三條ハ即チ此憲法ノ旨趣ヲ貫徹セシ
ムル所以ノモノニ外ナラス

此故ニ終身官タル裁判官ハ刑事裁判ノ宣告又ハ懲戒處分ニ依ルニアラサレハ
其意ニ反シテ轉官、轉所、免官、停職、減俸セラレ、コトナシ刑事裁判ノ宣告ニ由リ
テ其職ヲ失フハ固ヨリ當然ナリトス懲戒處分ハ裁判官タル者其職務上ノ義務
ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルカ官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタ

裁判所構成法

終身官
ノ結果

ル場合ニ於テ之ヲ行フモノニシテ其之ヲ行フニハ懲戒裁判ノ手續ニ依ラサル可カラス(明治二十三年八月法律第六十八號判事懲戒法參照)

尤モ轉所ニ至リテハ懲戒ノ處分ニ出テサルモ事實上ノ必要ヨリ之ヲ命セサル可ラサル場合アリ即豫備判事ヲ以テ欠員ヲ補充スルノ必要アル場合ニシテ蓋シ豫備判事トシテ勤務中ノ者ニ在テハ本來他ノ欠位ヲ補フ爲メニ備フルモノナレハ時ニ轉所ヲ命セラル、事アルモ是レ豫備判事タル者ノ當然任補上ノ便宜ニ出ルモノト云ハサルヲ得ス(第七十三條末段)

裁判官カ終身官タルヨリシテ左ノ如キ結果ヲ生ス可シ

第一 判事ノ職タルニ智能的ノ活動ヲ以テ事ニ當ルモノナレハ其身体若クハ精神ノ衰弱ニ依リテ其職務ニ堪ヘサルコトアラシク然レトモ之ヲシテ服職セシムルモ益ナシトテ免官スルハ違憲ノ行爲タリ故ニ此輩ニ對シテハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得(第七十四條)其退職ハ敢テ判事タルノ官ヲ免スルモノニ非ス

第二 新ニ法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ若クハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ

判事ノ任
補

其在勤セシ判事ヲ補スヘキ欠位アラサルトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ與ヘテ其欠位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス(第七十五條)

若シ此規定ナカラシムルノ權ヲ有ス(第七十五條)

ニ於テモ猶官等ニ俸給ヲ支給セサルヘカラス斯クテハ國庫ノ經濟ニ容易ナラサル影響ヲ及ボスカ故ニ司法大臣ニ半額ノ俸給ヲ與ヘテ其欠位ヲ待シムルノ權ヲ與ヘタリ然レトモ行政官吏ニ在テハ大ニ之ニ反シ若シ其奉仕スル官廳ニシテ法律ヲ以テ變更又ハ廢止セラレ其職員ニ冗餘ヲ生スルトキハ悉ク其職務ヲ解カルヘシ是レ亦判事タル終身官ト行政官トノ間ニ其趣ヲ異ニスル一端ヲ窺知スルニ足ル

判事ノ任補

判事ノ任補ニ付テハ大審院控訴院地方裁判所及ヒ區裁判所トノ間ニ異ナル所アルヲ以テ以下之ヲ四箇ニ區別シテ講説セントス

第一 大審院長各控訴院長及大審院部長ノ任補

大審院長ハ帝國最高等裁判所長ニシテ其任務ノ重且大ナル司法權ノ獨立法律